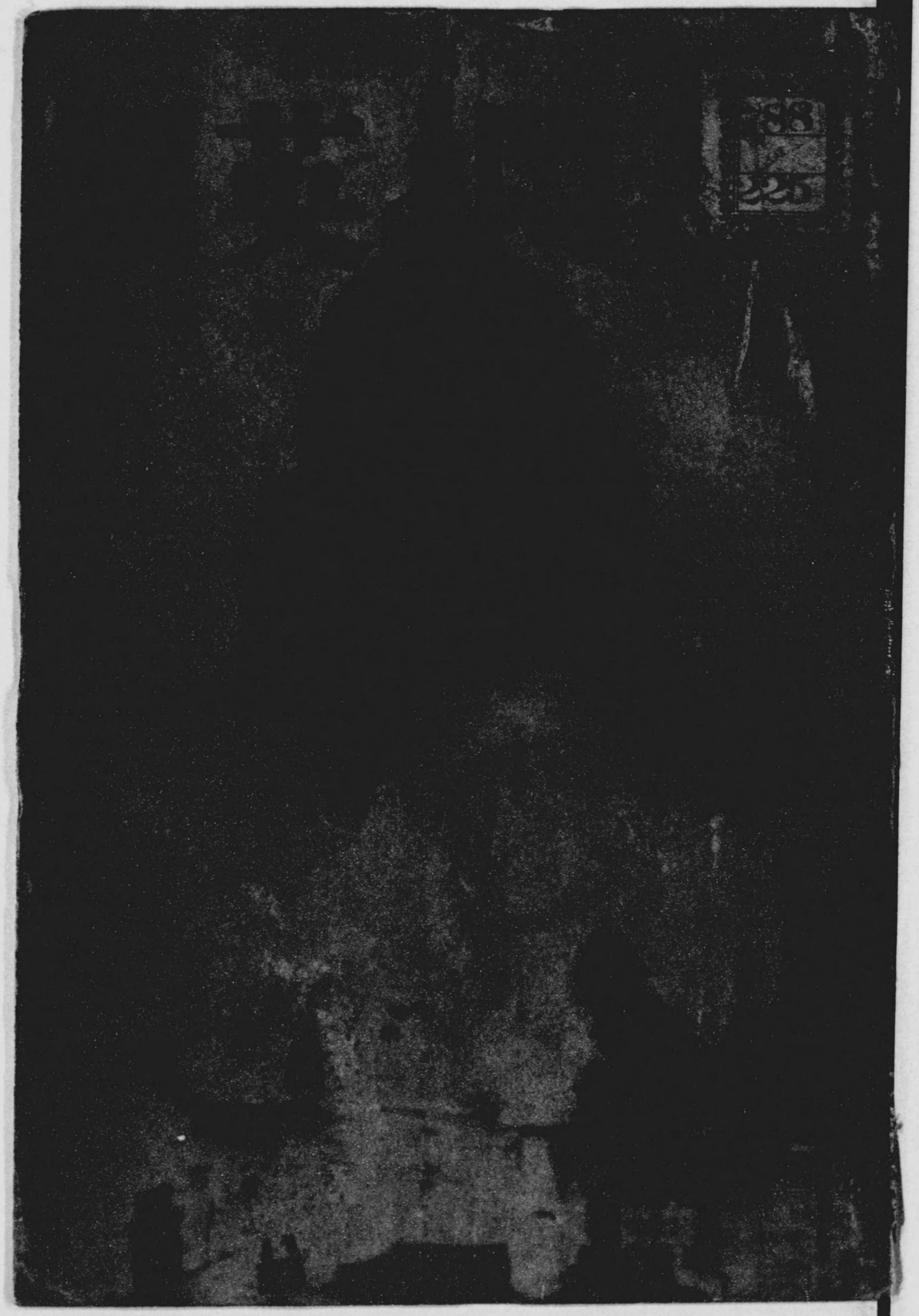


①

0000813000

0000813-000

788－225

苦悶の英国

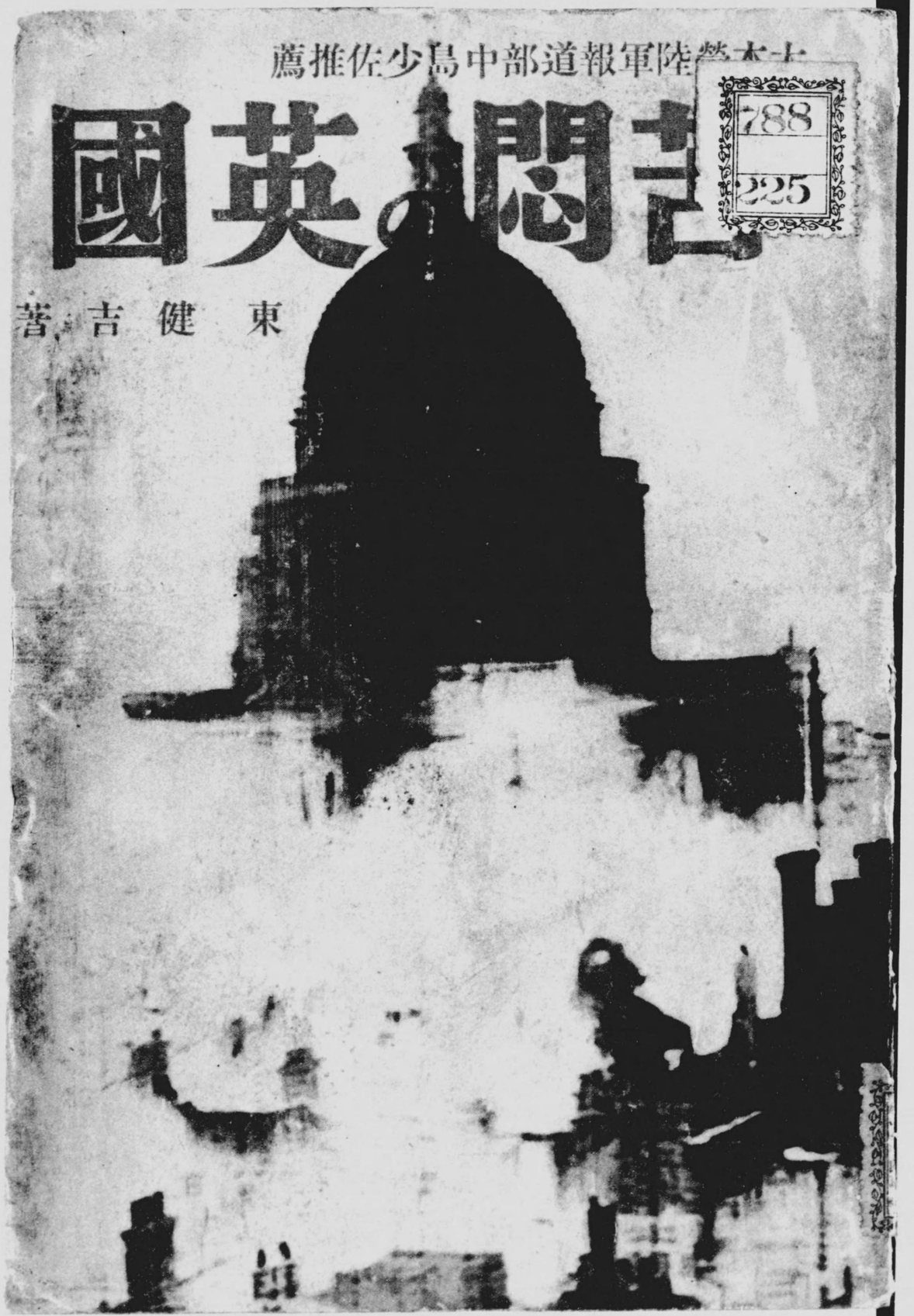
東健吉・著

ふたら書房

昭１５

AAB

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２日
けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです



788
225

460

東健吉著

苦悶の英國

東京 ふたら書房

昭和十五年十一月廿四日 納本

788
225

序

『敵ヲ知リ己ヲ知ルモノハ百戰殆カラス』と言ふが、英國打倒を希ふものは、先づ英國の實力を檢討し、彼の長所短所を把握する必要があらう。

この意味に於て本書は、英國の經濟力を詳述し、戰時體制の近情を紹介し、更に軍事にまで批判を加へて餘す所がない。

英國研究の參考として敢て江湖の一讀を薦む。

大本營陸軍報道部
中島少佐

序

勝つか負けるか。英國はいつまで戰へるか。明日の英國はどうなるか。これらに關して吾々現代人は最大の關心を寄せてゐる。英國が、過去百五十年に亘り、世界國家群の王座に君臨して日沒するなき威力を發揮してゐた事は、否定できない事實である。しかしながら世界新秩序建設に邁進する新興國家群の興起によつて、曾ての輝かしい地位から轉落しつゝある事も否定出來ぬところであらう。こゝに英國の苦悶がある。かゝる立場に置かれてゐる英國が、現にどれだけの實力を備へてゐるかといふことは、今後の世界動向を判斷する基礎となるべきは當然である。この意味で、私は全力を盡して、最新の材料を集め、英國の經濟、產業、政治および軍備等、あらゆる角度から考察し正確なる認識を得ることを目標として研究を進めた。之をつきとめるに當つては、英國、獨逸、米國等の最近の著書雜誌その他によつた。公正妥當なる批判的態度を堅持せんことを力めたが、目下英國は戰時狀態に在るので、各方面に亘つて正確なる數字を記すことは頗る困難である故、妥當と考へられる數字の輪廓

を擧げるに止めたところも多い。この點については、讀者各位の之を諒とせられん事を願ふ次第である。

とまれ、本書が苦悶する英國を解剖し、その眞の實力の判定に資し、東亞共榮圈確立の大任を負ふ吾々日本人に、何らかの寄與をなし得るならば、望外の幸とするところである。

昭和十五年十二月

東　健　吉

主要參考書

G. D. H. Cole:—War Aims.
Sir Herbert Russel:—Sea Warfare Today.
Pückler:—How Strong Is Britain.
C. C. Turner:—How The Airforce Defends Us.

目次

序……一
第一章　富める國イギリス……一二
一　近代戰爭の勝因……一二
二　驕れる英國人……一三
第二章　工業國イギリス……一六
一　最古の工業國……一六
二　英國の石炭業……一九
三　鐵並に鋼鐵工業……二一
四　機械工業―蒸汽機關……二六
五　英國の造船業……二七
六　自動車工業……三〇
七　綿糸紡績……三三
八　工業力の概觀……三五

第三章　惱み多き食糧確保……三八
一　衰頽せる英國農業……三八
二　農產物・蓄產物……四一
三　食糧保有策……四五
四　對外政策の根本……四八
第四章　七つの海を支配して……四八
一　海は英國の生命線……四八
二　前大戰と海運……五〇
三　制海力と海運……五三
四　貿易と海運……五五
五　英國今後の海運……五七
第五章　ロンドンは世界銀行の銀行か……六〇
一　世界の富を吸ふロンドン……六〇
二　海外投資と貸付……六〇
三　世界貿易の仲介……六二

四　英國富力の減少……六五
第六章　見えざる帝國の威力……六七
一　英國の海外投資……六七
二　海外投資の縮少……六七
三　苦境に立つ英國……七〇
四　軍費と海外投資……七二
第七章　英國の經濟力とその缺陷……七九
一　開戰當初の英財政……七九
二　財政と貿易額……八二
三　物價騰貴と經濟危機……八四
四　代用品の發明と貿易の危機……八七
五　自給自足經濟と英國の轉落……八九
六　輸出振興と英の經濟力……九一
第八章　英國海軍の戰鬪力……九四
一　大戰勃發と獨英……九四
二　貿易は軍艦旗と共に……九七
三　獨英の海軍作戰……九九
四　空襲と大艦主義……一〇二
五　主力艦・巡洋艦の作戰……一〇五
六　前大戰の教訓と巡洋艦……一〇九
七　英巡洋艦と裝備……一一
八　シュベー號をめぐつて……一一四
九　驅逐艦と潛水艦……一一六
一〇　航空母艦と潛水艦……一一一
一一　獨の水雷、爆彈、機雷に備へて……一二四
一二　商船護衛艦……一二七
一三　英艦の編成と新鋭武器……一二八
一四　英海軍今後の戰果……一三〇
第九章　英國の空軍と防衛……一三三
一　防空に苦惱する英國……一三三

二　ロンドン空襲を豫想して……一三四
三　空襲防衛の二方面……一三八
四　阻塞氣球とその威力……一三九
五　ロンドンと阻塞氣球……一四三
六　對空監視隊と照空燈……一四六
七　高射砲と戰鬪機……一四八
八　獨英の空軍機數……一五〇
九　獨英の第一線機數……一五三
一〇　英の航空兵力量……一五六
一一　英空軍とトレンチャード……一五九
一二　ロンドン空襲と防空……一六〇
一三　爆彈、燒夷彈と海軍機……一六四
一四　本土防衛と大陸作戰……一六六

第十章　英國はいつまで戰へるか……一六八

一　今次大戰と英國……一六八

二　獨の軍備再建と英國……一七一
三　英佛陸軍の大陸敗退……一七三
四　英海軍と制海權……一七六
五　ドイツの潛水艦戰術……一八〇
六　地中海制海權と獨のゲリラ戰術……一八二
七　ロンドン空襲と英本土上陸作戰……一八六
八　英本土强行上陸……一九〇
九　英人の特性と植民政策……一九四
一〇　英の寶庫インドと民心離反……一九六
一一　第二の植民地爭奪戰……二〇〇
一二　獨英衝突の必然性……二〇三
一三　四大經濟の動向と英米の力量……二〇五
一四　英國侮りがたし……二〇九

第一章　富める國イギリス

一　近代戰爭の勝因

近代戰爭の勝敗が一に經濟力によつて決せられるとは人の屢々いふところである。第二次歐洲大戰こそ、その最もよい例證となるであらう。チエンバレン氏は言つてゐる。「事實、戰爭は兵器と人によつて勝つだけでなく、物資の充實と信用とによつて勝つのである。これが國家の生存力である。國家の生存力は、產業と經濟機構全般の確保によつて成り立つ。それは英國史の證明する所である。」これは確に眞理を表はす言葉であらう。近代戰爭に於て經濟力が如何に重大なる勝因となるかは、もはや何人も疑はぬ所である。

英帝國の富力が國家總力量の重大なる要素をなしてゐる事はいふまでもない。英國の陸、海、空軍の兵力量については、相當詳細なる數字を擧げることが出來るし、その戰艦の數を

あげ、歩兵の獨立部隊の總數を調べ、空軍の總機數・高射砲の陣容、海軍基地の作戰的價値を研究することも比較的容易である。しかし、その經濟力を表はす數字に至つては困難複雜であつて正確はなか〳〵期しがたい。

英國はその優勢なる海軍力により、敵國に對して世界の物的資源を封じ、總てを自國に持込むことが出來る。又その絶大なる信用により、戰時中といへども、各國からの物資の購入に事缺かぬ。その上、英帝國内の總資源を見るとき、原料資材に於ては世界の最優位を占めてゐる。もちろんソ聯と米國が稍々これに近い事は認めねばならぬけれども——。是によつて英國は時には强力なる味方ともなり、時には恐るべき敵ともなるのである。併し、これはしばらく措いて、今日ロンドンが如何に富裕であるかについて述べることとしよう。

二　驕れる英國人

現在、英國人の總ては、ロンドンの資本が政治的武器として頗る重大性を持つことを認めてゐるであらう。英帝國に不利に傾きつゝある世界政治の問題がある時、英人は、結局はロンドンの經濟力によつて、英國の勝利に終るものと樂觀してゐる。例へば、ムソリーニは英國政府の意志に反して、エチオピア征服を敢行したが、英國の資本と結託することによつてのみ、これを完うすることが出來ると信じてゐる。またフランコ將軍は英國の認容を得ずして戰に勝つても、最後には、荒廢したスペインの再建のために、腰を低うしてロンドンを訪はねばなるまい、との流説すらあつたやうな有樣である。また英國の權益を犯した日本は、極東の復興のため英國の資本を要するとして、高をくくつてゐる英人も、相當にあるのである。とにかく英人は英帝國の富力が國防の第二線であり、最後の勝因であると信じてゐる。かつて世界の歴史は英人の信ずる通り動いて來たが將來は果してどうであらうか。

英國の富力が世界の舊秩序を支へる一本の脚となつてゐることは明である。その富力は、十八世紀初頭のロバート・ウオルポールの言葉を借りて云へば、他國を「買收」したばかりでなく、英獨特の海賊的行爲によつて、世界の大半を占領してしまつたのである。その獨占した優位な物的資源の保有者たることにより、軍事的制裁の武器を持ち出すまでもなく、はるかに有利な經濟的獨占の地位に納まり返つてゐるのである。

まことに英國は富めることにより、世界各國にとつて第一の最も大切な御得意先となつてゐる。アルゼンチン、カナダ、デンマークの農夫、南アフリカ、スエーデン、スペイン、モロッコの鑛夫、日本の養蠶家、アメリカの工作機械の製作業者、フランスの洋服屋と香水の製造師等、それらの全部が英國へ賣込むことを覗つてゐる。かつ全世界の輸出業者は、ロンドンの金融機關の御蔭を蒙つてゐる。これらの事實を以てすれば、全世界の工業者、農夫、商人等は、凡て英國に協力してゐると見ることも出來る。生産問題よりも市場問題の方が、重要性をもつとすれば、富裕なる得意先を愛護し助長しようと考へる事もあながち無理ではないからである。それに英國は世界一の投資國でもある。

英國の經濟力の基礎は工業ならびに農業資源の國内産出にある。この生産が大なれば大なる程、國民の欲求を充足し、富を增進し、海外よりの資材輸入を減じ、從つて海外投資力を高めることになる。

これらの條件、即ち農工業の生産價値、銀行の利得および預金、海外に於ける長期の投資等が合算されて、今日の英國の富力をなしてゐる。この狀態は曾てさうであつた如く現在も同一であるか。或は變化しつゝあるか、あるとすれば、良い方へか惡い方へか。

第二章　工業國イギリス

一　最古の工業國

英國は世界最古の工業國である。他の國に先んじて、職人の手仕事を止め、家内工業を廢して、機械工業に轉じ、一般市場向きの日用品の大量生産に進んだ。勞働の分業が他のどの國よりも一歩先んじて行はれた。熟練工によつて精細なる生産過程の分類が實行された。機械化の生産の第一人者は英國である。

その始期は、十八世紀の昔にもさかのぼるが、ナポレオン戰爭の後に至つて、次第に隆盛に赴いた。十九世紀末期の英國の産業體勢を規制したのは一八一五年と見てよからう。一八一五年から一八七一年末まで英國の富は年毎に上昇し、その生産能力に於ては、常に列國の先頭に立つてゐた。その上、一般生活は未だ華美に流れず、低廉なる生活費は、生産の增加

に伴つて、いよ〳〵國の富力を高め、これに從つて海外投資が增加し、その利益は、世界の生産の進展、貿易の上昇、原料需要の增求などと平行して行つた。この時期、卽ち十九世紀が英國の肥滿して行つた最盛時で、第一次大戰の始めまで、大體に於て順調に進んだのであつた。

しかし普佛戰爭後、他の列國も漸く競爭場裡に現はれて來た。英國の獨占舞臺であつた分野に、新しく登場して來たのであつる。しかしながら英國の資本家群にとつては、さばかりの競爭者に注意をはらふ必要もなかつた。その産業發展の最初の數年に於ては、彼らは世界市場に於て最も有望と思はれる商品の生産に全力を注ぐ事にのみ沒頭し、その産業が英國に取つて果して適當してゐるか否かについてさへ注意を拂ふいとまもなかつた。

その最もよい例證は、ランカシヤの綿糸紡績である。英國の全産業の分野が、この生産部門にのみ集中され、近代機械化の方法を採用して、日本、印度の如き家内工業を死滅せしめ完全に王者の地位を占めたのである。それも是も他の諸國に於て、近代的機構の生産に赴くのが後れたからであつた。しかし列國が、これを始めると、早くも英國の紡績業は衰微の兆

候を示して來たのである。

十九世紀の末葉、英國ではその農業を犧牲にして發展して行つた幾つかの産業によつて世界市場を牛耳つて了つた。このため英國の農業はすつかり衰退し、その工業生産品を捌くことによつて、海外から食料品を獲得せねばならなくなつ來た。かくて英國は、食糧に關しては、外國依存の形體を取るに至つたのである。

もと〳〵英國の獨占的地位は、他國が所有せざる生産資源に基づくものではなかつた。例へば、獨逸の石炭は生産量が高いものと見られる。英國の石炭の産出量についてみると、英國の鑛夫の腕が特に獨佛のそれに比して、優秀と云ふわけではない。また經濟指導者の指導性に於て組織的といふわけでもない。大陸および米國の生産方面を檢討すると――これは近年急に進んだものであるが――その指導計畫に於いては、多分に合理性が認められる。それ故、舊態依然たる傳統を墨守する英國の業者は、これには立ち打ちが出來ぬことになるであらう。

英國の世界市場の獨占的地位は、時間的に先んじたといふだけである。十九世紀の末から現に二十世紀にかけて、他の列國が次第に英國の地位を低くして來た。列國ことに獨逸およびアメリカの新産業機構が出現してからは、英國の業者のそれは陳腐なものとなつてしまつた。これは英國産業界全般の樣相である。英國經濟の脊柱である産業は、誠にかくの如き歩みをつゞけつゝあるのである。

二　英國の石炭業

しかし英國の石炭業は誠に重要なものである。はじめ大規模の石炭産出が計畫され、これが英國工業の第一聲となつた。石炭が蒸氣力を供給する。そして工場の車輪を廻轉する。また石炭は製鐵業を起す、汽車をはしらせ汽船をはしらせる。それによつて英國で生産した物資を海外市場へ運び、農産物や諸原料を持ちかへる。次に石炭の輸出は、更に重大な意義を持つ。英國の港を出てゆく汽船の倉庫を石炭によつて充たし、依つて、歸航の運送費を低廉ならしめた。なほ英國の重要産業は石炭生産區域に勃興してゐる。從つて生産費はより一そう安くなる。この石炭生産は英國に於ては、堅實な歩みを見せ、十九世紀の初期には、年産

一千萬トンに及び、更に一九一三年卽ち世界大戰の勃發前には、二億八千七百萬トンに達してゐる。英國產業の一高峯である一八七〇年には、石炭輸出量は年一千萬トンを算し、一九一三年には、九千八百萬トンを示してゐる。一九一三年には產出石炭の大體三分の一が輸出せられ、輸出入の均等化に貢獻したのである。英國の炭鑛床は一般に海岸に近い、これは大へん運の良いことである。このため英國の石炭を獨逸のバルト海沿岸の都市に運ぶ方が、獨逸の石炭を汽車で西部ドイツや上部シレシヤから運ぶよりも低廉であつたのである。

けれども世界大戰後、かくも世界一を誇つた石炭生產額の王座が崩れてしまつた。その後は絕對に一九一三年の巨額には達しないのである。一九二九年には年產二億五千八百萬トン一九三七年には二億四千百萬トンを算したが、それは異數の記錄である。

この石炭產出方面の業績が近年、不振を示してゐる原因は、英國產業全般のそれと相通ずるものである。それは非經濟的計畫と非合理的な生產にあると見てよい。卽ち、戰前の平穩な經濟界の麗日がつゞく內は良かつたが、戰後世界が窮乏のどん底に陷るや、世界市場の暴風雨は烈しく、列國はいづれも自國の產業の復活につとめ、以前の輸入を止め、自己生產に依つて立ち直らうと努力して來た。そのため英國は急に得意先を失つたのである。米國の石炭大ストラーイキも一時的の希望を與へたのみで、次第に沈みゆく石炭生產の頹勢は如何とも仕方がなかつた。外國の生產が增大してくる。水力の開發、石油の登場によつていよいよ不振に陷つた。蒸氣機關がディゼルエンヂンと交替する。トラックが發達して鐵道運輸が減少し、從つて石炭消費がへつてくる。海軍でも石油が石炭の地位を奪つてくる。現在海運界では四六・五%の石炭を使つてゐるだけである。これに加へて獨逸等の近代機構の石炭增產設備の出現である。英國は今や全く昔日の面影はないのである。近年英國の議會で埋藏石炭に對する個々の業者の權利を制限し、次第に業者を統合して復興を計つてゐるが、これについても問題は將來に殘されてゐる。

三　鐵並に鋼鐵工業

英國の石炭產出の前途には疑問符を打たねばならぬが、現在の英國の製鐵業は、これと全く異つてゐる。製鐵業は石炭と同樣、衰微し殘存してゐたが、最近急に强化せられ、復興し

てきた。そして平時に於て相當な成績を上げてゐる以上、戰時に於ては、格段の業績を示すものと見なくてはならない。鐵並びに鋼鐵の工業は可なりひどい衰頽期を通つて、最近やうやく明るみへ出て來たのであるが、この經過には充分注意を拂ふ必要があらう。

鋼鐵が燐を含有せぬ鑛石から精製せられてゐた間、列國は鋼鐵資源をみな英國に仰いでゐた。これを英國はふんだんに所有してゐたのである。併し一八八〇年頃になつて獨逸ローレン州の燐を含有してゐる鑛石から鋼鐵を製造することが發見せられて以來、急速にドイツが進歩を遂げ、一九一三年には、英國の約二倍を生産するに至つた。また一八九〇年頃から、米國の銑鐵が增産せられて來た。

さて、英國は前に述べた石炭の場合と同じく、製鐵に際しても、近代的技術を取入れず、列國に競爭者が出ても、販賣並に統制を顧みずに來た。勿論大戰中は、英國の重工業は、擴大せられ、生産は增加したが、生産費に顧慮を與へなかつた爲、戰後は轉落を急ぐのみであつた。加ふるに英國は金本位に復歸してゐる。これが又世界市場の爭覇に不利ならしめた。一九二九年の經濟危機の際、英國の重工業は破産を豫想せられ、一九三〇年および一九三一年の銑鐵と鋼鐵の生産は、一九二九年の約半額になつてしまつた。

次に重工業方面の輸出を見ることとする。一八八〇年から一九〇〇年末までは、それは大陸の壓迫によつて衰へたが、二十世紀と共に始まつた好況によつてもり返して來た。そしてどうにかその獨自の地位を保つてきた。一九一二年から一九一三年までの獨逸の銑鐵及鋼鐵の輸出は、英國のそれに勝る。大戰後は、英國の銑鐵並に鋼鐵の輸出は、著しく減少し、銑鐵及鋼鐵製品の輸入が增大した。この減少が急に最近に至り、著しい增産に轉じた。即ち一九三七年には一九三二年の二倍以上に上り、一九一三年の記錄をさへ破つてゐる。これは一體どうしたことであらうか。これについては充分なる研究が必要であらう。

こゝに二つの要因が考へられる。即ち第一に英國政府の重工業の奬勵である。第二に再軍備のための鋼鐵の莫大なる需要である。そして政府の奬勵および指導が非常なる成果を擧げてゐる。これは心に留むべきことであらう。重工業の再編成については久しく論ぜられてゐた。而も實質的結論に到達しなかつたが、一九三二年の春になつて、政府は腹をきめ、三月には三十三パーセント三分の一の輸入税を決定した。即ち鐵および鋼鐵製品に對して全般に

課税したのである。

この制度は、財界の不況期に幾何の効果を上げるか、急に効果を上げるものとも思はれぬが、といつて、この組織と價格の規正、カルテルの合同、生産の中央への集中を見る時、英國の製鐵並に鋼鐵工業の前途が芳しくないとする理由もないのである。そして再軍備に取りかゝつた英國が、以前の英國とは面目を一新して、莫大なる鋼鐵を要することは明であり、一九二七年から一九三三年に亘るやうな業界の不振を見るとも思へぬのである。つまり重工業界の振興は、舊式の過程と極端に高い生産費とを要した無統制無企劃の時代を脱した事を證明するものであり、これが今後の英國の實力の尺度と考へられる。この英國の戰時並に平時の純粋の重工業につき、鐵礦の事を一言したい。重工業は鐵礦の充足されたる供給なしには絶對に發達もしないし、また効果も上げ得ない。第一に英國には鐵鑛床が多數にあるが、含鐵量の少い鑛床が最近に至つて、開發されて來た。リンカーン州のコービーに於ける巨大なる鑛床がブラサート技師によつて開かれたが、これはドイツ人の援助も加はつてゐる。それから最近、屑鐵の組織的なる蒐集が開始せられ、極めて順調に進捗し、これはむしろ鐵鑛の生産よりも、重要なものとなつた。

最近十年間に於ては、英國所要の鐵礦の三分の一は、海外から輸入せられてゐる。これは英國としては餘りにも巨大なる輸入であつた。だが、一九三七年に至つては、特に巨額な生産が、一九一三年よりもはるかに少い輸入によつて成し遂げられた。この點で英國はその獨立を強化したわけである。

また一方、以前には英國の輸入鐵礦の過半はスペインから入つてゐたのであるが、最近では、作戰關係及び戰略上から見て、鐵礦の海外依存は、最早許されなくなつて來た。現在では、唯一の巨大な輸入品、即ちこの鐵礦の三分の一は、スエーデンのものを、ノールウエーの港から積みこんで來る。所がスペインの内亂以來、英國へ行く鐵礦の分量は、七分の一に減少してしまつた。ナルビークから積み出す、北部スエーデンの鐵礦が果然重要性を加へたのは無理もない事で、これは、ドイツと猛烈な競爭をやり、力めて獨逸を排除しようと、努力してゐる。そして、この礦石はバルト海を通つて英國へ直送されるのである。

一九三七年には、北アフリカは、英國への鐵鑛輸出國としては第二位を占めてゐたが、ス

ペインはその次位に落ちてしまつた。今後、英國はこの資源の開拓に全力を盡すべく、ニューフアウンドランドの生産が倍加せられた今日、そしてまた北海の先にある鑛石をあてにする事が戰略上不利であるとすれば、スペイン方面の鑛石を如何にして、英國へ導入するかゞ重大な問題であらう。

四　機械工業――蒸汽機關

英國の機械工業は列國に比し一歩はやく開始せられてゐる。最初の蒸氣機關は英國に於て工作せられ、英國の紡績工場に、その大規模のものが据えつけられた。この機械工業の進歩については、我々は適當な數字を持ち合せないが、他の方面と歩調を一にしてゐると思はれる。そして他の追隨者が少いため、最も有利な機械工作に專念し、蒸汽機關、機關車、蒸汽タービン、農業用機械、紡績機械等の製作に力を集中した。

しかし程なく英國の二大强敵が現はれた。一は米國であり一はドイツである。特殊種目にのみ專念してゐた英國は、近代技術の先頭を保つことが出來なかつた。近代的の新製作品が要求されてくる。蒸氣機關は、内燃機關や電氣機關に置きかへられてくる。このため、舊態を墨守してゐた英國は、世界市場の優位を失つて來、如何に新製作機關を動員しても、世界市場への供給を確保しえない。今日、英國の機械工業は、從業員と生産額との二方面に於ては、大戰前に勝るとは云ひうる。併し英國の立場及びその國力から見て、英國工業生産は、海外市場に對するよりも、むしろ國内的のものと思考される。

從つて輸出について云ふと、一九二四年には、一九一三年の三分の一を減じてゐる。その後多少の高低はあつても、今回の戰爭前の最高の年が、前大戰の直前の年の額まで達してゐない。然るにドイツの機械工業生産の輸出は、英國の一九三〇年の二倍にも及んでゐる。

五　英國の造船業

英國の機械工業の一大要目は造船である。英國では造船工業が列國を凌いでゐるが、之は海國の民として當然なことであらう。十九世紀の末、他の工業分野に於ては、列國の壓迫が加はつて來たにも係らず、造船だけは世界の最優位を保持してゐた。世界で建造された船舶

の中約九割は英國の製作であつた。世界大戰の直前に於てすら、六十一パーセントを保持してゐた。それで世界大戰後は、造船界は列國に比し次第に衰頽して行つた。年々船舶の建造數が變つて來る。大戰末期は巨大なトン數が要求されてゐたのが、戰後の極端な轉落に遭遇し、一九二七年から一九三〇年にかけて漸く回復期に入つたのだ。この時期には、世界の進水船舶總トン數は戰前の總和より巨大であつたにも係らず、英國の造船界は以前の態勢を取り戻しえなかつた。

英國の造船工業は世界貿易の景況により左右せられる。第一に海外から、英國造船所へ注文せられる船舶の數である。第二には、海外貿易の總量である。一九二九年の世界危機の結果、世界全般の貿易が衰へ、英國造船所の多くが閉鎖された。一九三〇年に閉鎖された造船所は百六十にも及んでゐる。

さてこの造船需要量も、戰前のそれに一寸到達しないであらう。これからは、船の速力が增大される。積荷設備が改善され、同一の輸送量に對しては、より少數の船で間に合ふことになる。一九三七年に英國で建造中の總トン數は百十萬トンであり、一九一三年には二百萬トンにも達してゐるのと比較してもらひたい。一九三二年には二十三萬トン位なのも注意すべきである。併し英國海軍の總トン數は、再軍備の初頭に於て增大されて居り、それの完成後には更に增强せられるであらう。

この造船能力は英國の軍備と重大な關係がある。英國が世界の造船王である限り、戰時の損失艦のトン數を之で埋めることが出來る。巨大なるトン數の保有力が、海國民の戰時の實力の尺度である。また現在では空軍の發達により、航行船舶の危險も高まつて來る。これによつて戰時の船舶のトン數は尙一そう巨大なる量が要求されるのである。

英國は優秀船舶の建造を誇りとしてゐる。英國の造船技術を疑ふものは先づないであらうが、最早技術獨占の時代ではないのである。世界大戰前に於てすら、ドイツは大西洋航路の最大にして且つ近代式の優秀船を有してゐた。現代に於てもブレーメン號、オイローパー號は一流のものである。一九三四年にクキーンメアリ號の進水するや、全世界が、英國の造船技術に眼を見張つたが、程なく佛のノルマンヂー號が進水して、その地位を奪つてしまつたのである。

六　自動車工業

次に英國の重大な部門として自動車工業を見よう。これは列國より先んずることもなかつたが、また舊式設備のための不振といふこともなかつたので大變興味がある。この分野に於ける王者は米國であらう。それは、開發當初から近代裝備を以てし、また國内に廣大なる市場を有してゐたため、忽ちにして世界の一位を占めてしまつたのは人の知る所である。

英國の自動車工業は、その進歩がドイツのそれに似てゐる。英國に於ては、やはり舊式の理念に支配せられ、ヘンリー・フォードの一九〇八年頃行つたやうな、大量生産を行はず、即ち同一規格の部分品を多量に迅速に作製することもなく、個人の趣味に基づいて非大衆的な高級品を作つたため、英國の自動車は、高級な贅澤品となつてしまつた。

世界大戰がこの工業分野の進展を止めてしまつた故、米國がその王位を占めたのも自然であつた。そして自動車の輸出では、米國が最高位に立つてしまつた。英國ではこの危險に感じ、政府に於て保護政策を取るに至り、辛うじて立つて行く狀態であつた。

大戰後モリス工場の如きものは、アメリカの大量生産の工程を採用し、數種の廉價なる自動車のみに力を集中したので、一九二八年には英國の全産額の四分の三以上が、三工場より生産せられ、他の四分の一は約四十の工場の所産となつて來た。これによつて大量生産と特殊生産とが明確に區別されてきた。かくして英國の自動車工業は、好況を呈してゐる。一九二三年には七萬一千臺から、一九二九年には十八萬二千臺へと飛躍してゐる。そして一九二九年の經濟危機にも、大した影響を受けてゐない。一九三一年には、約十六萬臺に下降したが、一九三七年には、三十九萬臺に上昇した。そして英國の自動車の輸出貿易はどうかと云ふと、内燃機關の發達が英國の獨自の生産品即ち蒸汽機關の如きものを、世界の市場から追ひ出してしまつた。それで之に自動車が代ればよかつたのであるが、事實は、之と反したのである。輸出入の均衡から云ふと、輸出の減少を示してゐる。一九一三年には、英國生産の四分の一が輸出されたのだが、大戰に入るや、これが全く停止し、戰後の英國は、英帝國内の市場へ賣り込み得るだけであつた。これは米國の自動車に壓倒されたからである。一九二六年から一九二九年にかけて英國は、輸入する自動車數と輸出する數とが、殆んど匹敵する

位になつてしまつた。しかしながらその後、英國の自動車工業は堅實に進歩し、一九三七年に於ては、輸出は大たい輸入の五倍にもなつてきた。

技術的に見て英國の自動車工業は殆んどその頂點に達してゐる。ロルズロイスの製品は、世界一流のものである。併し一般の大量生産の自動車は、アメリカ・ドイツ、フランスの水準に到底達しえない。これは英國の平坦な道路を規準にしたことにもよる。

七　綿糸紡績

英國の綿製品輸出量は、全輸出量の半にも及んだ時代があつた。しかしこれは百年前の事である。當つては、これによつて巨大な利益を擧げ、これが海外投資の基礎となつたのである。その頃には、支那や印度の勞働者が、ランカシヤ、リバプール、マンチエスター製の綿の下着をつけたものであつた。

英國の綿糸紡績の工業成果は如何。一八〇〇年には英國の工場は、五千六百萬ポンドの原綿を消費した。二十年後には、一億五千二百萬ポンドに進んだ。十九世紀の半には、七億ポンドになり、十九世紀の末には、約十六億ポンドを算し、大戰直前には　二十億ポンドに達した。そして一九一三年には、この四分の三が輸出された。最初は大部分が歐洲へ向つたのだが、一八八〇年頃から以後、近東及び極東の廣大なる市場が開拓せられたのである。

なほ英國が紡績業に機械を用ひたことも特筆するに足るのである。世界最初の紡績機械が英國に据えつけられ、婦女子の低廉な勞働によつて經營された。

しかし衰頽の日も早晩來るべき運命であつた。大戰前早くもその徵候が現はれてきたのである。綿糸の輸出は、今日では大戰前の四分の三であるが綿製品は三分の一になつてゐる。大戰前には全世界の綿製品の輸出總量の六十五パーセントを占めた英國も今では三十パーセント位であらう。

大戰前早くも世界各方面に紡績業が勃興してきた。極東に起つた我日本の紡績業が英國の市場を奪つて行つたのは云ふまでもないことである。そこで英國では高級品の製作にのりだし、ドイツ、オランダ、西部並びに南部アフリカ及びオーストリヤをその顧客としてゐる。

第一次大戰後の好況、賃金の暴騰　經濟危機の際の紡績業に對する過信等が重なり重なつ

て現在の沒落に及んだことも詳說を要しないであらう。最早ランカシヤが昔日の勢威を取り戻すことが出來ると考へてゐるものは一人もないであらう。

羊毛製品工業は之と根本的に異つてゐる。もと〳〵之は國產の羊毛を原料としてゐたが、一八三〇年からは大體オーストラリヤの羊毛に置きかへられてしまつた。大戰前までは誠に堅實な歩みをつゞけ、英國製の羅紗は世界の信用を集めてゐた。そして大戰後もその進路を過たず、それに列國も羊毛の分野に於ては發達しなかつたので、この方面では英國は有利な地位に立つてゐる。けれども大戰後は人絹の發達により、業界は大打擊を受けたのである。一九二四年には英國の羊毛製品は大戰前のそれより減少してゐる。そして歐洲への輸出が劇減したので、それを東洋方面へ向けて來たのである。併しこの新しい市場も、永久に確實なものとは云ひ難く、一九二四年には輸出は又々減少し、經濟危機に於ては戰前の半に下つてしまつた。その後は漸時回復を示し、一九三七年には、大たい戰前の四分の三まで漕ぎつけた。さて現在、人絹、スフ等の人工的羊毛品の進歩により、この頽勢を盛り返すか、どうか大なる問題であらう。

以上で英國の主要なる產業を述べたわけである。石炭業、綿工業、機械工業、造船業は皆思はしからず、鐵並に鋼鐵工業のみが有望とせられてゐる。

次に新興工業を見てゆかう。新種の工業の勃興以來、これに從事する工員の數は、舊種のそれに從事するものに匹敵しようとしてゐる。大戰の末期以來、人絹、電氣、自動車、工作機械、機具、食料品、飲料品製造の從業員は增加してきた。もし從業員の數によつてその工業の順位を定めるならば、石炭業、機械工業、綿糸紡績、印刷、出版、自動車、羊毛加工となるであらう。

八　工業力の概觀

さて舊種目の工業が沒落し、新種目のそれが進展したが、舊種目のものは主として輸出向のものであるため、輸出額が減少したのは止むを得ない。併しそのため、工業界全般として生產が減少したと見るのは早計である。今日、英國の底力は侮りがたく、一朝開戰すれば、大戰前の生產量よりはるかに巨大なる生產の能力を有してゐる。

世界大戰前には、英國の工業は重要なる進歩を示してゐるが、これはだん〳〵に速度を奪はれ、經濟界の不振によつて一九一三年を頂點として衰へて行つた。そしてこの沈滯が一旦清算された如く見えたのであつた。

英國の經驗した損失並に、その經濟的地位の轉落は、全般的生産高の減少によるものとは限らぬ、これは國内市場目當の生産が進展したのに對し、海外輸出向の生産が減少したからである。

これについては理由が二つ考へられる。大戰後には海外市場向きの生産は利益が少いのに反し、國内需要を充足する生産部門が有利に展開してきたからである。前に述べた如く、英國の舊式な生産方法、列國の競爭、價格の暴落により到底對抗出來なくなつたからである。

更にまた自給自足經濟の傾向、物々交換、代用品の創案、石油合成の研究等も、その要素をなしてゐる。この石油合成が英國の石炭工業を破壞し、また人絹、人造纖維等も英國に影響するところ大であつた。

國家の收益が增大し、國内市場むき生産に當る方が利得が多くなり、從つて生活程度が向上し、日用品並に贅澤品の需要が高まつて來て、その從業員が增加してきた。これを要約するに、英國の大戰前の工業と近年の工業とを比較すると、稍々增加した總量が一部分輸出せられ、大部分は國内で消費せれてしまつてゐる。英國の經濟力は、海外からの收益に依存してゐる以上、英國の工業は、戰後の進展に禍されてゐると見るべきである。

第三章　惱み多き食糧確保

一　衰頽せる英國農業

英本國は小さく、土地の餘裕のない所と思はれてゐる。イングランド、ウエイルス、スコツトランド及びアイルランド北部は、獨逸よりもはるかに人口の密度大である。獨逸人が三十四人住んでゐる地域に、英人は五十人住んでゐる。しかも相當の農耕地を所有してゐるのである。綠の原野をさまようことも出來るし、荒地も少くない。

英國に於ては本國全般に平均に人口が分布してゐないで、いくつかの都市に人口が集中してゐる。ロンドンの如きはその大なるものである。農業はこの國に於ては、工業の足下に押しつぶされ、國民生活に於て一少部分をなしてゐるだけである。英國第二位の經濟活動を有してゐる石炭業よりも、農業に從事する者の方が多いと聞いて、人は驚くであらう。しかし

農業は一般大衆の生活にはあまり關心を持たれてゐない。都會生活者が週末に田園に行き、狩獵をたのしみ、表面は農家のやうでも、內部には近代式のバスをつけた別莊であつたり、ガレーヂをつけ、ゴルフリンクを設けて、野外の樂しみに耽けるなど、いはゆる貴族的趣味から農村を見てゐるにすぎない。

英國の農業の衰頽は何によるか。その理由は明白である。農村の工業化は十九世紀の初頭から始まつてゐる。富裕なる農夫は工業經營者となり、小農は職工とつた。また英國の工業生產の大部分は輸出せられて一般工業原料および食糧輸入のもとになる。食料は海外に於て低廉に生產せられ、英國の工業生產品には高い價格が與へられる。故に英國の工業家は、その生產品を海外に賣り、より多量の原料を得た方が、英國の農夫に賣り、その農夫から食料を買ふよりも、割が良いのである。

英國の經濟體系から見て、英國の勞働力を農村に供給するより、工場へ送つた方が有利である。英國の農夫の生活狀態は海外のそれよりも惠まれてゐない。故に關稅の障壁をなくして、工業生產品を海外に賣り、海外から農產物を買つた方が大變有利であつた。この故に英

國は自由貿易の先驅者となつたのであつた。そして最初は、運送費の高價なること、易損品の運搬難等により、英國の農夫は自然的に保護をうけてゐたわけである。卽ち農業生産を廢止することが出來なかつたのだ。併し船舶の速力の增大、運送費の下落により、また冷凍船の出現により事狀は變つてきた。冷凍船によつて、オーストラリヤ、ニュージーランドで積込んだ肉も殆ど完全に、英國へ持つてくることが出來る。かやうにして農夫は次第に保護を失つて行つた。英國の農業は沒落し、地主、農夫も貧しくなり、小作人はその地代すら拂へず、父祖よりの農を止めて都會に出てしまふ。英國の農業が世界の模範であつたのも、昔の夢となつてしまつた。かくて疎放農業がひろがり、耕されてゐた土地が、牧場に轉化して行く。英國の農業が危殆に瀕したのは、一八八七年及一八九六年とであつた。この時に農務院が設立されたのである。やがて之は農務省に昇格した。二十世紀の始めには、一旦良好な狀態が認められたが、一九〇〇年と一九一四年の間には、英國の農業改善策が立てられた。之により、農業の收益は二割方增加したのであつた。戰爭中は農産物の價が高かつたので、大戰前に比し、英國の農夫は的三倍の收入があつた。しかしこれは一時の現象であつて、次第に衰へて行つたのは勿論である。それでこのため、英國の農業はどうなつてしまつたかと云ふに、それは餘りにも明瞭である。最も大切なことは農業の相對的沒落である。人口の增加と他の工業分野に於ける生産の增大である。

二　農産物・畜産物

農業の統計については、適確なものを持ち合せないが、蔬菜の産額は增加し、畜産は減少してゐるらしい。これは農村が農耕から牧畜へと轉業して行つたことを證するのである。大戰中、獨逸の潛水艦の攻擊による、商船積載の農産物の減耗を補充せんために、英國政府は非常な努力を拂つてゐる。そして一九一九年からは、野菜の生産が減少し、大戰前の平均年産の四分の三になつてしまつてゐる。

然るにまた畜産の方は一八六六年以來、他の制肘を受けず、增加して來てゐる。一八六六年と一九一一年では一對二の數勢に在る。大戰の終末以來、いくらか衰へたが、大戰後は戰前の一割を增してゐる。英國では畜産に比し農産物が減少してゐると云はれてゐるが、必ず

しもさうではない。荒地のやうに見える所は牧場となつて居り、また過去五十年に亘つて、農地の利用に於ても、相當進歩してゐる。一八八一年の農耕面積は農業用地の半分位であつたものが、一九三六年には全國の土地の四一・六パーセントになつてゐる。

燕麥（オート）は量から見て農産物の首位を占めてゐる。この國の唯一の穀物の小麥は注目の的になつてゐる。ライ麥の生産量は殆ど不明である。但し二十世紀になつてから小麥の收獲高は逐次增加してゐる。一九一八年には一九一四年の二倍の收量があつた。ついで減收の年もあつたが、漸時上昇の途につき、一九三六年には戰前十年の平均量に達した。一九〇四年にはオートの量は現在よりも多い、そして一九三六年には可なりひどい減收を示した。

根菜について云ふと、これはその重量と體積の大なるため運送に不便なので、政廳の保護も大なるものであつた。それで一九〇〇年以來馬鈴薯は增加の傾向を示してきた。一九一八年はその頂點で、一九〇四年の收量の三倍に達した。その後一時減少したが、現在では戰前の平均の約二割の增收と見て良からう。且つ英國民の生活程度が上昇したため馬鈴薯の消費量は著しく減少してゐる。それでこの食糧はドイツのそれの如き重大要素とは考へられぬ。

ドイツ人は安價にして生産高多き馬鈴薯を用ふること極めて多く、日本人が米を食ふのに近いと云つても過言ではあるまい。蕪は逐年減少してゐる方である。

このため農産物の減少したのにもかゝはらず、機械化の進行と共に馬の頭數が減少し、從つて食糧は增大してきてゐると考へられる。產馬の方では、サマブレッドの愛育位のものであらう。一般家畜の方では、農園が牧場となつてゆき、その頭數は增してきて一八八四年の大體二割方を增加してゐる。一九一三年には家畜は大たい七百萬と見られ、一九三六年には八百萬にも及んでゐる。酪乳工業も重要な一部門をなして居り、その牛乳消費量が小なるにせよ、大體國內產出を以て之を賄ふことが出來るのは、一の力强さでもある。

十九世紀の末から二十世紀の始めにかけては緬羊は二三割を減じてきた。約二千萬頭になつた事もある。現在大體二千四百萬位まで漕ぎつけてゐるが、これは不振としなくてはならぬ。養豚は順調で、現在は一八八四年よりもはるかに多く、一九一三年の約二倍に及んでゐる。一九三六年には犬が豚と同數ゐた事も面白い現象である。

農業は二つの見地からして國力を表はす、一は人口政策上であり、一はその體力の根底だ

からである。

田園から都市への移住により、農耕力を著しく減退してゐる。一九一一年から一九三四年にかけては農夫はその半を減じ、一九三四年には總人口の中、農業に從事するものは、百萬を割るに至つた。これに驚いた政府は一八八八年以來、小農卽ち獨立の小農經營を奬勵してこれが挽回に力めた。併し、各地方の實狀が之に順應せず、農業保護政策は大體失敗に終つてゐる。それに現在では英國に於ては、農業は好ましい職業とは認められてゐない。優秀な青年層は農夫たるを好まないのである。且つ實利の一點のみから見る英人には、これは希望を與へる職業とは云へぬ。從つて減少した農業の生產はいよ〳〵減退するばかりである。現在、農耕法も舊式で農民に熱意がないのは農民が希望を持たぬためと認めて良い。

戰前英國の農夫の十二パーセントが、耕地を所有して居り、他は富裕なる大農の小作人であつた。併し現在は農村に人手が充分あり工合が良いのである。それは戰後、歸休の兵士が農業に進出し、小なる農地はこの種の農夫の有となり、又々分野に變動を來した。かく英國の農村は社會的變動の影響を受けること多く割合に不安定なものである。

三　食糧保有策

今日英國の食糧保有策は如何。英國は已に述べたやうに、自國の農產物によつて、その食糧を賄ふことは出來ぬ。政府が販賣の保護に乘り出しても、その小麥を以てしては三ケ月を支へるに足らぬ、ミルクやクリームの消費を制限しても、その本國のバターは六週間を充たすにすぎぬ。その本國の肉は六ケ月の食糧となるだけだ。他の雜穀も四ケ月の量しかない。果物は三ケ月分だ。たゞ野菜と馬鈴薯と牛乳だけが、充分だといへる。その甜菜を以てすれば、妙糖は一年の內三ケ月を支へるだけである。

さてこの生產を以てして英國が戰時を如何に切り拔けるかである。前大戰に於ては、英國政府は始めに、農產物の增產命令を出してゐない。一九一四年には、政府は從前通りの經營を命じてゐる。大戰初期には農耕面積はむしろ減少さへしてゐる。

大戰中、英國は大體食糧の二分の一を海外から仰いでゐる。政府が本腰になつて國內增收に取りかゝつたのは一九一六年以降である。先づ第一がオートの價格保證であつた。一九一

七年頃には、船腹の不足により、米國よりの運賃が急騰し、英國の金貨準備額が、減少の兆を示したので、米國よりの輸入を制限し、小麥の販賣價格を保證し、馬鈴薯の最低貨格を設定した。一九一八年には耕地面積の增大に强力なる國權を發動し、漸く農產物の增加に成功したのであつた。

將來と雖も英國が戰時に打つ手はこの程度であらう。勿論國內全般に、そして平時よりこの準備を怠らぬ故、農業方面に於ては前大戰と同一とは云へず、相當成果を上げるものとは考へられる。前農相のモリスン氏は、當時の內閣の農政の方針を定め、農業振興と土地肥培の原則を確立した。この目的を遂行するため、重要食糧品種の最低價格を定め、政府諸機關の保護の下に、分配を組織化し、肥料の配給を圓滑にした。戰時の農政を變更することなく平時の充足によつて押して行かうとしたのである。

四　對外政策の根本

かく英國は、その自國の食糧によつて立つて行けぬことを良く理解し、それに備へてゐるのである。英國の根本策は石炭および一般工業品を賣り出し、外國より食糧と原料資源を買ひ込むことには、少しの變化もないのである。從つて如何なる犧牲を拂つても海外貿易を續行することである。即ち强力なる海軍によつて制海權を握り、同時に制空權をも獲得することである。これに第一に關係するのはイギリス海峽であるが、更に他の海洋も抑へなくてはならぬ。英國の第一線は海軍と航空兵力によつて守られなくてはならぬ。もしこの海軍と空軍とが敗れるならば、萬事休すである。

また英國の第二の問題は、その本國の國民が食ふためには、その工業品を海外に賣ることが根本である。他の國ではその工業の大部分を抑へても、その國の農夫が國民に食糧を供給しうるが、英國はこれは不可能である。英は自國の製品を海外に賣り込むため、海外の機關も必要となつてくる。海外に賣り込み、それによつて利益を得、それによつて民を養ふのである。これを斷行しなければ、民は餓死するより外に方法がないのである。これが英國の傳統な根本政策である。絕對的な對外政策である。もし列國が自給自足して行けば英國は死滅する外はない。英國の苦悶の最大なるものがここにある。

第四章　七つの海を支配して

一　海は英國の生命線

前にも述べたやうに、英國は海外との貿易によつて生きてゐるのである。その生命線は海である。海運である。その海外へ賣り込む物資、そして海外から買ひ込む物資の總ては、海により、船舶によるのである。その物資は必ず海港へと持ち込まなくてはならぬ。英國工場で消費せられる工業原料、製粉工場の小麥、英國にて使用せられる海外物資は、すべて海を渡るのである。

海運が如何に重要であるかは、これによつて了解できるであらう。英國を打倒する方法はいくらもある。海外列國が英國との貿易を拒否するのも一である。また輸入する物資の支拂不能が起れば、それまでである。そしてまた海外から物資を買ふことが出來、またこれに支拂ふことが出來ても、もし海運業の實力が衰へて、運送が不可能になれば、英國は死滅するのである。故に船舶は英國の重要なる機關である。これによつて英國は生きてゐる。そしてその海運を守るための強力なる海軍が必要である。平時には、他國の商船によつてこの物資輸送が出來よう。しかし戰時には之は保證されるものではない。強力なる海軍を以て自國を守り、七つの海を支配する自國の商船を守らなくてはならぬ。故に英國の國家總力といへば必ず、海軍力が問題となる。同時にまた海運力も問題になるのである。

海運業はまた、英國の經濟力でもある。英國の利得の一大原泉ですらある。それは自國のみたらず、他國の物資を運搬する。そしてその運送費は英國の重要な收入の一として、流れ込んでゆくのである。それは海外貿易の副收入と見て良い。つまり英國の海運業はその獨立の一要素をなし同時に國富の一因をなしてゐる。

世界大戰の末期までは、英國の海運業は、この二つの職分を充分に果してゐた。一九一四年に於ける世界貿易はその頂點に達し、ロンドンがその中心市場となり、公海を航行する船舶の四割は英國國旗を揭げ、また六割は、英國の造船所で建造されたものであつた。そして

この海運によつて年々九千萬ポンドの利益をあげてゐた。

二　前大戰と海運

それで世界大戰の初期に於ては、英國は船舶の準備に於て缺ける所はなかつた。その陸軍については例外であるが、その商船は食糧の運送には事かゝなかつたし、大陸への部隊輸送にも堂々と性能を發揮してゐた。約三分の一の船舶が軍事輸送に從事してゐ、最初の二年間は商船の獨逸側に擊沈せられたものも乏しかつたが、一九一六年からドイツ潛水艦の活動が目覺しく、一九一二年には潛水艦による損失は三百七十萬トンに上り、大戰中の最高數値を示し、英國朝野をして愕然たらしめた。

この結果船舶の不足となり、これが一九一七年の危機をかもしたのであつた。無制限の潛艦の攻擊は、英國を死地に追ひ込んだ、一九一六年までは、英國政府は、海運業の統制に乘り出さなかつたが、一九一七年には危險狀態に立ち至り、政府自らその規制に取りかゝり、その重要度によつて輸入許可をなし、不急物資を制限し船腹の不足のため木材の如きは全然除外された。かつ潛水艦の攻擊に備へるため商船團を編成し、これに軍艦の護衛をつけた。それでもなほ結果は面白からず、更に近い區域から物資を購入し、輸送能率を上げるのに力めたのである。

しかし、一九一七年に米國が參戰してからは、英國では、商船さへ米國に依存出來るものが增してきた。米國の船舶增加は夥しいものであつた。そしてどうにか船舶不足を切り拔けたのである。しかし船舶下足による苦辛は甚しいものであつた。若しドイツが無制限の潛水艦戰術をもつと、早期に敢行したとすれば、英國は完全に敗れたであらうと見てゐる識者は甚だ多いのである。

世界大戰中に英國は、七百七十六萬トンの船腹を失つてゐる。これは大戰勃發當時の三分の一以上に及ぶ。しかしその戰爭中、造船能力の絕大なる發揮により、急速に補充せられ、戰爭終結時には、一九一四年のトン數より三百萬トンの減少となつたのみであつた。一九三二年までは只々上昇をつゞけて來た。一九三四年の激減にも係はらず、現在は大體千七百萬トンを保有してゐる。

勿論トン數だけが、海運業の尺度ではないが、戰時に於てはトン數が大いに物を云ふのである。トン數の大なることは、非常な强味であり、その內に老朽船があるとしても、しかも無きに勝るのである。現在、英國商船の有する總トン數は、世界大戰當初の約一割減と計算して妥當であらうと思ふ。そして現今ではスピードは增してゐるし、また積荷設備も改良されてゐるから、その運送力は略同一と考へられる。それに前大戰の經驗もあり、運輸の計畫の向上、商船讓送の改善、國內に於ける食糧その他の資財の蓄積により、今次の大戰の方が遙に、海運業も好況と見て良い。しかし、英國が優勢な海軍力を以て、この商船の護送をやり、ドイツの潛水艦の襲擊を防ぎえたとしても、今時の大戰からは、空軍の活躍が强化されてゐる。そしてドイツの數に於ても質に於ても優良なる空軍の活躍下に在つては、相當の商船の減耗を覺悟しなくてはならぬ。前の大戰中にドイツの潛水艦によつて擊沈せられた英國船舶の總トン數は六百六十一萬トンであり、空軍によつて失はれたのは僅かに八千トンにすぎなかつた。是からはドイツ空軍の活動があり、また英人の生活程度の向上によつて、輸入物資が增大してゐる故、海運界の能力はやゝ阻害されると考へる。

第一次大戰に在つては、一九一三年の輸入は五千六百萬トンであつたのが、一九一七年には三千四百萬トンに減少してゐる。勿論これは政府の制限によつて起つたのである。今後、英國の平時の輸入品がどんな程度まで減少し得るかの問題がある。その輸入品は奢侈品とも限らぬ。そして最も輸入の增加してゐるのは、原料品と食糧である。そして英國の勞働者の生活も向上してゐる以上、この輸入を如何に制限しても前大戰程になるとは考へられない。

二　制海力と海運

一九一三年は英國海運界の好況時代であつた。大戰當初には造船所の巨大なものが多く、今日よりも全般的に勝つてゐた。故にトン數を埋めてゆく事は容易であり、大戰中の造船總トン數は約五百萬トンであつた、現今は到底是だけの力はないのである。そこで、この商船のトン數の不足を何で補ふかであるが、之にはどうしても、短距離の航路をえらぶ外はないのである。卽ちそこで、地中海が問題となつて來る。地中海の制海權を握ることは、英國海運業に取つて大問題である。之を英國が失へば、英國の船舶は希望岬を迂回しなくてはなら

ぬ。そこに非常な、海運業の不振と、作戰上の不利とが生れてくる。

次に船舶の使用する石炭と石油の問題がある。現在では石油が汽船の主要燃料であるが、之は英國の海運業に取つて甚しく不利である。殊に戰時には不利である。英國の船舶の中の一小部分は石油輸送船（タンカー）であるが、このタンカーが敵國艦隊に襲はれるならば、英國の危機は直に至るのである。英本國に於て生産される天然油は問題になる程の分量でなく、合成油も現在では採算つかず、石油の現保有高も決して無盡藏ではない。英國の海外依存の物資は食料品を始め種々あるが、石油もその中の重要なるものの一つである。前世界大戰に於て苦杯をなめた英國が石油問題を如何に處理するかが、國防上の大問題であるが、この事については英國の軍備の章に於て詳しく論ずることとしたい。

平時に於ては大海運業を持つてゐることは、戰時の準備體制として必要であり、また運賃を低廉ならしめることにより、國富に非常なる貢献をしてゐる。そして大戰前に於ては、世界船舶の約四割が、英國の所有であつたが、一九三八年には、それが二割五分位に落ちてゐる。これを以て英國の海運業が沒落したと見るのは早計であつて、これは英國の所屬でない他國の船舶の加增したことによる、世界大戰以來、米國、日本、ノールウエー等が急速に船舶を增加し、そのトン數を大にしてきたからである。

さて二十五年以上の老朽船を除外し、また四千トン以下の小型船を除き、近代の大型商船のみを數へるならば、英國の立場は更に良好となり、約三十六パーセントを保有することとなる。一九三六年に於ては、英國所有の近代船は千百萬トンに達してゐるが、米國が五百萬トンで之に次ぎ、ドイツが二百二十萬トンで之につゞく。世界貿易の不振にも係らず、一九二九年以來、英國は世界の總トン數の王者の地位を保つてきた。

三　貿易と海運

英國の海運界には五大會社がある。ペニンシュラ、オリエント、ロイアルメイル、エラマンス、キユナード、ブアネスウイセイである。そして是らは大戰前より何れも、收益が上昇してゐる。

けれども最近に至つて造船の經費がかさんで來て業者を苦しめてゐる。卽ち造船費、人件

費のかさむため、トン當りの運賃が高くなつてくる。從つて莫大なる收益を上げないと、大會社は立つてゆかぬのである。英國の代表的商船會社二十八について云ふと、その資本は一九三〇年に於ては、一九一〇年前後のそれの約五倍に達してゐる。

一九三一年には、例の大なる不況が、襲うてきた。商船會社も大打擊を受けた。世界の貿易は衰へて行つたのにトン數は增加してゆく。列國は、その國の國旗を公海に輝かすため、大なる補助をする必要にせまられた。

英國の不定期航海船舶が窮乏に陷つて行つたのも當然である。大戰前、重なる積荷は輸出の石炭であつた。大戰前に於て英國の輸出品の總量は輸入品のそれよりも遙に大であつた。これは石炭の輸出のためである。そして一九一三年には石炭輸出は七千六百萬トンに上り、同年の他の輸出品の總量よりも大であつた。一九三七年に英國から輸出した石炭は四千三百五十萬トンであつた。多數の小型石炭船は戰前には石炭を海外へ運び、そして歸航の荷をあさり、相當よい利益を見てゐた。これも現在では全く商賣にならない。總てかゝる現象は石炭の減產にある。

たゞ現在の英國に於て好都合なことは、輸出入が均衡を保つてゐることである。もちろん英國に於ては輸出は輸入に勝つてゐる。しかしその差は今は少くなつてゐる。卽ち、海外へ物資をつみだす船が、必ず歸航の船荷を見出すことが出來、それにより運賃が安くなるのである。

四　英國今後の海運

さて我々は世界の貿易額の中の幾何が、英國の船舶によつて成されるかを知る時、眞に英國の海運業が了解されるのである。併し是が分らなくとも大勢は了解出來るのである。それは英國海運業の根幹は英國貿易であるからである。近年に於ては、世界經濟の事態が良好でないにも係らず、英國の海運業は相當の成果を收めて來た。これは英國の海運業の經營の方途宜しきを得たことにも依るが、主として英國船舶の運ぶものは、英國への輸入品であつたので、政府の補助もあまり必要とはしなかつたのである。一九三六年に於ては、英領各地より英本國へ運ばれる輸入の大部分が、英國の船によつてなされ、他國の船によつたものは、

僅か七パーセントにすぎなかつた。それで、英國への輸入品はすべて英國船たるべしとの法律による強制などは敢て必要とはしなかつたのである。

それから英國が外國から購入する物資の中の半は、英國船によつて運ばれてゐる。また英國から外國へ輸出される物資の三分の二は英國船が運送してゐる。それから原料を輸入し加工して再輸出する物品の半は英國船が運搬してゐる。

それで問題は今後にある。各國がその自國の船舶を保護し、その運輸の改善にのりだして來れば、英國の海運界は衰へてくる。そして今や世界全般に自給自足が叫ばれてゐる。自給自足は食糧だけでなく又、軍需ばかりでもなく、海運についても同樣である。そして之が強化されるならば、英國は漸時その積荷を失ふわけである。從つてその國富を減退せしめ、產業全般に影響するのである。けれど海運業は大變複雜なもので、その繁榮の條件は種々あり、單純には斷定出來ない。英國の商船會社と銀行との協調は、世界に於て優秀なるもので、その海運業は銀行その他の經濟機關と協調して巧妙なる運轉をつゞけてゐる。從つて一朝一夕にして衰へるとは絕對に思へないである。けれども近年、日本、イタリヤの船舶が激增し、日本は極東に於て次第に覇を唱へて來、米國の商船は、大平洋から英船を驅逐してゐる。かくて英國もいよ〳〵海運業の補助に取りかゝるのではないかと思はれる。

第五章　ロンドンは世界銀行の銀行か

一　世界の富を吸ふロンドン

英國各方面に於いて擧げられる收益、そして産業全般ならびに海運業によつて得られたる富は全部がロンドに集中する。これは外國の金と合せられて更に他の諸銀行に貸付けられ、世界中の企業に投資せられ、英國經濟の活動の源泉となる。前大戰後、英京ロンドンは、そのお株を奪はれて了ひ、それがニューヨークに移つたと云はれたが、これは前大戰による莫大な諸收益がニューヨークに集まつたためであつた。しかし、ロンドンは依然として世界銀行の銀行であり、世界最大の金がニューヨークに在るにせよ、その頭腦は依然としてロンドンに在りとさへ云はれてゐる。

外見上、ロンドンはニューヨークに比すれば、甚だしく粗末である。ニューヨークのウオール街の如きものが、ロンドンに見當る筈もなく、マンハツタン島にそびゆる摩天樓を、そのまゝロンドンに求めることも出來ぬ。昔ながらの舊式構への銀行や、株式取引所を見てはたれでもうんざりするであらう。ニューヨークでは堂々たる建築が、その經濟を誇示するが如くである。しかし英國では、わざ〳〵看板をかかげねば銀行の存在すら分らぬものゝ如くである。ロンドン市は英國の生活に於て大なる役割を演じてゐる。他國に於ては銀行は商工業の奴隷であるが、英國ではこれと異り更に一段と高い職分を果してゐる。英國人は額に汗して食つてゐるたけでなく、他國にその金を貸しつけて利益をあげること、あたかも、他國の生産の甘い汁を吸ふ鬼の如くである。英國の農業、工業、並に海運業は、海外投資の利益によつて助成されてゐる。そしてロンドンの銀行が海外の投資利益をつかむのである。過去において英國が産業の王者であつた時代には、その獲得した利益は全部ロンドンの銀行へ託せられ、今日でもその國民全體の金が預けられ、また世界各地の非常に莫大なる金額が之に投入せられてゐる。そしてこの金が長期ならびに短期の貸付となる。長期の貸付はしばらく措き、短期の外國への貸付も重要なる役割を果してゐる。

二　海外投資と貸付

英國の銀行へ入つてくるこの種の利潤は巨大なもので、その種目は、海外貿易、保險のプレミアム、長期貸付の代辨支拂、株式の鞘取、外國銀行への現金貸付の利子、等々、きはめて多い。

大戰前の統計は相當信を置けるが、これによると、利益は大體一年二千五百萬ポンドと見られてゐる。しかし實際はこんなものでなく、三千萬乃至三千五百萬ポンド位であらう。これによつて如何にこの利益が國家的に重大であるかがわかる。戰後、一九二〇年頃の好況時代に於ては、この利益は急速に上昇した。一八二八年から一八二九年にかけては、六千五百萬ポンドと政府が公表してゐる。勿論この頃の貨幣價値は戰前より小であつたにせよ、國際勘定から見て、非常なる力を表はすものである。しかしこの見積については銀行業者間に異論もあり、この財源よりの純益は更に低いものと斷ずる人が多い。

さてこの營業項目中、特に重要なものは、外國貿易への投資である。これを專業とするものもある。この業者は昔から英國の餘剩資本をこの投資にあて、ロンドンをして世界金融市場の中心たらしめたのである。もと〳〵この業者は輸出入に專念し、この種の經營に非凡の才幹を表はし、海外投資の良き相談相手ともなり、海外在住の英人に融資する外、その助長に貢獻する所大であつた。これが逐年純粹の銀行業者に發展して行つたのであつた。その主なる營業は海外への貸付であつた。かくて、植民、企業、鐵道、外國等への貸付を始めたのである、外國政府への貸付といへば、我々はすぐニューヨークのモルガン等を思ひ出すが、その起原はロンドンである。例へばロンドンのハムブロ銀行の如きは之で、一八六三年、一八六六年にはデンマークへ、そして後にはギリシヤ政府へも貸付をしてゐる。

これは甚だ手堅く有利な事業であるが、一九三一年の經濟危機以來停屯してしまつた。大戰前には大體一億二千萬乃至一億五千萬ポンドが外國政府へ貸付されてゐたが、一九三五年までには千五百萬ポンドに激減してしまつた。これは政府に於て、海外へ資本の流出するのを防止する政策に出たためである。

近年、この方面もいくらか成績を上げてゐる。一九三七年には二千七百萬ポンドが貸付さ

れたが、これは大部分が外國政府へ行つたのだ。尤も政府に於て、この制限を解けば、直に金額のみは增加するであらうか、政府は、世界經濟の現狀から、この種の貸付を危險と見、また固定貸付は不利なりと斷じて、この擧に出たのである。從つて現在では戰前のそれに比較して平均四百萬ポンドの減少であらう。

三　世界貿易の仲介

またロンドンの銀行業者は世界貿易の仲介者となつて活動してゐる。英國以外の二國間の貿易の勘定が此處に於てなされることが、極めて多いのである。

この國際貿易の勘定が何故このロンドンでなさるか。これには理由が二つある。一はその名聲である。シュレーダー、ハムブロ、ラザード等の如きこれである。これらは本來商人であり、そして商人間に絕大なる信用を有してゐる。この大なる業者はもと〳〵大陸から來たもので、シュレーダーはドイツから、ハムブロはデンマークから、ラザードはフランスから出たものである。その嘖々たる名聲により、世界貿易に强固な地位を保持してゐる。またもう一つの理由はロンドンそのものが金融市場であるからである。ロンドン市には無數の割引銀行があつて活動してゐるのは人の知る通りである。

このロンドンの重要なる機關、すなはち商業銀行ならびに割引銀行は、一九三一年の危機に打擊を受けた。そのため、ドイツ、オースタリー、ハンガリー等が苦しんだのも、記憶に新なるところであらう。

四　英國富力の減少

一たい英國のこれらの收益に對する明確にして詳細なる數字は、これを擧げることは出來ない。この外ブローカー業者も多く、また保險會社もよく活動してゐる。そしてこの保險業から上る收益も潤澤であり、ロンドンは世界保險業の中心ともなつてゐる。ロンドンのロイドの海上保險業の世界に於ける優位なる地步は、等しく人の認める所であらう。

これを要するに、この種の收益の減少は、前にあげたやうな政府の發表通りとばかりは受け取れぬであらう。大たい一九二八年から一九二九年の平均に比して、現在は三千五百萬ポ

ンドを減じてゐると見て良からう。一方、海外貿易は漸時減少して來てゐる故、この點から考察しても、この銀行關係の利益は減少してゐるものと見てよい。從つて大英帝國の國富は減少の傾向ありと見るべきである。これ英國の苦悶の一つであつて、世界銀行の銀行としてその繁榮を誇つた英京ロンドンも、やがて次第に轉落しつゝある己が姿をみつめねばならない現狀である。移りゆく世界經濟の波動の前には、ロンドンも亦、小雀の如き存在でしかないのであらうか。

第六章　見えざる帝國の威力

一　英國の海外投資

工業を興してその民を養ひ、それをまた輸出に充てる國は多い。また農業を以て民の食糧に充足してゐる國もある。更に海運業を以て國是としてゐる國もあり、銀行業を以て莫大の收益を擧げてゐる國もある。しかし英國は、それらの經濟活動の外に、全く他國の追隨を許さない一方面を持つてゐる。それは卽ち海外投資である。

卽ち海外投資は英國の重要なる活動である。世界に英國ほど巨額の海外投資を行つてゐる國はあるまい。そしてこれによる收益は英國の工業生產による收益に劣るにせよ。それは、英國の補助的投資であることを記憶してもらひたい。英國が海外投資をつゞけてゐる限り、そして又その利益が英本國へ流入してゐる限り、更にまたその資本が格別の減退を示さぬ限

り、英國の經濟は安固なものである。

英國の最大の富源の一はインドである。これは已に昔からの定説である。そこには數世紀に亘つて富がつまれていつた。東インド會社の創立者およびその業者は、一六〇〇年以來、インドに於て數百萬、數千萬ポンドの富をつみ、今日の英國繁榮の基礎を築いた。しかし、インドに於て極端なる壓迫と搾取をなしえた時代は、もはや過ぎてゐる。米國の獨立は、少くとも、この證明である。

英國の世界各地への投資は何によつてこゝまで進歩したか。それは植民政策と平行したばかりではなく、十九世紀に於ける英國工業全般の世界制覇の結果と見るべきである。歐米が未だのんきな職人の手仕事をやつてゐた時に、早くも英國は工場を建築した。そして早くも機械の運轉を開始した。それにより生産された商品は、ひた押しに世界の各地へ流入して行つた。これをさへぎる何物もなかつた。各國は爭つてその品物を買ひ取つたのである。それによつて巨額の金が英國の工場へ、商店へ、そしてまた銀行に流入して行つた。その當時は英國の工業從業員もはなはだ貧しく、一般に生活程度も低かつたから、その金は國内へ散在することなく、若干の個人をして莫大なる金を蓄積せしめる結果となつた。

そこでその金を海外投資に廻したのである。當時は列國が漸く産業振興に目覺めた時であるので、その開發に多額の金を要した。そのため投資は極めて順調に進行したのであつた。この投資によつて産業は開發せられて進歩し、次第に英國のそれに追ひつく時が來る事は明であるので、資金を費消することなく、資本はこれを積んで置き、その利子を擧げることに全力をつくして行つた。そこで英國の投資によつて擧げた利益を以て、世界各地に鐵道を敷設した。そしてその鐵道沿線の資源および利益は全部これを吸ひ取る事とした。また工場、ダム、坑道、港灣、橋梁を建設した。かくして英國が世界の手仕事を廢して、近代的機械設備をしたやうなものである。

世界大戰の當時までに、四十億ポンドの金が海外へ投資せられた。この内の半は十九世紀に、そして殘りの半は現世紀の當初十三年間に行はれた。嘗つては英國は光榮ある孤立を喜び、海中の獨自の位置を誇つてゐたが、今や世界の富を抑へてこれを誇示してゐる、この四十億の投資は英國の國力を表はすものであらう。

この投資は大戰に於ては英國の軍費となつたが、この戰爭によつて、之がさほど減少したわけではない。その失はれたものは、困難ではあつたがすでに回復された。一九三六年には英國の投資總額は大體三十六億前後と推定される。これは一九三三年の英國の總歳入とほゞ等しい。これ英國民のひそかに樂しみとする所であり、見えざる帝國の領域である。

二　海外投資の縮少

英國の金が海外へ出る經過をみると、第一に外國への借款である。そして海外投資の資金であり、英國資本との共同企業の利益等である。外國へ貸しつけた金額は相當多額にも上つて居るが、英國として最も安全なる投資は英國所有の海外會社および領土植民地内の會社等である。

この種々の投資の關係を考究するには、公債が第一位であつて、十五億ポンドに達し、次は、英國の企業への投資が十二億となつてゐる、株その他が九億位となつてゐる。この三つの中で、近年では、公債が最も利潤多く、英國の企業による收益が第二位を占めてゐる。これらのものゝ利益は平均すると六パーセントと見て良からう。一九三六年には、この金額が大體一億八千萬ポンドであつた。これはその年の英國貿易輸入の二割五分に相當する。この總體に於て三十五億に達する英國の投資および一億八千萬ポンドに及ぶ利潤は英人の資産として繼承されるわけである。しかし世界産業の進歩に伴ひ、英國の地位が動搖してゐるからもしこれが一旦失はれたならば、これを恢復することは先づ不可能であらう。

そしてまたこの海外投資を維持するためには、年々五千萬ないし六千萬ポンドの投資を追加せねばならぬ。さらに海外投資の維持のためには、海外に何時にても投資しうる餘裕あること、又これを投資しうる機會あることが必要である。この二つの條件がそろはなければ、完全な結果は期待出來ないのである。第一次大戰前は自由貿易と財界の好況とにより、英國の海外投資の機會は充分にあり、その投資額は年々增加して行つた。しかし戰後は、事情が一變し、英國の投資は年々增加はしたが、その程度は著しく低下した。その後一九三一年の經濟危機に際しては、これは全く停止してしまつた。近年は、その投資の減少すら認められる。さてこれが一時的のものか、また永久的の現象の現はれたものであるか、輕々に斷定は

出來ないが、英國の經濟的進歩は既に停止し、沒落の兆が見えてゐると斷ずる人さへあるのである。

第一次世界大戰は、英國に一つの方向づけを始めてゐる。大戰に於ては英國は、その軍費を賄ふため、外國貿易を切りつめるの餘儀なきに至つた。十億の投資が軍費に振り變へられた。また六億ポンドの金が米國によつて起債された。これは英國に取つて大なる打擊であつたが、英國はこれを回復して一九三〇年には、大戰當初の額に引き戻した。

併しこのため投資の方向と額とは變化を來した。以前は米國は英の投資の最も好望なる所であつたが、米國は英に對し債權國となり、最早英國の資本を必要としなくなつたので、英國では他の方面に向ふこととなつた。それは原料を有してゐる國に向つたのである。即ち英帝國內の各地へ向つたのである。故に見えざる國と見える國が一致したわけである。そこにも英帝國の縮少が見え始めたのである。

三　苦境に立つ英國

さて英國資本の働いてゐる國を調べることとする。オーストラリヤが五億ポンドで第一位にあり、カナダとニューフアウンドランドは合して四億四千三百萬ポンド、印度とセイロンが合して四億三千八百萬ポンド、又外國ではアルゼンチンが三億七千二百萬ポンド、南アフリカとロデシヤが合して二億四千八百ポンド、歐洲大陸がトルコも入れて二億三千六百萬ポンド、ブラジルが一億六千萬ポンド、ニュージーランドが一億四千六百萬ポンドである。

次にその投資の地理的分布及び、その性質を以て分つならば、オーストラリヤは公債で第一位、南米の鐵道が第二位、インドの公債、カナダの鐵道、南米の公債、ニュージーランド政府の公債が末尾となる。

國際情勢は次第に變つてくる。一九三〇年から、英國は金を失ひ始めた。外國への投資は漸時、增加率が減少して遂に停止した。一九三五年、一九三六年に於ては、七千六百萬ポンドが返還されて來たのである。この事は英國に取つて重大なる問題であつた。これは英國が投資の餘裕がないためか、また外國が英國資本を要求しないためであるか、又それとも歡迎しないためであらうか。

これはいづれも相關係しあつてゐるが、最も大なる原因は財源の枯渇である。それは英國が戰後海外輸出に苦辛したことによつて、了解出來るであらう。また英國の工業全般の不振は一九二五年四月に金本位に復歸したことによつて拍車をかけられてゐる。

英國では今日、一方に於ては金を失ひつゝ、また一方に於ては輸入の增加によつて、いよいよ苦境に立ちつゝある。英國人の生活程度の向上は周知の事實である。その結果食糧その他の物質に於て、輸入の增大を必要としてくる。かくして貿易は衰へ、輸入は增加し、英國市場へ供給すべき物資が增加して、海外投資の餘裕も少くなり、次第に富を失つてきたのである。

尙、英國が歡迎するやうな、地域又は國は英國の資本から遠ざかる傾向があり、信用の乏しい國が之にすがらうとして、ロンドンにつめかける者の多い事は事實である。

さて英國の資本の投資分布を見ると、一般に文化の高い產業の發達した國々は、次第に英國の資本を避ける傾向にあると云つて良からう。また英國の海外投資保持の最も大なる敵ともいふべきものは、國家自給自足經濟體系樹立の傾向である。例へばドイツの現在の例によれば、大抵の國は、その產業體系の組織化によつて自給自足を實現しつゝあるのである。この傾向は世界的のものであり、次第に効果を擧げて來る。アルゼンチンに於て英國の經營してゐた鐵道は、今はアルゼンチン政府の經營に歸してゐる。また近年メキシコに於ける英國所有の油井も、メキシコ政府に買收せられてゐる。

つぎに、英國貿易の將來は、世界貿易のそれと密接なる關係がある。英國の經濟の消長は世界貿易の繁榮にかゝつてゐる。工業と海運業と海外投資は、その重要なるものである。世界貿易が急速に停止するとすれば、英國の海外貿易は勿論、その海運業も衰へてしまふのである。これは英國としての運輸の問題だけではない。英國の海外資本は主として、原料を生產する國に於て活動してゐる。英國の鐵道事業も、その他の公共事業も、その國の原料生產者、牧畜業者および鑛山業者が好況でない限り、利益を上げることはないのである。

四　軍費と海外投資

さて英國投資の全般を見るに、英國の海外投資の最好況時代はすでに終つたと見なくては

ならぬ。十九世紀ならびに二十世紀の初頭から、現代に傳へられた英國の富は、これを斷乎として守らなくてはならぬが、近年になつてその資産を以て生活するに至つては、その前途は寒心に堪えぬであらう。

一旦開戰となつた以上、英國はその海外投資を軍費に廻すであらう。英國はその富とその海軍とによつて世界に鳴つてゐる。その富といへども、無盡藏ではなく、準備されたる金が費消されるならば、在外投資は之が、補充とならなくてはならぬ。英國は海軍が強いことにより、その物資の輸送には不自由もなく不安もないのであるが、英國が世界一の輸入依存の國であるため、海外投資の意義と用途が變化して來るものと考へられる。

英國は莫大なる正價準備の金を所持してゐる。しかし之は、ロンドンに於ける外國の富を表はすものである。

一九三八年の九月末に於ける英蘭銀行並にその他の銀行の金保有額は九億一千七百萬ポンドであつた。然るに一九一四年六月には英蘭銀行の金は一億七千五百萬ポンドであつた。かく英國の金のみについていへば、戰前より餘程增大してゐる。

しかしこの海外投資だけが戰時の軍費の役目をするものと定めることは出來ぬ。これに反し二つの重要な問題が起つて來る。その第一は海外投資の狀態であり、第二はこれによつて適當なる物資が調達出來るかである。この第二は特に大なる問題である。この前の大戰に於て、アメリカが參戰しなかつたとすれば、英國は物資の購入に非常なる困難を感じたに違ひないのである。一九一七年の六月と十二月の間に於て英國はその財政政策に於て行きつまるものと豫斷した者もあつた。それは英國の海外投資が費消せられた故ではなく、これまで大規模に購買力を發揮してゐた米國市場が最早英國の債券を吸收しえなくなると見たからであつた。このアメリカの市場も飽和點に達してしまつたからであつた。

故に戰時に於て、英國が富裕であるとしても、他國へ對する債權、株券、鐵道等が、金に振り替へることが出來ぬとすれば、何の價値もないのである。そして今日の如き情勢に在つては、アメリカの樣な國が莫大な金を以てさへも物資は無制限に購買しうるとは限らないのである。それは人間は金のみで生存しうるものでなく、又この金の價値は、これが物資と交換しうる限度によつて定まるからである。

それでは英國が軍費として費消しうる海外投資はいくら位であらうか。我々は英國の公表せる海外投資は三十七億ポンドと計算した。これは市場價値でいふと、一九三八年には三十億ポンドとなつてゐる。しかもその時は市場價値が比較的正常な時であつて、需要供給の關係も多少は平衡の取れてゐた時であつた。故に戰時である今日に於ては、英國政府は供給の急增することにより、苦辛してゐる事は當然であらう。

とにかく、開戰してゐる英國としては、米國が英國の友軍となり、その銀行となり、その市場となるやう努力する以外に、方法はないのである。そして英國の海外投資が如何に動いてゐるかと云ふことが戰局の推移に大なる關係を持つてゐる。

第七章　英國の經濟力とその缺陷

一　開戰當初の英財政

我々は英國の富の根本的要素を考究した。即ち工業、農業、海運業、海外投資である。ついで現在の英國の開戰以來の財政を檢討したいのだが、その數字は發表せられないものが多く、極めて困難である故、開戰當初の情態を研究することとしよう。

英國の生產前は大戰前より現大戰前の方が增加してゐる。そして農業に於ては畜產が增加して野菜は減少してゐる。英國では工業の方が農業より重要な役割を演じてゐるのであるから、工業生產品は增加してゐると推定出來る。これは英國の歲入を見れば了解出來ることである。英國の歲入はたしかに增大してゐる。第一次大戰前には、英國の歲入は最早これ以上は增加しないものと見られたが、それも突破されたのである。しかしその上昇は相當曲折を

示してゐる。一八三〇年から一九一三年までは、堅實に上昇してきたが、大戰後は、それまでの百年間に經驗せられなかつた停滯を示した。しかしこの停滯を通つて歲入は又々上昇して行つた。かゝる現象は一九三〇年と一九三七年とに起つた。

英國のやうに外國から物資を仰がねばならぬ國は、國內消費を充足する經濟活動だけでは立つて行けないのである。國內市場に對する生產は、不可缺的のものである。その產業全般が健全であり、農產物が實質的に減少しないことが必要である。戰時に於ては、これは國民全般の生活を切りつめることなしに、軍需を增し、國の獨立性を强めることになる。國內生產より生ずる高度の歲入增加などは必要ないのである。

他の英國經濟力の要素は、外國貿易に關することである。輸出貿易、輸入需要料、海運業よりの利益、海外投資等である。國力のあるかないかと云ふことは、この要素にかゝつてゐる。

前々までの研究により、次のことは分つてゐる。前大戰以來英國の輸出貿易が減少した。銀行業の利益が低下した。英國の海外投資は好況の年には利潤が增加してゐるが、資本價値ならびにその金額は一九一三年の水準まで達してゐない。そして近年に於ては、總額は減少し將來も減少するものと思はれる。この點から見て英國の經濟は好況に在るとは思へない。

この狀況は支拂關係に表はれて來る。そして收入が多く支拂が少い事がむしろ多かつた。かくて大戰前には、英國は年々肥るばかりであつた。年々海外に莫大の投資をなし、將來の利をねらつたのであつた。一九〇七年には國費を見ると歲入を賄つて、一億三千八百萬ポンド、一九一〇年には一億五千三百萬ポンド、一九一三年には一億八千百萬ポンドの餘裕を見せた。

第一次大戰後にはかゝる好況は絕對に見られない。一九一三年より貨幣價値の下つた一九二〇年に於て、これに近いだけであつた。しかし戰後は次第にこの利益が減じてゆき、一九二六年までは降る一方であり、九百萬ポンドまで下つてしまつた。その後に好況の時期が訪れ、一躍して一九二九年には一億五千萬ポンドに及んだ。けれどもこれは、火の消える前の閃めきの如きもので、一九三一年には一億一千萬ポンドの赤字を出してしまつた。一九三六年には千八百萬ポンドの赤字一九三七年には五千二百萬ポンドの赤字であつた。

一九三一年は世界の財界不況の時期であつたから、英國の大なる赤字も止むを得ないが、一般には相當成績の上つた二ケ年に於て、赤字を出した事は、警戒すべき事である。一九一三年と一九三七年とを比較すれば、そこに重大なものが考へられる。

若し我々が英國貿易省の發表した數字を詳細に檢討するならば、大戰前の好況と一九三七年の一般と反する不況とを以て、直に英國財界の不振と斷ずることも出來ぬ。

英國の諸事業は、一九三一年から一九三五年までは、戰前よりも、振はなかつたと云ふだけで、相當活動してゐたのであり、外の年に於ても、增加を見せた年もあり、一九三七年には一九一三年よりも額は增してゐるのである。

二　財政と貿易額

つゞいて英國貿易を見ることとする。今次の大戰前に於ては、前大戰前よりも輸入超過が大であつたに違ひなく、第一次大戰前に於ては、その好況不況を問はず、一九一三年よりも輸入超過が少いことはなかつた。一九一三年の輸入超過は一億三千二百萬ポンド　一九二四年には三億三千八百萬ポンド、一九二六年には四億七千五百萬ポンドで、レコードを作つた一九三一年には四億一千百萬ポンド、一九三七年には四億四千三百萬ポンドであつた。

かゝる事情であつて、英國の歳出歳入の關係が第一次大戰前より面白くないのは一寸考へさせられる。これは輸入超過がその一因である。故に、英國貿易の數字を嚴重に追求しなくてはならない。この輸入超過を分析するならば、戰後には輸出が減少して、輸入が增加したためである。一九三六年を例に取つて考へてみると良い。一九一三年と同じく貿易も順調であるし、物價水準も殆ど同一であるので、その比較する標準の年としては好條件を備へたものであらう。

一九一三年には輸入は七億六千九百萬ポンドに達した。然るに一九三六年には八億四千八百萬ポンドであつた。一九一三年の輸出は、六億三千五百萬ポンド、一九三六年のそれは五億百萬ポンドであつた。卽ち第一次大戰の勃發前の年に於ては、輸入は一九三六年より少く輸出が著しく大であつた。卽ち一九三六年の外國貿易の收支を見ると、一九一三年より成績が惡くなつてゐる。

この惡化につき尙一そう詳しく研究することとしたい。一九三六年には食糧の輸入は、一九一三年より大であつた。これは本國に於ける農產物の不作によるものではない。一九三六年の穀物の減收は、畜產の增加によつて穴を埋められたわけである。故にこの食糧輸入の增加は、國民消費が增加したものと見るべきである。國民生活は程度の上昇と、國家收入の增加とがその原因であり、これは將來に於て變ることのないものと考へられる。そして將來は愈々この現象は著しくなるであらう。

一九三六年に於ける貿易の成績の面白くないのは要するに輸出の減少によるものである。即ち英國の貿易は、他の產業部門、經濟部門のすべてが良好なる活動を示してゐる現在に於てすら、良い傾向を示してゐないのではあるまいか。

三　物價騰貴と經濟危機

併し同時に英國は物價の高騰により、利する所もあるわけである。そしてその輸入を安く手に入れ、その輸出を高く賣るとすれば、危險も伴ふわけである。一九二四年までは英國の重要輸入品即ち食糧・綿は英國の重要輸出品即ち、鐵ならびに鋼鐵製品、石炭等に比し比較的高價であつた。その點から云つて英國貿易に利する所があつたのだ。輸入品の値が下り、輸出品の値が有利に維持されてゐる故、同一量の輸出品を以てより大なる分量の輸入と交換しうるのである。

一九二四年の物價の昂進が英國の貿易に取つて有利でなく、また輸出入の價格が固定してゐたとすれば、英國はその輸入超過に對しては以前より支拂が增して來たことになり、一九二六年から一九二九年にかけては、この額は一億七千八百萬ポンドに達して居たであらう。一九三〇年以降は、英國の物價の昂進は、英國に取つて有利といふべきだ。といふのは、その重要輸入品即ち原料が暴落し、その加工生產品は、左程下落しなかつたからである。

それで英國が一九三六年までの好條件によつて利得した點を考へてみたい。物價が一九三〇年の水準と變化のないものとして、英國が同一の輸出入をしたとするならば、一九三〇年から一九三六年に至る七年間に於ては、輸入超過は實際よりも一億ポンドくらゐ增大したものと考へられる。

かくて物價の昂進は英國を禍したといふよりも、むしろ利益を與へたのである。物價昂進といふことは、食料品および原料品輸入を行つてゐる強大なる國に取つては、可なり有利であつたのだ。

この經濟狀態の惡化といふ事は、英國に取つて如何に重大であつたか、これは數年を出でずして、世界の最大の富國を滅ぼしてしまふであらうか。富める債權國を債務國にしてしまふのであらうか。英國がこれを克服して立ち直る方途を有してゐるであらうか。

我々は今までに英國が蒙つた損失を過大視してはならない。英國は海外に大なる財源を有してゐるから、この種の損失が直に、英國に大なる衝擊を與へるものではない。英國が經濟危機に陷ると思へない理由は、充分にある。たゞこれが永久に未解決のまゝ放置せられ、それが次第に昂進するとすれば、そこに問題が生じて來る。たゞかゝる方途を研究することは大問題であり、これを如何に處理して行くかによつて英國の將來は決定せられるであらう。

とにかく英國は、戰前の如き、貿易上の輸出入の好況を取りもどすことは困難であらう。將來に於ては、海外に巨大なる市場を開拓し、その大資本によつて莫大なる利を上げることも可能ではあらう。しかしこれとて確實とは思へない。現在としては、その現在持てるものを如何にして維持するかに苦慮してゐるのである。即ち進軍を中止し、防禦の體勢に入つたのは、その爲である。

こゝに考へなくてはならぬことは、この貿易の平衡を輸入の減少によつて、どの程度にまで持つてゆけるかである。既に述べたやうに、英國は大戰前より、生産增加して居り、しかもその上、國内市場に供給する分量が增大してゐる。英國は國内の市場への需要が更に增大しても、依然としてこれに供給することは容易であらう。但し、これが貿易の調整にどう響くかは問題である。

四　代用品の發明と貿易の危機

英國の農産物の生産は、その政府の保護を以てすれば、いくらかこれを增大することも出來るであらう。しかし英國は農産物は、これを海外から仰ぐ事を原則としてゐるから、その程度も極めて僅少であらう。もし海外植民地から農産物を輸入するのを極端に減少するなら

ば、英本國と屬領間の調和を害することにもなり、面白くないであらう。かつ英國の一六營業である海運業が損失を受けるであらう。外國貿易の量の減少は、農産物の輸入の減額と共に、非常にこまる問題なのである。

しかし、英國の農業ならびに工業の生産增加により、ある程度まで輸入超過を防ぐことは出來るであらう。世界の政治形體が正常な狀態に復するならば、海運業と銀行業とにより、英國の收益を增大する事も可能であり、また實現性もある。しかし、これで英國の貿易全般が立ち直ると觀測するのは、早きに失するであらう。

この目的を達成するためには、二つの要素が必要である。英國民の生活程度の引き下げと英國の輸出の著大なる增加とである。そしてこの二つが合成しなくてはならない。しかし英國政府は生活程度の引き下げを斷行するとは思へない。英國の政黨はいづれも生活程度の向上を叫んでゐるのである。從つて、この解決策は、輸出の增加といふことになつてくる。これが唯一の希望である。英國に於て生活程度の向上を叫んでゐる政治家は、英國が將來富を失ふにせよ、また海外投資の形で受けつがれてゐる一大遺産を失ふにせよ、たゞ輸出の增加を計れと提唱してゐるのである。英國の輸出增加の見込はどうであらうか。

最初から英國が、輸出貿易の進歩を促す諸條件を抑壓する立場にあるとは思へない。しかし外國が行ふ金融に對する制限、國際支拂の停止、等に對しては全く方法がないのである。そこに植民地の問題も起つて來る。けれども最近英國としては手の下し樣のない事態が發生して來てゐる。一は人工的代用原料の發明である。空中から窒素を取ることの發明により、英國はチリー硝石鑛に投資した資本の全部を失つたのである。それから人絹の發明により、又石炭の合成成功により、或は人造ゴムの創業、紡績業の原料の代用品考案・木材等から原料品を取る工夫等によつて大なる損失を招いたわけである。

五　自給自足經濟と英國の轉落

一國の經濟は原料輸出國の運命と密接なる關係がある。英國自身もかゝる人工的代用原料を作製することが出來るのであるが、かくする事により、原料輸出國の財政を惡化せしめ、從つて英國の投資に影響してくる。しかしながら現今までの世界貿易の形體は、代用原料の

發明により、一變すべく運命づけられてゐる。もと〳〵貿易は農業國の原料品と工業國の加工生産品との交易にあるのであつた。將來は各國が代用資源の開發に努力するであらうし、その工業原料は出來うる限り、自國で生産するであらう。國際聯盟によつて强制せられた戰時封鎖は今や逆効果を呈してゐる。この國際聯盟の規約は、弱小國を支配せんとしたのであつたが、現在では弱少國も自給自足を目標として進むに至り、英國の如き大國の富强となる進路を閉塞したわけである。

この自給自足は英國に取つて想像だにしなかつた一大難關である。代用原料の創案と自給自足とは不可分のものである。チリー硝石礦は經濟的條件だけから云へば、優に世界市場に對抗出來るものであるが、大工業國に於ける窒素の製産業に對する保護奬勵ならびに高率關稅の障壁化を始めたため、これには敵しえなくなつた。

代用原料は高度の自給自足を可能ならしめる。即ちそれは、英國に取つては大敵である。今次の大戰に於て英國が、その生命をつないだとしても、自給自足國家または、自給自足國家群の解放により、危殆に陷ることは當然である。自給自足は英國の脚を斷ち、その獨立をすら危くするであらう。

けれども自給自足が、世界貿易を破壞してしまふと限つてしまふものでもない。如何なる發展の跡にも何か殘存するものであり、經濟的自給自足の國家間に於ても、取引はあるに違ひない。そしてこの新しい經濟の機構は、現在同樣の債權債務の關係に立つものではないと思はれるが、その新機構の發展し形成されるまでは、相當長い時期を要するであらうし、そしてまたそれまで的國が海外資本を維持するためには、輸出の莫大なる增加にまつ外はないと思はれる。

六　輸出振興と英の經濟力

この輸出の振興方法は如何。英國の輸出貿易の不振は、以前に繁榮し、大輸出部門であつた産業の放棄であつたのである。英國貿易の輸出方面を促進する基礎はこゝにある。この輸出方面の産業は更に能率を上げることが出來るであらうし、これが未だ行はれてゐなかつた事は、英國の國力の餘裕を示すものと見ることも出來る。この點まだ餘地ありと云ふべく、

またこの餘地を實際に生かすためには、他國の先例を參照することも出來るのである。

英國に於ては工業の近代化がまだ完成されてゐない。再軍備着手により鐵ならびに鋼鐵工業に於て、工場の擴張及近代化、個人の企業の經濟的合理的經營の促進が行はれただけである。石炭業は理論的には、再編成の域にあり、いづれは國家管理の實現を見るであらう。それから舊き傳統の紡績業もいつかは、近代化されるであらう。しかし海運業の保護奬勵補助は列國の域までは進んでゐないのである。

もし英國の產業が近代化されるとすれば、その價格も平衡を保ち、個人企業の激烈なる爭鬪の弊もなく、世界貿易は一段と進展するであらう。

一九三六年に於ては、英國輸出の半は英領內に行き、またその地域から來る輸入は四十パーセントであつた。その後この地域へ對する輸出よりも輸入の方が增加して來た。それで一九三七年には、英領內から四億五百萬ポンドを買ひ入れ、二億五千二百萬ポンドを賣つただけである。從つて一億五千三百萬ポンドの開きが出來たわけである。一九三六年にはこの開きは一億千六百萬ポンドとなつて行つた。

この現象にも係らず、英國はまだ〳〵輸出力を備へてゐる。そして輸出增加と國民の生活程度の低下を斷行すれば、更に經濟力を增大しうるものである。そして結論として次の事を云ひうると思ふ。

英國の產業は增產能力がある。そして前の大戰前よりも增產してゐる。英國の農產物は實質的には減少してゐない。海運業、銀行業、海外投資は大戰の前年よりも、一九三七年に於ては收益を增大してゐる。けれども一九三六年と一九三七年には、英國はその資本で寢食ひしたやうなものである。外國貿易の不況により、富を減少した。今日に於ては國民の生活程度の高い事により、又それによる輸入增加と貿易不振とにより、面白くない財政を示してゐることも確である。そこで英國の經濟力は結局どうなつてゐるか。英國は近年、第一次大戰前と略同一の經濟力を備へてゐるが、前大戰前には次第に富を增して行つたに反し、今度は富を減じて來てゐる。そしてこれは世界全般の趨勢と呼應してゐるのであり、これは永續性があると思はれる。

第八章　英國海軍の戰鬪力

一　大戰の勃發と獨英

英國は第一次大戰以來、その國防に苦辛を拂ふに至つた。これは政治的ならびに作戰的の兩方面であるが、次第に國際狀勢が必迫すると共に陸海空の三軍の整備に全力をつくした。しかし再軍備に立ち遲れたため、外交的方面に於てすら相當の苦杯を經驗したのである。

英國は元來島國であるため、そして多數人口を小なる本國に有してゐるため、海外より食糧の相當部分を輸入しなければ、國民は餓死するのである。また原料を輸入することなければ工業生產も全く壞滅し、國そのものが滅びてしまふのである。そしてこの食糧及び工業原料の輸入ならびに、その運搬船舶の護送のため、大海軍が必要となつて來る。英國の經濟生活の基礎は、工業生產であり、從つて原料輸入であり、故に海軍の强大に依據してゐるのである。英國はその國民の經濟のため、海軍を必要とするのである。そして大海軍を有してゐることにより、たとへ大陸に於て陸軍が破れることがあつても、それを本國へ收容することが可能なのである。そして海軍によつて敵軍の襲來を防ぐことが出來る。故に戰の初期に敗れても、終局に於ては勝つことも出來るのである。とにかく英國の强大を致し、そして英國の獨立を維持するものは、海軍である。勿論近代に於ては、空軍がその重要なるものともなつて來てゐるが、我々は先づ英國の海軍をしらなくてはならない。

一九三九年九月三日、第二次世界大戰の幕が切つて落された。勿論大陸作戰が主要なものであつたが、海を中にしての英獨の動向は、共にその運命をかけたものであつた。ドイツはその潛水艦戰術に於ては、前大戰に於ても深い經驗をつみ、その裝備、訓練作戰に於ても優秀なものである。もと〳〵ドイツには、英國に對抗するだけの大艦隊はないのである。從つて潛水艦戰術を以て、英國に對抗するの必要にせまられてゐた。海軍といつても現在のそれは、水面上だけではないのである、海面と海空と海底の三部に分れる。空軍に於て優勢であるドイツは、更に海底の行動によつて、海面上の作戰をも、有利に導かんとしてゐるのは、

尤もな事であらう。開戰前早くも英國艦隊の消耗を計畫し、約六十隻位の潛水艦を出動せしめたと傳へられてゐる。或は約四十隻と云はれてゐるが、その行動は殆ど表面には出なかつた。

この行動はたしかに、偉大なるものであり、緒戰に於て敵を挫く重要なるものであつたが一九一四年以來の大打擊未だ恢復せられざる時であつたから、海面大艦隊の全般的行動が大なる戰果を期待すべくもなく、そのまゝに終つてしまつた。

かく海面艦隊の優勢ならざるドイツとしては、特殊の奇襲作戰に出る外はなく、その潛水艦による、海國英國の商船攻擊と出たのは止むをえない事であつた。ドイツが英國民生活の大動脈たる海外貿易の海運業を攪亂せんとしたのは當然の事であつた。かつては北海の霧を利用してドイツの全艦隊を集結し、英本土上陸を行ふとの說も極めて盛んであつた。英國本土上陸は既に、旬日の中にせまつたと傳へられたこともしば〳〵であつた。しかしドイツの空軍が如何に精銳であるにせよ、大兵團の海上輸送に在つては、海軍力なくしては、實行不可能である。英佛海峽の强行通過は現在としては先づ不可能であらう。

二　貿易は軍艦旗と共に

英國艦隊は開戰前數週間に亘り沿岸警備についてゐた。その全海軍の中の、精銳はドツクの中から忽ち姿を消し、何處へか向けて出港してしまつた。そしてその時當局は「十一月末まで聯合艦隊の合同訓練を施行するため」と公表したのであつた。

海軍軍令部では、英國の艦隊の行動が報道化されることを極度に避けてゐた。

一體英國の艦隊はこの數年來、その力量に於て殆ど變化はなかつた。政治的事情が英國戰艦の配置海域に重大なる影響があるが、軍令部としては、絕えず變化してゆく國際情勢に應じて、海外艦隊の部署を變へる事を好んではゐなかつたのである。

この海軍の分布については、作戰に大いに關係があるのである。一九三〇年のロンドンの海軍協定に於ては、海軍當局は政府の要請により、巡洋艦を七十隻に査定した。これは海外貿易を守るのに最少の限度であつた。當時の勞働黨內閣は、これを五十隻に減じてしまつたのである。

今次の大戰勃發前の發表數字によると、地中艦隊は二巡洋艦隊を有してゐる。支那、東印度、アフリカ、北米の各々が一巡洋艦隊を保有してゐる。南米及ニュージランド分遣隊は各々二隻の巡洋艦を有してゐる。平時の編成に於ては、これらの艦隊は二十五隻の巡洋艦を持つてゐるのだ。これだけの海軍力を遠い海洋に分散して置くことは英國としては、可なり大なる負擔である。

しかし近代巡洋艦の高度の速力による機動性と無電の速絡とによりこの弱點を補ふことが出來る。かく分散してゐても、有事の際の集結は容易である。如何に內輪に見積つても、普通の巡洋艦は、最高速力により、五千浬を一週にして走破することが出來る。勿論これに對して專門家は、かゝる高速を百六十八時間に亘つて持續することの不可能を說いてゐるが、英國の當局は、これを可能としてゐる。故に一朝有事の際は直に馳せ參ずることも可能であらう。

英國の海軍がかく遠い海洋に分散してある事については、理由が二つある。一つは「貿易は軍艦旗と共に」といふ、昔からの金言の如くである。英國は海外貿易を生命としてゐる國である故、これは當然のことである。また他の一の理由は、英帝國が利益を守るべき最も重要なる部分部分へ配置する原則からである。

三　獨英の海軍作戰

今次の大戰前英國の海軍が種々作戰をこらしてゐたのも事實である。例の軍縮時代には英國に於てすら、そしてあの海軍力を誇つてゐた英國に於てすら、海軍省の組織の過大なことに對して相當の非難があつた。それで經濟問題もこれに加はつて拍車をかけ、海軍省の職員を減員する委員會が設けられたのである。そして艦隊の行動に直接關係のある、ある少數の課だけ除き、他の課の室を一つ一つ廻つて歩き、將校、海軍文官、書記、技術家まで、嚴重にその分掌事務を調査し、結局海軍省全體として五名多しと結論を下したとの笑ひ話しがある。とにかく軍縮の浪は高かつたが、英[illegible]で海軍を重視したのは事實で、左程の削減をしたとも思へない。その海軍を支配する戰略課、作戰課、教育演練課、空軍課等、日夜孜々として努力してゐたのである。とにかく開戰以來、ドイツが英國の海上封鎖にのり出すことは明

であつたので、英國はその方面の對戰に萬全を期したのである。ドイツは英國の海上封鎖の方法として潛水艦と機雷戰術に出ることが豫想せられたゞその際の方法が問題であつたのだ。これは人の記憶に明な所であるとは[illegible]るが、開戰の約一年前、ドイツの聯合艦隊が大西洋スペインとポルトガルの沖へ派遣せられて演習を行つたことがあつた。その訓練は約一ヶ月に及んだ。その艦隊の編成ならびにその演習要目より判斷して、又スペインの港灣視察より見て、航空根據地の設定と見られるのであつた。卽ち空軍基地を設定し、大西洋の英の通商航路を脅かすものと判定せられたのであつた。

大戰開始頭初に於ては、獨の全艦隊は、バルト海に集結するものと想定せられた。しかしその內のあるものは、キール運河を通過して、英國の商船襲擊に出航するものと想見せられた。英國では當初からウイルヘルムスハーフエンならびにその附近の海岸を偵察して、この判斷をえたのであつた。今日の海戰は、大艦隊を固定して待機するのと、ゲリラ戰に出るのと二ある。一般に優勢なる艦隊は絕えず待機してゐるのであつて、この狀態から脫出することは少いものである。また劣勢なる艦隊は絕えず游戈をつゞけるものである。そして二十世紀の初から海戰の狀勢は大分變化して來てゐる。それは海面下の行動が可能になつて來たからでもある。第一次世界大戰の結果、果して戰艦は必要であるかが大問題になつてきた。この防禦に困難な武器卽ち潛水艦も、その使用によつて價値が分れる。ジエリコ提督は、無制限潛水艦戰時代として世の注意を引いた。そして之を以て海軍存立の危機であるとした。一體大艦巨砲主義なるものを見るに、大型戰艦の集團は巡洋艦、驅逐艦等の如き小艦艇を伴ふことにより、その行動の迅速を失ふから大艦のトン數を以て優秀なる小艦の多數を作る方が有利であるとなした者もあつた。勿論大艦隊は公海に於ける敵の艦隊に對抗するためであつて、軍港に待機せる大戰艦ならびに巡洋戰艦は、ドイツの艦隊を軍港外に出でざらしめ、狹い海路に小艦艇の活動を抑壓したと云はれてゐる。ドイツの海洋艦隊の覆滅により、この論爭も新段階に入つてきた。パーシイ、スコツト提督はこの戰艦を支持した人であつた。

さてこの大艦の難點であるが、一國が大艦を建造する時は、他國もこれを建造しなくてはならないことである。かくて一九二二年のワシントン會議の開催となつたのであるが、これは英國がその優位を保持せんがための一の手であつたのである。そしてこの大艦の製造制限

がやがて、空中魚雷を搭載せる大型爆擊機の出現となつたのである。

四　空襲と大艦主義

一九三五年の末になつて一つの委員會が組織せられた。これは近代海軍に對しての一大變轉であつた。その名稱は「空襲に對する主力艦の缺點防衛委員會分會」なる大變長いものであつた。これが結成せられる少し前に、一海軍豫備將校が上院に於て、「一隻の主力艦の製造費で、一千臺の飛行機が製作出來るではないか。」と反駁して、人心に不安の影を投げたのであつた。

ボールドウインが首相であつた時、國防力の低減の責任者として、盛に惡口が浴せられたものであつたが、この名の長い委員會分會は彼によつて委員が任命されたのであつた。この委員會の決定事項は、一九三六年三月廿六日公表されたが、その結論だけを述べることとする。この決定が建艦政策に重大なる影響を與へ、從つて後の大海軍再軍備案に、その影響が表はれてゐることは云ふまでもない。

最初にある上院議員の「一對千」の討論について述べたい。「相對的建造費」との見出しで一が千に當ると斷じてから次の樣に論じてゐる。「海軍省ならびに空軍省は、共同に研究をつゞけ、その互に一致出來る結論として、四十三臺の二基發動機裝備の中型爆擊機は、大體一隻の主力艦の建造費に匹敵する。そしてその維持、補給その他の費用を含めてかく考へることが出來る。」と云ふのである。

これは一寸面白くひゞくであらうが、經濟的負擔の減少と云ふことは、作戰的には大した問題ではない。この眞の目的は、一九二〇年以來の專門的知識と經驗と材料とにより、空中よりの攻擊が果して主力艦の場合に有効であるか、どうかを決定せんとするものであつた。この委員會分會の報告書中の一節に「答申案」としてかう述べられてゐる。そしてこれは軍令部と空軍省との委員が入つてゐるのであるから、兩者の意見が現はれてゐると見るべきである。

「本委員分會は、種々の經驗の結果蒐集し得たる知識と研究とにより、爆擊機の攻擊に破壞せられざる戰艦は建造不能なりと信ず。速力、裝甲、重量を無視して、裝甲の厚さを無

制限に增大すると假定するも全く不可能なりと認む。もしこの疑ふ餘地なき事實を確認せば、主力艦建造の無暴を警戒することとなるべし。批評家はこの主力艦が空中攻擊に對し無力なりとなすものと然らざるものと區々なり。もし空中より爆擊するに際し、その好條件を具備するに於ては、如何に强力なる主力艦といへども、擊沈せらるるか、または戰鬪力を失ふか、いづれかなり。かゝる條件の合成の程度については、的確なる斷定を下し得ず、結局考慮すべき問題、卽ち『主力艦は不可缺のものなり』との決定は、空中攻擊に對して最大限の防禦力を賦與する設計ありや否やにかゝる。」

尙これに對してその答申案に次のやうに述べられてゐる。

「軍艦は如何なる設計を以てするも、あらゆる空中攻擊に對して無力なりとは斷定せず、かつ將來の主力艦は、甲板ならびに船腹の裝甲分裝及び內部の防水區劃につき、空中よりの致命的打擊を受けざる如く設計する事を得るものと信ぜらる。この空中攻擊は長距離射程を有する砲擊と同一のものと解すべし。將來の主力艦が、過去に於て諸種の攻擊に堪へたると同樣、空中攻擊に堪へるものなるべく設計し得ずとする理由はこれを認めず。」

この報告書によつて漸く主力艦の建造が始まつた。この報告書の公表に四ケ月先だち、二隻の戰艦が起工せられ、更に同一型のもの三隻が計畫せられた。卽ちキングジョージ五世級であつて、三萬五千トン、十四吋砲を裝備してゐた。今回の大戰勃發時には、四萬トンにして十六吋砲を裝備せるもの數隻が計畫せられ、または着工してゐた。

五　主力艦・巡洋艦の作戰

この巨艦の用途如何。ドイツは主力艦が乏しく、海洋で堂々と雌雄を決することは困難である。ドイツの主力艦は三隻のポケット戰艦卽ちドイツチランド級のものから成つてゐる。これは一萬トン、主砲は十一吋六門である。それからシヤルンホルスト級の巡洋戰艦二隻。この巡洋戰艦は二萬六千トンで、十一吋砲九門を有してゐる。それから未完成の戰艦ビスマルク號一隻。三萬五千トンで十五吋砲裝備。これに對して英國は開戰當時に於て主力艦十五隻を有してゐた。その中二隻は十六吋砲裝備、他は全部十五吋砲を持つてゐる。ロイアルオーク號は、スカパフロウに於て開戰後數週間にして、ドイツ潛水艦に擊沈されてしまつた。

今回の如き戰に於ては、軍港の奥深くひそみ、その要塞により、出戰を嫌ふ敵艦隊に對して、戰艦を使用することは絶對に不可能である。かゝる敵に對して戰艦を使用することは極めて不經濟であり、これは避くべき事である。これからの海戰はゲリラ戰の形式を取ることが愈々多く、主力艦が堂々と、力を發揮することは、少くなるであらう。

巡洋戰艦は、主力艦の機能を擴大するものである。巡洋戰艦は第一線艦としての武力を發揮しながら、獨立の行動をなしうるものである。世界大戰以前に於ては、巡洋戰艦はヘリゴランドの海戰の際の哨艦の役目を果したものであつたが、この時期には、フォークランド號とドガーバンク號を合して一の型を案出した。そして二隻の長を備へしめたのであつた。そのため純粋の巡洋艦の性能はなくなつたのであつた。しかしこの種のクキーンエリザベス號は、これまでに建造せられた最高速度の巡洋戰艦であるらしい。けれどもその二十五浬の速力は、ライオン級のそれより、はるかに劣つてゐる。その重厚な裝甲のため、燃料、航續力と機動性とを失つてゐるのである。そして海軍としては、それを巡洋戰艦として扱ふかどうかに苦慮したのである。

とにかく前に述べた委員會分會は、主力艦の建造を必要と認めてゐる。その分會では、その性能については疑つてゐるのではなく、今回の海戰に於てその性能を發揮出來るか、どうかとの點を研究したのであつた。そしてこの二の問題は互に關係がある。今後の海戰に於ては事態がいよ〳〵複雜化して來るので、戰艦をその性能の規範によつて制限せられる武力としてではなく、戰機を決する手段として考へられてゐる。從つて先づ軍艦を建造して然る後その用途を考へるのでなく、既に承認せられてゐる如く、舊式の戰法を認めない事になるのである。前の世界大戰前の平和な數年に於ては、海軍の訓練は誠に舊來の正統的のものであつた。けれども時の波が新しい作戰を要求してくる。即ちドイツ艦隊が、スカンジナビヤ護送船團を襲擊して、これに相當の損害を加へた時、戰艦が急派せられたのであつた。

即ち現在に於ては、特に優勢なる大艦隊といへども、その主力艦が攻擊力を發揮することは、その條件に依ることを承知せねばならない。そして英國の軍令部では絶えず世界の地圖を前にして、主力艦隊が直接敵の擊破の機會を廣くなし得るやうな主決戰方面を求めてゐるのである。シンガポールの防備の强化は近來特に著しく、これは現在では戰艦の根據地であ

り、ドレツドノート級の艦隊が、その基地から行動を起し、太平洋戰爭の起つた際には、强力なる攻擊に出る事を誇つてゐる。今の所、戰時であるため英國の海軍省はその戰艦の活動範圍は絕對に公表してゐないし、またこれを推定することも困難である。しかし戰艦が「海軍力の沈默せる壓力」となつてゐることは明である。とにかく英國の戰艦の對空裝備は重大問題である。殊にドイツが極めて優秀な空軍を有してゐる以上、その裝備は生死の問題である。又ドイツが英國の封鎖を敢行してゐるが、その時の戰艦の役目はどうであるか、深く考究すべきであらう。

かくて主力艦の行動の分野が、現代の海戰に於ては決定し難いものであるが、艦隊全般の機能といふことは、これからいよ〳〵複雜になつてくる。英國の海軍がなしてゐる作戰を見ると、近代戰の傾向がよく分る筈である。一言にしてこれを盡すならば、敵が英國海軍の作戰を打破するその手段である。列國海軍力の比較表を見ると砲の効力が戰鬪力の完全なる尺度となつてゐる。それは砲が海戰の主要なる兵器であるからである。ドイツは劣勢なる海軍力を有してゐるため、傳統的の砲による攻擊を忌避してゐるのは賢明である。ドイツは、鋭くして小なる武器を以て戰つてゐる。卽ちその作戰の原則は、奇襲および强襲であり、そして甚大なる戰果を獲得せんとしてゐる。水雷、機雷、空襲を以て第一のものとし、砲を第二としてゐる。

六　前大戰の教訓と巡洋艦

第一次世界大戰は、英國海軍に大なる教訓を與へた。その大戰に於けるドイツ海軍の目的とせる所を了解し、以て今時の海戰の策を立て又物資の方面に對して充分なる警戒をするに至つてゐる。世界の果から物資を運搬する商船の水路に無制限に機雷を撒き、或は潛水艦を以てその海運業を覆滅せんとしてゐる。また優勢なる空軍は爆擊を敢行してゐる。かゝる海面と海底と上空の三部の敵を英國海軍は防衞すべく必死の活動をつゞけてゐるのである。

英國海軍に今次の戰に於て課せられたる最大の任務は所謂輕小艦隊である。この種のものでは、巡洋艦がその首位にある。これはその型式より、むしろ性能を云ふのである。勿論軍艦は凡てその目的によつて個別的型式に分れてゐる。巡航に就役すれば巡洋艦となるわけで

ある。そして戰時には、商船殊に大型客船は海軍へ引上げられて、武裝を施し補助巡洋艦として、海軍の一勢力となるのである

近代海軍の傾向としては、巡洋艦型が段々に標準となつてくることである。第一次世界大戰に於ては、種々の巡洋艦を保有して居り、その小なるものは、二千トン、二十浬、四吋砲裝備のペガサス號位のものから、大は一萬四千六百トン、二十三浬、九・二吋および七・五吋の砲を搭載したミノタワ號に至るまで種々の等級があつた。クラドツク提督が指揮して、コロネル沖で海戰を行つた時の艦隊は三種の全く別種の一艦隊と補助巡洋艦一隻とであつた。

前世界大戰の戰略的經驗により、英國海軍では、巡洋艦建造の方針に一大變革を必要とするに至つた。輕巡洋艦を多數に建造するに至つたのである。即ち五千トン前後、二十九浬、六吋砲搭載である。これは通商の保護上からも、また艦隊の一單位として行動する場合にも共に有力なものであつた。その理由は、戰鬪力および機動力に於て完備してゐるからであつた。その後二十五年間に、細部については非常なる進歩を遂げてゐるが、この型が輕巡洋艦今日のものの、基礎となつてゐる。ワシントン會議に於ては、艦型と備砲の最大限が一萬トン八吋口徑となつてゐる。勿論その會議に於ては、それ以下は、自由となつてゐたが、各國はこの最大限度の建艦に熱中した。英國ではケント級の建艦を始め、その最初の五隻は一九二四年に進水した。大型戰艦を酷評してゐた連中は、この攻擊力充分なる巡洋艦を以て、大艦に代るべきものとし、理想的艦型としてこれを歡迎したのであつた。

この種の巡洋艦の性能は果してどうであつたか。四個の砲塔に八吋砲八門を裝備し、一萬トンを割つたのであるから、裝甲については、これを充分にする餘地が乏しくなつてしまつた。つまり敵に對しては、强力なる打擊を加へ得るが、敵の攻擊には堪へ得ない拳鬪家の如きものである。艦隊中の如何なる艦種といへども、敵艦の砲擊に對してこれに堪へ、かつ攻擊し返す戰鬪力がなくてはならぬ。この點から云つて、この巡洋艦は決して滿足なるものとは云へないのである。

七　英巡洋艦と裝備

一九三〇年に至り、英國海軍では、八吋砲搭載のこの種の巡洋艦の建造中止を決定し、六

時の裝砲を確定した。一九三六年進水のダイド級のものは、更に下つて、新型式の五吋四分の一の砲を以て裝はれた。これは巡洋艦の性能を減じたと考へてはならない。八吋裝砲の巡洋艦は折衷主義のものであり、技術的に見て健全なものとは云ひがたい。そしてたゞ海戰の際の武力のみを考へ、他の要素を排除してゐるのは、巡洋艦本來の使命を完うしないものである。

ユトランド沖の海戰に於ては、この巡洋艦を攻擊に使用したことにより、非常なる損失を招いた。一般專門家の意見は、あの場所へは巡洋艦は配置すべきでなかつたとしてゐる。それは戰鬪力としては餘りに弱く、偵察力は强すぎるのであつて、そして巡洋艦としては第二義的の性能を發揮せんとして、ブラックプリンス、デフエンス、ウオリアの三隻は擊沈せられてゐる。

英國海軍當局をして六吋砲を巡洋艦の第一の備砲としてゐるのは海軍に於ける砲の絕えざる進步の結果である。コロネルに於ては、英國軍艦はシヤルンホルスト及びグナイスナウの二隻からは英艦の射程外から砲擊せられた。この二隻は八吋砲を搭載してゐたのであつた。

即ち英國軍艦は敵から砲擊せられて、これに應戰しえなかつたのである。この射程の問題が巨砲の最大の根據となつてくる。併し今日の六吋砲は、軍艦と軍艦が射擊を交換する最大限度まで有効であつて、それ以上の長距離は必要ないと、英國は斷じてゐる。主力艦は、その艦載の航空機により、早くも水平線下の敵を捕へ、これに砲火を浴せうるが、巡洋艦は、視野に入つてゐない敵の攻擊は必要ないものと云はれてゐる。

現在英國巡洋艦の裝砲の原則は、同一射程と同一効力を有し、しかも、その彈丸の大さと共に數を多くすることである。即ち、射擊の効力を增大することである、六吋の砲彈は百ポンドに達する。兵員が手で操作しうる最大重量である。砲手が手に持ち上げ、砲尾に裝着しうる最大重量である。八吋の砲彈はその次のものであるが、二百八十三ポンドあり、從つて手の操作は不可能で、機械を必要とするので發射の速度が著しく緩慢になる。その大なる彈丸の破壞力は、はるかに大ではあるが、この破壞力を必要とするのは、戰艦攻擊の場合だけであり、巡洋艦が戰艦攻擊を行ふことは全く本來の性能上不必要なことである。いづれにせよ、巡洋艦は强力なる裝甲の軍艦より、はるかに優勢なる速力によつて、その敵の攻擊を避

ける事を本務とするものである。

八　シユペー號をめぐつて

最近は航空機ならびに軍艦の發達により、巡洋艦も著しい發達を遂げ、最新の巡洋艦は、一萬トン、六吋砲十二門を搭載し、最高速力三十三浬と英國で述べてゐる。六吋砲の發射速度は一分間十五回とせられてゐるが、この發射速度は戰鬪中確實に持續せられるとは思へない。かゝる砲を十二門一齊に使用するとすれば、近代の火藥の進歩により相當甚大なる破壞力を表はすことが出來ると思はれる。

巡洋艦の裝甲ならびに備砲については最近の海戰によつて、次第に有効なる改良がなされつゝある。ポケツト戰艦のグラーフシユペーは、ウルガイ沖で、巡洋艦アジヤクス、アキレス、エクセターと遭遇した。この巡洋艦の中の最初の二隻は各六吋砲八門を備へてゐた。最後のものは八吋砲を備へてゐた。グラーフシユペーは、十一吋砲六門、五・九吋砲八門を搭載してゐたが、この五・九吋といふのは英國の六吋と効力が同一と考へてよからう。一發の彈丸の重量が効力を決定するとすれば、この戰ひは勝敗の決が明であつたであらう。しかし事實は、英國軍艦が、その砲火を分散した點に於て、甚だしく有利であつた。ドイツの艦長ラングスドルフ大佐も、英艦の行動の敏捷を稱讃してゐる。この時には、エクセターが、大損害を受け戰列から離れた。このことは六吋砲の有効を語つてゐるのである。アジヤクスとアキレスとは、このドイツの軍艦を追跡し、モンテヴイエド港に追ひ込み、その逃亡を監視してゐた。しかも兩艦とも充分の戰鬪力を有してゐたのであつた。この海戰の結果は巨砲の破壞力より小砲の集中射擊の勝つてゐることを證明してゐる。グラーフシユペーはその速力の低いことにより、非常な不利があつたし、少くとも速力に於て五浬劣つてゐたらしい。その敏速なる行動により、又輕快なる砲により利するところ甚だ大であつたことは否定出來ないであらう。巡洋艦の多數が戰艦の攻擊に當つた事は感心出來ないし、巡洋艦は通商保護で充分である。とにかく、グラーフシユペーが善戰した事は全く感歎の外はない。しかし一部の專門家は、グラーフシユペー號が一つの失策をやつたと稱してゐる。卽ち煙幕を張つたことにより、その味方の砲手に照準の自由を失はしめ、その强力なる砲火の効果を表はしえ

ず、かへつて高速度の英艦をして、その砲火を避けて、しかも四方より攻擊せしむるに至つた。ラングスドルフ大佐の言に從へば「數回英艦は、煙幕を突破して四浬以内に現はれて、砲火を集中した」とのことであつた。

他の一の戰例にして此の巡洋艦の備砲問題に關係してゐるのは、ドイツチランド號と、ラワルピンヂ號との海戰であつた。このドイツチランド號は、グラープシュペー號と同じく、ポケツト戰艦である。そして之は、その十一吋の砲火を以て、英艦を沈めたのであつた。この英國のラワルピンチ號は正規の巡洋艦でなく、補助巡洋艦であつて、その性能は甚しく異つてゐる。その速度は、ポケツト戰艦に劣ること甚しく、完全にドイツチランド號の砲火の的となり、しかも砲塔以外には裝甲は殆どなく、その兵員の訓練も行きとゞかず、從つて正常の砲の効果を上げることが出來ないのであつた。又いづれの場合に於ても、六吋砲裝備の軍艦が、十一吋砲裝備の主力艦に對抗することが全然無理であつた。

九　驅逐艦と潛水艦

英國の海軍は二種の改新を行つてゐる。即ち、近代的の航空母艦と、水雷艇とである。そして又昔よりの性能のみでは立つてゆけない驅逐艦がある。この水雷艇驅逐艦なるものは、ビクトリヤ王朝の末葉に、フランスが多數に建造した水雷艇を攻擊するに用ひるため、英海軍が備へたのであつた。とにかく當時は、水雷攻擊の距離は千ヤードが最大限であつた。

この高速度の水雷艇の出現により、驅逐艦も急速に進歩して來た。それで小艇隊の組織が出來上り、之が主力艦隊に附屬せられたのであつた。これはその高速と艦型の小とを利用して敵の艦隊に肉薄し、水雷を發射し、敏速に偏舷の射擊をさけて射程外に出るのである。前の世界大戰當時までは、驅逐艦戰術は大して變化しなかつた。そして驅逐艦も、大艦隊編成の一要素として認められるに至つた。その大さも大體四倍になり、速力も大體三割近く增大した。それから水雷そのものも、その形體が大となり、また攻擊力も增大した。しかしながら、驅逐艦は依然として水雷による艦隊であるとせられ、集團攻擊の武器として認められてゐた。かくして小艇隊が出現したのである。即ち一九一四年には三ケの驅逐艦隊が第一艦隊に配屬せられた。戰時には之は聯合艦隊に加へられるものであつて、巡洋艦一隻、補給船一

隻、驅逐艦二十隻から成るのであつた。一九一四年八月の艦籍表には、スパローホーク級の軍艦が第四小艇隊の一部として就役した。これが驅逐艦の發達の情態であつた。排水量九百三十五トン、二萬五千馬力の機關を備へ、三十五浬を出しうるものと推定せられ、四吋砲三門を備へ、二ポンド砲一門、水雷發射管六個を有してゐた。

この驅逐艦は大戰勃發後、その任務が急に擴大せられた。敵の潛水艦の活躍は、豫想せられてゐたが、その對策に確たるものはなかつた。今から考へて見ると、英國海軍は、ドイツの主力艦隊の方に氣を取られてゐて、その新鋭の潛水艦に對して手ぬかりがあつたらしい。そしてドイツの主力艦の增强に備へ、英國は主力艦の增大に狂奔してゐた。かくして英國は久しく見なかつた大海戰時代に入つてしまつたわけであつた。併しそのドイツとの海戰なるものは、所謂ゲリラ戰術であつた。潛水艦によるゲリラ的の攻擊であつた。ルシタニヤ號の擊沈は、世をして驚倒せしめ、新海戰の新しい概念を與へたものであつた。

そこで第一に起る問題に、この潛水艦を如何にして擊滅するか、そして又通商を如何にして保護するかに在つた。この大戰の三分の二の時期が經過するまでは、商船護衛制度が確實に行はれたとは云ひえなかつた。幸にして英國の驅逐艦が發達してゐたのであつた。一九一四年の海軍の發表によれば、驅逐艦は就役總數二百六十三隻に上つてゐた。その內の多數は性能から見て滿足すべきものではなかつた。しかし驅逐艦が海上に姿を表はしてゐる以上、潛水艦には充分對抗出來るものであり、充分その活動を防ぎ得たものであつた。詳しくいへば、初期の潛水艦が活躍した頃のものは、その裝備も幼稚なもので、驅逐艦の方が、その攻擊力は勝つてゐた。勿論巡洋艦の方が、かゝる任務には適してゐたが、巡洋艦の數をそんなにまで增加することは不可能のことであつたのだ。

かくして小艇隊が急に重視せられ、また整備せられた。そして驅逐艦隊が新しい獨立の戰隊として活躍することゝなつた。その彈藥艙が水雷發射管より重要なものとなつてきた。それにまた製艦技術上、驅逐艦の獨自の任務は狹められる傾向に在つた。潛水艦の擊滅には巡洋艦と主力艦の方が有効であつたのである。かくして輕巡洋艦として、エンタープライスとエメラルドの二隻は、その最高峰に立つた。これは戰爭末期に起工せられたが、その完成したのは休戰後であつた。これは六吋砲七門、發射管十六を有してゐた。八馬力のタービンに

より時速平均三十三哩以上を出しうるものらしい。この二隻とも、普通の驅逐艦の二倍の水雷發射管を有してゐることは一寸變でもある。勿論この水雷發射管を、砲よりも多く使用するわけのものであり、水雷發射管を砲の二倍にした理由も此處にあるのであらうが、これは從來の驅逐艦の株を奪つてしまつたものである。

この傾向が次第に甚しくなり、現在に於ては、便宜上驅逐艦は本來の部門に入つて居り、あらゆる任務の補助者となつてゐる。今次の大戰の開始後に作られた英國の驅逐艦は、一八七五トン、四萬馬力のタービンを備へてゐるが、その裝備は大變面白い。四・七吋砲八門、高射砲と四ケの水雷發射管を有してゐる。前に述べたエメラルド級に於ては、水雷發射管が砲の二倍あり、この驅逐艦に於ては、砲が水雷發射管の二倍ある。

即ち、この驅逐艦は輕巡洋艦の縮少された意味のものである。そしてその任務を果してゐる。これは小艇隊に配屬せられてゐるが、それは編成上の都合からである。

この驅逐艦の建造せられるまでは、英國は相當保守的に進んでゐたのであつたが、これ以來、急に飛躍してきた。他の軍艦は皆、大型とそして速力と備砲の增大を目的としてゐたのであるが、英國では新しい研究を始めたわけである。つまり、英國では驅逐艦の性能を向上せしめ、水雷發射管を減少してゐるが、これは將來の海戰に於て水雷攻撃の價値を、研究の餘地あるものとしたからではあるまいか。

一〇　航空母艦と潛水艦

さて、潛水艦は水雷なくしては、その攻撃力は甚しく減殺される。潛水艦に對して、砲撃を集中してゐる劣弱の軍艦に對しては、水雷は頗る有利なものである。しかし、水雷に對し水雷を用ひるのは、當を得たものではない。水雷を以て潛水艦を攻撃する場合は、局限せられてゐる。潛水艦追跡の驅逐艦は、水雷發射管を必要とはせぬであらう。その水中航行を警戒する時も、何か潛水艦の目標物が視野に入つてくれば、直に砲撃するのが普通であらう。

商船攻撃を別とすれば、水雷攻撃は、あまり重大なる海戰の方途とはいひ難い。軍艦は一般に潛水艦を以て、平常の海上危害の一と見なすに至つた。大戰の經驗によるならば、海面上の軍艦に對する水雷攻撃の効果は、決して增大されてゐない。水雷による破壞力は砲撃と

比較すれば、甚しく小である。ユトランド海戰に於ては、英の戰艦の唯一隻マールボロだけが雷擊を受け、而も戰鬪力を失はなかつた。それ以來、驅逐艦の戰術は大變化を來した。即ち敵の艦隊に肉薄すること――それは水雷發射の有効距離千ヤードの時代と異り――現在千五百ヤードに延びてゐる故その必要はなくなつた。艦隊間に於て、相互の軍艦の間に於て、水雷攻擊をなしうる場合があるとしても、水雷攻擊專用のため千二百トン乃至千九百トンの小艦を建造する價値ありや否や問題である。主力艦や巡洋艦に水雷發射管を備へたのは、それが自ら、雷擊を行ふためであらう。

併し海軍に於ては、軍艦の進歩が、昔の狀態をくりかへすことも時々ある。舊式の驅逐艦は姿を消したのであるが、また〳〵、新しい驅逐艦が出現して、昔の職能をくりかへしてゐる。モーター驅逐艦がこれであつて、時速四十浬以上、肉薄攻擊專用のものである。これは未だ完璧とはいひ得ないが、將來は艦隊と行動を共にすることも出來ると思はれる。今次の大戰に於ては、ドイツがその優勢なる空軍に賴ることが多く、英國の通商保護と云つても、海面上のドイツの軍艦、又は海面下の潛水艦の警戒では絕對に安心出來ぬ情態となつてゐる。今日、この種の驅逐艦は、その高速と對空備砲とにより、空襲に備へることも出來るのである。又、英國の空軍と連絡してドイツの潛水艦擊滅に從事することも出來るのである。

現在海戰に於ては驅逐艦と航空母艦との共同行動は必然的のものである。航空母艦はその艦型の大きなことにより、敵の攻擊の好目標である。その機能上航空母艦が裝甲に於て劣ることは止むを得ぬことであつて、海面上の敵艦からの攻擊には脆いものである。殊に潛水艦を搜索する航空機を積載することにより潛水艦からも攻擊せられる。即ち驅逐艦の護衛を受け、空軍と連絡して敵の潛水艦を擊滅しなくてはならない。併し航空母艦が、自己防衛力がないと考へてはならない。マークロイアル、イラストリアス、ビクトリアスの三隻は高角の四・七吋砲十六門を備へ、相當の高速を保有してゐる。

現代の海軍の中で潛水艦が最も舊態を持續してゐるのである。潛水艦は敵から姿を發見せられることなしに、敵を攻擊することを使命としてゐるので、特殊の力を持つてゐるが、同型の他の艦と比較する時、その裝備速力の總てに於て劣るのは止むを得ないのである。勿論數次の海戰により、その性能の總てに改良が加へられ、航續力、裝甲、速度、備砲等に於て

昔と面目を一新してゐる。併しその戰鬪力は依然として乏しいものである。その重大使命の一は、急速に出現して水雷攻擊を加へるか、または近距離の海面に浮出し、武裝のない船舶を砲擊することである。またこの艦は機雷をひそかに敷設する役目もする。世界大戰中に於ては潛水艦は、ヘリゴランド沖に哨艦の役目をつとめ、貴重なる情報を蒐集したこともあつた。併しこの任務に於ては航續力大なる航空機に勝たないが、やはり捨て難い力を持つてゐる。この英國の潛水艦はドイツの潛水艦一隻を沈め、巡洋艦二隻を水雷攻擊した戰歷を持つてゐる。

主力艦、巡洋艦、驅逐艦、潛水艦が今日の海軍の第一線部隊をなしてゐる。航空母艦も重要なる補助艦である。併しながら、これのみで將來の海戰は勝算ありとはなし得ない。

一一　獨の水雷爆彈機雷に備へて

ドイツの海軍が現在使ひつゝある海戰の手段は、水雷と爆彈と機雷とである。ドイツは英佛の聯合艦隊といふ、はるかに優勢なるものを敵に廻して相當の戰果を收めてゐる。

さてドイツが、第一次大戰と同樣の作戰を以て、海戰を開始することは已に明かな所であり、英國海軍はこれに備へる所があつたのである。

ドイツは大戰以來その力を潛水艦に注いでゐた。一九三六年の海軍の大擴張の際、英國海軍當局は、ドイツが、二百五十トンを越えざる小潛水艦を多數に建造して、英國の裏をかきつゝあるのを早くも了解してゐた。かゝる小潛水艦は狹い水路の活動を狙つたものである。またドイツが海軍航空隊の大增設をやつてゐたのも事實であつた。かくして、英獨共に新鋭の水上機を建造し、こゝに新しい戰術が創設せられ、主力艦にまた一の攻擊が加はることゝなつた。

一九一八年の初期に於ては、ドイツの潛水艦の活動は、その極に達したが、この潛水艦に對して英國では、商船の護送と、その航路指定をやり、ドイツ潛水艦の擊滅に全力をつくしたのであつた。

英國の海軍が今次の海上作戰に於て、どれだけの勝利を收め得るかは、一つの大なる疑問である。一九三九年と一九一七、一九一八年とでは、作戰上の條件が甚しく違つてゐる。ド

イツがどこに潜水艦の基地を求めるかは、一つの大なる問題である。スペインを援助する代り、その海港に潜水艦の補給地を設けたとの說もあつた。

今次開戰以來、ドイツの潜水艦は、行動を起すべく早くも準備を整へてゐた。併し潜水艦はその母艦から燃料彈藥を補給されることは容易であるが、かく長期に渡り海上に繼續的に留まることは困難が伴ふものである故、その行動には非常な苦辛が拂はれてゐる。

今次の大戰が始まつてから英國はドイツの作戰を注視し、その潜水艦の活動を檢討した。最初世界全般に渡つて航行してゐる英國の無防禦の船舶の擊沈せられたものは、その數が相當多數であつたが、ドイツの潜水艦の配置が明かにせられてより、その數は漸減し、ドイツの潜水艦の擊沈せられたものも夥しく、その數はこの前の大戰の比ではないと英海軍は述べてゐる。英國の主力艦の活動はなかつたが、英空軍の水上機が出動して、ドイツの潜水艦の攻擊をなし、または沿岸警戒の英艦と共同作戰に任じ、その戰果は多かつたと稱してゐる。とにかく、英國の航空部隊でも、このドイツの潜水艦に對する作戰には全力を注いだものと考へられる。

一二　商船護衛艦

英國の海軍では、ドイツの潜水艦は、前大戰の時と同一水路に出現するものと見、それに對處する艦艇も前回と同一としたのであつた。この艦艇の任務は、防衛と索敵である。前者は、商船團の護送と、大型軍艦の護衛であり、後者は、その任務の內容甚だ多く、こゝに記すことは出來ない。

商船護送のため建造せられたものは護衛艦である。これはその艦種及び性能から見て砲艦にまさる。そしてその本來の商船護送の任務は果してゐるが、何分にも速力が遲く、商船護衛艦は通常十浬以上の速力を必要とせずこの原則からであつたらしい。とにかく速力が低いため、海戰の時の價値は乏しいものである。專門家は、十六浬が商船護送艦の最大速力であるとしてゐるが、これは動力を低くし、巡航距離を長くするためと解せられる。

この護衛艦は、本來潜水艦の防備のため出現したものであつたが、これが出現して就役するや、潜水艦の水面上速力が十八浬に及ぶに至つた。從つてこれは、潜水艦攻擊を目的とし

たのであつたが、その速力の遲いため、追跡も出來ず、その本來の効力を失つてしまつた。その上その備砲も小であつて、潛水艦搭載のものよりも、口徑、射程共に劣つてゐる。どうにも役に立たなくなつてしまつた。

程なく獨英の關係が惡化し、開戰が時間の問題となつたとき、砲艦の改造が重大なる準備となつてきた。そして護衛艦なる新しい名稱を取るに至り、一新して登場したのであつた。先づ第一に機關の馬力と、砲の効力の著大なる增强であつた。初代の砲艦とこの護衛艦とを比較すると大變面白いと思ふ。一九一四年起工のフオツクスグロブは排水量一一六五トン、機關は一八〇〇馬力、四吋砲二門を備へてゐた。一九三六年起工のビタンは一〇八五トン、三三〇〇馬力のタービンと四・七吋砲五門とを備へるわけであつた。

一三　英艦の編成と新鋭武器

この種の軍艦は本來の任務遂行に從事して居り、華かな戰果を公にする事も出來ないのは自然のことである。

かゝる種類の小艦も排水量千トンを越えぬ位のものではあるが、その價値は大きいものである。ビタン級のものであれば、高角の砲を備へ、しかも、海面に發射も出來る故、メーウエ、ゼーアドラー、ウオルフ、エムデンと戰つても勝算ありと云はれてゐる。これに高射砲機關砲を加へるならば、爆擊機に對しても强力であらう。

ドイツが英の主力艦の活動しにくいせまい水路に機雷を撒いたのは、英に取つては大打擊であつたらしい。英國がその掃海艇のみならず、トロール船を動員して、この機雷排除に努力したのを見ても、判斷出來る。

いづれにして艦隊の編成には主力艦の如き巨大なるものから、護衛艦の如き小さいものが必要なのである。そして英海軍に於ては現役の將兵のみならず、豫備志願兵までが、沿岸防備にのり出し、廢棄の小艇を利用して海岸の警戒に力めてゐる。

英國艦隊の編成は大體前記の通りであるが、その海戰については更に、その兵器を理解しなくてはならない。一體武器の進步は非常に早いものであり、この前の大戰においては、その初期に、ドイツの輕巡洋艦ならびに補助艦に備へてあつたクルツブの四吋砲の、射程の

長いのには、英海軍が驚いたのであつた。これには、はるかに口徑の大なる英國の砲もその効力において敵し得なかつたのであつた。今回の戰も、ドイツ潛水艦の活動を以て始まつてゐる。これは最初から豫期出來たことであり、別に新しいことではなかつた。たゞ磁石性の機雷だけであつた。そしてこの機雷をせまい水路に撒いたために、英國ならびに中立國の船舶は大なる被害を蒙つたとのことであつた。併しこれも時間の問題であつて、本年二月下旬下院においてチャーチル氏が我々は磁石性機雷を打破する方法を知つてゐる。これを征服するのは、一つの探偵小說の筋と思へば良いと絶叫してゐるが、これは、磁石性機雷出現後三ヶ月のことであつた。彼はこれに對し「それの處置を發見するのが一、それを大規模に片附けるのが一」として二つの段階を指示してゐるが、今まではその第二の段階に深く進入してゐると云はれてゐる。英國の對潛水艦學校では、潛水艦の防衛擊滅を研究し、また機雷投下の航空機に對しては、空軍でその攻擊を演練してゐる。

一四　英海軍今後の戰果

結局目下の戰爭においては、特に新鋭な兵器は出現してゐない。そして主力艦においても小型の軍艦においても、その裝備が大いに近代化されてゐることは云ふまでもない。

けれども作戰の方面においては大なる更新をとげてある。不斷の兵器の進步が、それを使用する方法を更新せしめるのは當然である。ハーウッド少將の言によれば、モンテヴイエド沖のグラーフ・シュペー號との遭遇戰は、次の如くであつた。彼は、グラーフ・シュペー號が、もし機會を與へるならば、その强力なる火器により、英の三巡洋艦を擊破するものと觀測してゐた。シュペー號は十一吋砲六門を二つの砲塔に裝備してゐる。從つて一齊に砲擊する方向は二つしかないわけである。これをよく知つてゐた少將は、單縱陣を以て進み、これに砲火を集中する際に、シュペー號の側面に出る作戰を取らなかつた。卽ちその軍艦三隻と長距離に分散せしめたため、シュペー號は三方向への砲擊を必要とするに至り、行動上また射擊上非常な不利に陷つてしまつた。

その戰果は著しいものであつた。これを見ても、近年の英國海軍の猛訓練振りが理解出來るわけであらう。そして戰局の判斷と、指揮者の決心も重大事項であり、この點も平素より

熱心に演練してゐる。且つ英國は、國家總動員の體制に向つて居り、今後、海軍が如何なる戰果をもたらすか、興味ある問題であらう。

第九章　英國の空軍と防衛

一　防空に苦惱する英國

今次の大戰勃發の二週間前、英佛の空軍は緊密なる連絡を保ち、英國空軍の大集團がフランス上空を飛び、その內のあるものは、マルセイユまで進み、またフランスの空軍が英國を訪問したことは、ドイツへの警告として、世の注意を引いたものであつた。

その頃、英國空軍は早くも戰鬪準備を終り、爆彈を積載してしまつてゐた。照空燈、高射砲が早くも配備を終つてゐた。ロンドンの公園にも砲手が配置につき、去年の八月二十四日から、市民の對空監視隊が勤務してゐた。その第一の警戒は上空よりの電擊作戰であつた。それが軍事施設のみに對してか、また一般市民に對してか、これも大なる關心のことであつた。

現代の如き空軍の發達した時代に在つては、戰は遠く戰場の第一線において行はるゝのみではないのである。殊に英獨間の距離は、僅少であつて、獨の空軍基地から、英國の首都ロンドンを空襲するのは、現代の空軍の技術としては易々たるものである。更に英國が、空軍において劣勢であり、海軍において優勢を誇るのみである以上、ドイツがその巨大なる空軍を以て空襲を敢行するのは當然であつた。そして、その空軍の性能および作戰の意圖からして、英國の何處を最初に爆擊するかが第一の問題となつたのである。それは英軍の航空隊の現勢上、英國全般を防衛することは不可能であつた。そこに英國の惱みがあつたのである。海軍ならびに空軍專門家の意見によれば、ロンドンが多大の軍事施設を有してゐる事實から見て、軍事施設擊滅の擧に出でるものと見られてゐた。そして軍事施設空爆は國際法規上正當と認められてゐるのである。勿論これによつて直に英國が屈服するとは考へられないが、このロンドン空襲は効果大なるものと觀測したのであらう。

二　ロンドン空襲を豫想して

さて軍事的施設といふと、飛行場、石油倉庫、火藥庫、ドック、港灣、化學工場、飛行機ならびにその機關の製作工場、發電所、鐵道分岐點、橋梁等である。そしてこれらがその重要性に應じて空爆を受けるとも思へぬ。即ちその時の條件によつて、いづれが多く空爆を受けるかは、何人も豫想することは出來ないであらう。

英國として、最も重大なるものは、海上の通商である。英國は海上の通商によつて、その工業原料も運搬せられ、又食糧も補給せられ、また海運業がその經濟部門の一大要素となつてゐるから、その通商路の空爆が、甚しく心痛の種であつたが、今日に於ては、空軍が通商水路保全にも活動してゐる時代なので、飛行場がその點から見ても、空爆せられる可能性が多分にあるものである。そして飛行場の空爆は繼續的のものであらう。それで飛行場にはカモフラージュを施し、全國各地に分散してゐる多數の飛行場を保全しようと努力してゐた。

火藥庫はこれも廣い地區に分散してあるから、攻擊を加ふべき重要場所の推定は困難と思はれる。勿論、空軍當局の作戰は、これを明にしえないが、敵の空軍がその爆擊目標を選定決定し、これに完全なる攻擊を確實に與へるだけ、降下接近出來るかどうかも疑問であら

う。強力なる航空部隊が、特に航空機および高射砲の攻撃を制壓したとしても、廣範圍に渡る工業地帶の爆擊位が關の山であつて、これも生産を完全に止めることは不可能で、工業に重大損害を與へる位と見てゐる人が多かつた。

とにかくロンドンが空襲第一の地點であつたことは、何人も認めてゐた。例の軍縮ならびに經濟界の不振によつて、英國の國防豫算も縮少せられ、そのため空軍の劣弱を來したのであつたが、その乏しい豫算を以て、先づ第一にロンドンの防備が施された。そしてその防備施設は殆ど大部分が、ロンドンに集中せられ、過去二ケ年間において漸く他の比較的重要性の乏しい地帶にも對空防備をなし得たのであつた。

英國はこれまで、眞の空襲を理解しえないのであつた。勿論ポーランドとドイツの空中戰があつたが、ポーランドの空軍はドイツに比してはるかに低位にあり、到底互角の戰は期待しえなかつた。ポーランドは空中戰にも、また地上防備にも、獨空軍の敵ではなかつたのである。

ドイツの空軍はポーランドにおいて目覺しい活動をとげた。ポーランド戰線の後方の鐵道および飛行場を爆擊し、一般都市にも空襲を加へたと英國は稱してゐる。最も軍事施設のみならず、一般都市に對する爆擊は戰果を擴大し、且つその國の抵抗力を急速に弱めるとしてゐる人もある。

スペインにおける兩軍の空中戰も、あまり英獨間の空中戰豫想の參考にならぬ、としてゐる專門家がある。併しこれには、スペインの前政廳の發表數字を擧げて見よう。これはあまり信用しえないと考へる。カタロニアの二十四の都市に對し空襲を敢行した延回數、五百五十二回、死者三六六二人。投下爆彈の數は一二七〇四で、一名の死者に爆彈四個を要したことになる。これでは空爆技術も信用出來ないことになつて變である。人口合計十五萬の四大都市への空爆において四九三〇個の爆彈を用ひ、死者三百六十人との發表もあつた。

とにかく空襲の効果については種々の說があるが、フオツシュ元帥の言も參考になると思はれる。「大規模の空襲はその効果は計り得ないが、これが人心に及ぼす影響の大なる爲、敵國政府に戰意を失はしめるに至り、その事に依つて効果甚大なのである。」

かくてドイツが、その世界で優秀な空軍により、爆擊に爆擊を加へ、一兵も失はずして、

英國征服を企てゝゐるとの觀測も行はれ、英國一般はその空襲の規模如何を注視してゐた。

三　空襲防衛の二方面

英國の空軍はその整備に於て立ち遲れであつたことは世界が認めてゐる。併し開戰以來、その充實には特に苦辛し、一方、フランス戰場へ、その莫大なる空軍を增援したと稱してゐるが、英國の作戰から見て、その航空兵力は、むしろ僅少であつたと見なくてはなるまい。英國の本土防衛の航空兵力については勿論、數字は發表せられてゐない。

空襲防衛の手段は二つに分れる。一は積極的のものであり、一は消極的のものである。積極的の防衛は、戰鬪機、高射砲等により攻擊またはその歸還の際に、擊滅することである。また消極的のそれは、偵察を地上ならびに上空より行ひ、その航空兵力および進路を報道しまたは阻塞氣球その他の防空手段によりて行ふものである。

この二種の要素は合併して行はるべきもので、この基礎を置いたのはアシュマー將軍であつた。

さて平時に如何に訓練しても、そのまゝ戰時に戰果を收めうるものとは限らぬ。この防空施設を如何に整備しても、大部隊の飛行機が時と場所を巧に選擇して來襲するとすれば、その內の一部分が、防空網を越えて入つてくるのは止むを得ないものである。また防備隊としても、敵機の全滅を企圖してゐるのであるが、敵機に大損害を度々加へなければ、擊退も不可能なのである。

そしてこの空襲防備といふことは、消極的の防備のみでは、意味のないことである。卽ち敵の空軍基地、飛行場、その補給所を反擊しなければ効果はないのである。併し英國ではその航空兵力の不足を痛感してゐるのであり、またロンドンを始め各地區の防衛に必死の努力を傾倒してゐる今日、一應その防備施設を檢討して見たい。

四　阻塞氣球とその威力

先づ第一に阻塞氣球を述べることゝする。阻塞氣球は防禦の第一のものであらう。その目的は、敵の空襲機をして、その下をくゞることにより、戰意に影響あらしめるのである。

またこの氣球群を通過したとしても、砲手ならびに、戰鬪機乘員は、阻塞氣球網の最上層以上に在ることゝなり、その爆擊力は輕減せられる、

今次の大戰前、全然新しい阻塞氣球網が考案せられ、實行に移された。一九一四年から一九一八年に使用せられた阻塞網は、乘員のない觀測用氣球に、水平の鐵線をつけたものである。この鐵線は地上に達しないもので、その高度は六千呎以上であつた。これは敵機に取つては大なる伏兵であつて、暗夜にはそれが發見出來ず、相當効果のあつたものであつた。

現在の阻塞氣球は、多數のガスを充した氣球と、地上にその捲上機を備へたトラックと、鐵線の三から成つてゐる。この氣球の配置についても研究が重ねられ、百ヤード間隔の鐵線間をくゞる、翼長七十呎の爆擊機の通過率は四分の三である。そしてこの中に入り、又出る率は半減されることになる。時速二百哩の飛行機がこれに引きかゝれば、完全に破壞される事になるであらう。併し夜間および、曇天の外は、乘員はこの阻塞氣球を發見してこれを避けるであらう。けれどもこの鐵線の方は晝間でも發見困難であり、この防衛手段は有力なものと認められてゐる。

この阻塞氣球は、英國陸軍の觀測用氣球から改造したものである。觀測用氣球は一名か二名の乘員用の籠がついて居り、砲兵隊と協同して、その射擊の正否を觀測して報告するものであつた。併し阻塞氣球の方は、乘用は全然なく、たゞ鐵線を保持してゐるだけである。その形は流線形で、風の抵抗を受けること少く、またその尾部には安定裝置が施されて居り、所要の位置に滯留することが出來るものである。この阻塞氣球の內部は大小二つの部分に分れて居り、大きい方の區劃は水素ガスが充たしてあり、小さい方の區劃には、氣球の下部から空氣が入るやうな裝置がしてあつて、空氣を充たすのである。

この安定裝置にも空氣が入るやうになつて居り、この氣球の上昇下降により、氣壓の變化が起れば、それに應じてガス囊及び、空氣囊の體積が變化し、以て氣球が安定するやう設計されてゐる。

さて、この鐵線に敵の飛行機がかゝつた時は、どうなるであらうか。これについては、英軍で試驗をしてゐるが、その結果は秘密に附してゐる。併し一九一四年から一九一八年までにこれにかゝつた例がある。英軍の一飛行士が、ソンムの第一回の戰鬪に於て、この鐵線に

飛び込んだ。その時、飛行機の水平舵と外一ケ所を破損し、千呎の上空から横轉したが、無事着陸するを得たと述べてゐる。また英空軍の一飛行士は、アブロ機に乘船中この鐵線と激突した。そしてその高度が百呎であつたので錐揉の狀態となつて落下し、飛行機は大破したが、飛行士は無事であつた。

またドイツのゴータ機は、ロンドンの東方において阻塞氣球網にふれたが、その乘員は無事着陸することが出來た。

英國空軍のモンク大尉は、前大戰後、程なく飛行中、やはり鐵線にふれたが無事降下した例もある。

その頃の飛行機は大抵は、木造部が多かつたし、また速力も低いものであつた。今日では飛行機は大部分が金屬製であつて、その速力も甚しく大きくなつてゐる。速力の大といふことは、鐵線に突き當つた際の損害も增大することを意味してゐる。かつて、急行列車の一乘客がそのサンドヰツチを窓から捨てたことがある。所がその時、すれ違つた急行列車の機關車の運轉室の金屬板にあたり、その中へめり込んだといふ話しがある。互にすれ違ふ列車だから、その合成せられた速度は時速百哩位であつたと考へられる。とにかく速度の大なることにより鐵線の破壞力も大きなものと考へて良からう。

一九三九年の十一月二十日、民間機が鐵線につき當り、乘員が二名死亡したこともある。この速度の大なることにより、飛行機の損傷もひどいであらうが、時には、その鐵線の切斷されることもあらう。その防空力は、絶對とは決して言ひ得ない。

たゞ、その地區全般に渡つてこれを裝備し、敵の飛行士をしてその配備狀態の判斷が不可能のやうにして置けば、効果は大きいものと判斷出來る。

小なる區分への完全防備の時には、その區分の全周圍へ、環狀にこれを備へることが、有効とせられてゐる。但しこの時には、その環が大に過ぎると無効である。

五　ロンドンと阻塞氣球

今度の大戰勃發前、英國ではロンドンの外、十四の地區にこの阻塞氣球を備へた。それからその數も增大されたのであつた。

かくて急降下爆擊機も、これに接近することが出來ず、戰果が減少したと稱されてゐる。高速度の爆擊機は、その速度大なるため、高射砲を用ひる時間も短いし、機關銃の目標として固定し難いものである。且つ、戰鬪機の乘員が、その爆擊機の上空に在つても、これを見下した時、そのカモフラージュした翼が大地の色と區別つかず、これを見逃すことも屢々あるのである。もしこれを發見したとしても、その地上との距離が二百呎位の時は、急降下し難く、戰鬪上甚だ不利である。またかゝる際には、爆擊機の下方に出ることも有利であるが地面との距離がこんなに短かくては、方法がないのである。

それから阻塞氣球も高空からの正確なる爆擊に對しては無力である。勿論この時は、爆擊目標が明であることが必要であり、夜間は大體不可能であらう。月明か、または燈火管制の不完全な場合は、別問題ではあるが。

時には大編隊で空爆する時、先導機から、パラシュートをつけた照明彈を投下し、これに依つて爆擊目標を決定することもあるが、技術的に見て困難であらう。

次に夜間に、その地區全般を無差別に爆擊する方法もある。これは飛行士がその地理を完全に理解してゐて、二哩と間違はなければ出來ることである。今日の航空技術としては、何でもないことである。たとへ爆擊機と地上物との間に、密雲が介在してゐても可能のことである。ロンドンは直徑十二哩におよぶ、大なる爆擊目標とみなされてゐる。

一體爆彈投下の際は、その目標の上空で行へぬことは當然である。その飛行機の速度が落下彈に加はる故、その目標の餘程手前から投下しなくてはならぬ。從つて急降下をせぬ限り完全に命中するものとは限らぬ。

例へば、夜間ロンドンを空襲するとすれば、特殊の目標即ち鐵道の發着點、發電所または諸官衙を見わけることはむづかしいであらう。從つて無差別に爆擊し、火災を起さしめ、混亂を生ぜしめ、人心に衝擊を與へ、工業機關の運轉を休止せしめることもあらう。晝間といへども大都市の中の一小目標をつかむことはむづかしいものである。

ロンドンには大ドツクあり、工場地帶の巨大なものもある。これは先づ第一に狙はれるものであらう。

いづれにせよ、燈火管制はロンドン始め、大都市およびその他の地上造營物を保護するた

め重要なものである。英國では極めて嚴重にこれを督勵してゐた。

防空施設として、阻塞氣球は有効なものであるが、これだけでは全く不足である。近代の航空機の速度、行動半徑の增大、武裝兵器の性能の向上等により、防空施設は日進月歩の勢である。

六　對空監視隊と照空燈

英軍では一九一四年から一九一八年の經驗および近代航空機の進歩から見て、次第に嚴密なる防空作戰を考慮して來た。その第一は對空監視隊である。これはもと市民の篤志家の出願者を以てこれを組織し、もと英國の東南地區から始まつたものであつたが、現在は、英國全土におよんで居り、今では日夜對空監視に從事して居り、これには俸給も支拂つてゐる。これは高層建築の屋上、または野外にあつて、双眼鏡および航空機の方向を測定する機械を持つて居り、中央本部と電話の連絡をしてゐる。

この監視隊員はあらゆる階級の人から成つて居り、中には前世界大戰の老兵も加はつてゐる。そして英國の空軍とよく連絡を取り、飛行機にも搭乘させまたは、敵機の型式を教へ込まれる。この隊員は農村出身者が多いとのことである。

そしてこの隊員は、敵機襲來の時は、各地から本部へ電話でその機數、方向、高度等を通報する。防空本部ではこれによつて、その機の敵機であるか友軍のそれであるかを判斷し、その處置に取りかゝるのである。そしてその報告の集まるのは極めて早いと英軍は自慢してゐるのである。尤も、海岸駐在員または北海或はイギリス海峽の警備艦から、敵機來襲の報告があつてから、その敵機が出現するまで大體十分位のものであらう。

對空監視隊は、敵機の通過するらしき所に區處してあるが、ロンドンには置いてない。戰鬪機隊が諸所の飛行場から馳せ參じて來る。高射砲および照空燈が活動し始める。そして各々連合して防空に力めるのである。

照空燈と高射砲は夜間は完全に共同作戰に出るのであり。照空燈が、砲擊の目標に向けられ、射擊を可能ならしめる。またこれには聽音班が附屬し、敵機觀測の一助となつてゐる。これは空中の音源をさぐり、その方向へ照空燈を向ける。かくして高射砲の射擊目標の限界

が指示される。

一九一八年においては、聽音班の仕事は幼稚であつた。殊に音源の方向決定法も進歩してゐなかつた。當時は高射砲に分角器がつけられて居り、それによつて飛行機の音源の方向に砲を向けて射擊するのであつた。敵機の高度は經驗によつて判定するのである。しかも敵の飛行機の音の傳はるその速度も、その場で適宜に計算し、又彈丸の届達するまでの飛行機の飛行距離も見積つて、發砲するのであつた。これでも相當の威力であつたのだから全く隔世の感がある。

現代の照空燈は、晴れた夜には約三萬呎の上空に達すると稱せられる。但し普通の爆擊機は二萬呎以上は飛ばぬとされてゐる。これに聽音班も協力するのである。

七　高射砲と戰鬪機

近代の高射砲は、空軍と歩調を合せて發達して來てゐる。三・七吋口徑の高射砲は、三萬呎の上空まで射程があり、また四・五吋の高射砲は、砲口速度の大なることにより、はるかに短時間に二萬呎の上空に達する。もし二萬呎の上空に時速三百五十哩の爆擊機が現はれたとすれば、これを打つことも容易である。そして現代の高射砲は、自動裝置がしてあり、發射速度も大であるらしい。

高射砲の照準手は、望遠觀測機により、敵機の運動を追ふのである。この望遠鏡は、電氣裝置により、發射裝置と連絡してあると云はれてゐる。

戰鬪機は上昇力が強大でなくてはならない。敵機來襲の非常號音が、まだ消えない内に、早くも上昇してしまふものでなくてはならぬ。かくしてこそ始めて、上空の敵と交戰することが出來るのである。

英國では、その防備の必要上、防禦用の戰鬪機を製作してゐる。この種の飛行機は、上昇速度を暫時增大してきた。これは數分にして、高空に達し、襲來した敵機と同一高度を保ち得るに至るためである。

一般英國空軍の戰鬪機は、ドイツの爆擊機よりも時速六十哩以上速力が勝つてゐると云はれてゐる。併しあと數分にして敵機がその爆擊目標に近づく場合、この時速六十哩の差では

いくらか有利であるにせよ、敵を撃退するためには不足であるとの見方も行はれてゐる。

かく英國の防空施設は完全であると云はれてゐるが、英國が、ドイツの空軍の優勢なのに對抗しがたく、且、ドイツの根據地に近く本國があるため、この方面に全力をつくしてゐるのは、尤もと思はれる。

八　獨英の空軍機數

一九三九年の九月三日英佛が、ドイツに對して宣戰布告をした時、二つの大問題が一般の人の頭に浮んだのであつた。即ちドイツは直に英佛に對し空襲するであらうか。またこの英獨の空軍力はどうであつたらうか、の二つの問題であつた。

ドイツは開戰後數時間にしてロンドン上空にその爆擊機の大編隊を送り、天日爲に暗く、その爆彈の雨により、政府諸機關は機能を停止し、陸海軍兩省は混亂に陷り、人心不安を起し、驚くべき情態が現出せられるものと考へた人も多かつた。また人によると、かゝる空襲を宣戰布告前に敢行すると考へたものもあつた。ポーランド作戰の場合に於ても、ドイツが空軍を使用することは豫想せられて居り、その敢行を驚かぬものは少かつた。

また開戰當初において、ドイツの空軍の强大なることは定評があり、その實力が一般人士の大なる關心事であつた。一時これが著書、雜誌、論文、講演等の題目であり、强力なる爆彈毒ガス等が自由に討論せられて研究せられた。

ドイツが果してどれだけの空軍を有してゐるか、それからどれだけの實力を有してゐるかは輕々に斷定することは出來ない。勿論空軍の兵力量については、ドイツにも、英國にも、戰略的發表があつたものと解せられる。

また開戰當時二つの勢力が動いてゐた。一九一四年から一九一八年の世界大戰の慘害があまりにも大であつたので、英國においては、平和運動が相當に盛であり、またこれを支持したものも少くなかつた。ドイツが再軍備に着手し、その攻擊的態度が露骨となりつゝあつた時、英國は軍縮に努力してゐた。

この戰爭恐怖病はドイツを利すること大であつた。そして實際、この恐怖を强化する樣な宣傳も行はれてゐたらしい。毒ガスの威力ならびにその使用法が誇大に傳へられた。

ドイツはその空軍の量については、宣傳があると、一部の英人は稱してゐる。一九三九年には、その空軍訓練中に一二五〇回の事故があつたと公表してゐる。勿論その航空兵力量について明示してゐない。從つてその訓練を行つた機數も不明である。併しながら、その事故延回數から推して、その航空延哩數、乘員延人數を考へ、一般列國と同一の割合と假定するならば、ドイツの空軍は英國空軍の約四倍であるとの結論を得る。

またドイツの空軍は、第一線に立ち得る機數一萬を有してゐると稱してゐるものもある。一九三六年には、ドイツの軍用機の一ケ年の製作數は二萬乃至三萬と呼んでゐるものもあるが、この數字も疑問である。それはドイツが今度の大戰開始前までに十萬機を備へることになるからである。

今次の開戰後にドイツに赴いた一米人は、ドイツの空軍は三萬機と言つてゐる。これは豫備機を加へてのことかと思はれる。そして豫備機を加へるならば、英佛を合して三萬臺にもなるかも知れぬ。またドイツの最近の空軍は三千二百の第一線の機數を有してゐると見てゐるものもある。

この三年に亘つてドイツの製作機數は、英國のそれを凌いでゐたから、一九三九年の春までには、相當數の飛行機を所有してゐたらうし、英國を凌ぐこと著しいと信じなければならぬ。

九　獨英の第一線機數

さて、第一線の飛行機の問題に入る。これは現在編成部隊の機數であつて、この背後には巨大なる豫備隊があるのである。補充隊があるのである。そして一日もし百パーセントの事故があつたとしても、これを次から次へと補充してゆくのである。それだけの補充部隊を有しなくては、作戰上効果が期待出來ないのである。そしてその補充機の機數は、公表されるものではないのである。しかし現在英國では航空機製作に必死の努力を拂つてゐるので、その豫備補充機も充分に補給せられ、今日では、英國空軍は一日一日增强せられてゆくものと信ぜられる。

本年三月末までの英國空軍の平時編成は、國內防備用が二三七〇機、海外進攻用が四九〇

機であつた。これは艦隊航空部隊のものを含んでゐない。

さて英國空軍の增强の立ち遲れにつき、非常な非難がある。卽ち英國航空隊の部隊數の增加しないことである。併しこれは全然立ち遲れといふわけでもなく、英國空軍の部隊數が、その第一線機數を現はすと見てはならない。それは一隊十二機から成つてゐたものを、一隊十八機と改編した故、その兵力としては五十パーセント增强した筈であつた。これに對してまた防衛區域をせまくするとの批評もあるが、實際には半隊が單位となることも多いから、大した變化ではあるまい。

さて次に獨英の空軍の實質を比較して見たいと思ふ。

ドイツでは强大なる陸軍を常備してゐるので、その陸軍と呼應する大空軍を必要とする。これからは、空軍の活動を豫想しない、大陸軍の作戰はあり得ないのである。そして戰鬪機より爆擊機の大集團を必要とする。卽ち、積極的なる陸軍の大陸作戰ならびに對英作戰上、これを要するのである。併し英國では、その本土防禦の作戰を主要なるものとして來たので沿岸防備の大航空隊を常設して居り、水上機を含み、多數の偵察機を有してゐる。またその外に艦上機では爆擊機、魚雷攻擊機、戰鬪機、偵察機等を航空母艦および戰艦に搭載してゐる。

一九三九年のフランスの第一線航空兵力は、一一五〇機と推定されてゐる。英佛は、ドイツに對して共同防衛の立場にあり、空軍の共同作戰は、緊密なものと期待されてゐたのであつた。殊に今次の大戰勃發前、飛行機の製作工業の改編を斷行し、新鋭機建造に努力した。

また一方ドイツでは、開戰前、飛行機製作の能力增進に盡力し、その專門家の工場に來訪するものには、かなり思ひ切つて工場見學を許し、その空軍充實の狀況を目擊せしめたのであつた。これには勿論政策も伴つてゐたが、その實力をふりかへつて見る時、大陸において その空軍の最高實力を有してゐるものは、ドイツであることは、何人といへども疑ひ得ないであらう。

たゞドイツの空軍の新鋭機の性能については、英國邊では、これを高く評價しないものがある。しかし眞の性能は各國共にこれを秘密にして居り、かつ作戰上の關係もあつて、これは長い歷史の眼を以て觀察しなければ、正當な判斷は下し得ないであらう。たゞ一九三八年

十二月にドイツを訪問した米國のエリオット少佐は、ドイツ空軍の第一線部隊は一六二〇機と推定し、かつドイツの航空機製作工業の能率向上を認め　飛行機製作力は英國に勝ることを述べてゐることだけを附記して置く。

一〇　英の航空兵力量

英國では元來、ドイツの再軍備および列强の空軍の增强に着眼し、その空軍を、列强第一の空軍たらしむべく計畫してきた。又ドイツは空軍の總量を絶對に明示する筈もないので、英國の立場としては、ドイツ空軍の兵力量の判定が急務であつた。且ドイツとフランスとは互に戰端をひらく樣子もなかつたので、ドイツの航空兵力量の推定はいよ〳〵困難になつてきた。そしてフランスがドイツよりも大なる航空兵力を有してゐるとすれば、英國はその程度のものを所有する必要がある。たとへフランスと戰火の中に相見えるとしても、歐洲の列强が全然中立を守るとすれば、英佛は互角の空軍の戰鬪を交へることも假定できる。英佛二國は、僅かに一海峽を以て相對し、その重要都市は海岸から決して遠くないので、かゝる計畫も要求されてくる。

次に英獨開戰の場合、もし歐洲のフランス、オランダ、ベルギーの三國が中立を保持するならば、英國の空軍は、オランダとデンマークの中間の、ドイツの北西部を通過するに至るであらう。そしてこの距離は近代の航空機としては何でもないことである。それから兩國の首都について云へば、英國の空軍基地はベルリンから、前述のコースを取つて六百五十哩の地點であり、ロンドンはドイツの最も近い空軍基地から四百五十哩である。英國の空軍はベルリンよりも更に近いドイツの工業地帶に爆擊を加へることが、容易なのである。とにかくかゝる假定は、英國が列國の第一流の空軍力を持つてゐることの必要性を力說するものである。

英國の空軍充實策は、一九二三年六月二十六日にボールドヰン首相によつて、その基礎を置かれたのであつた。彼は議會において　その反對黨の首領にかく答辯したのである。「政府は英國の空軍に對しては、次の結論に達した。卽ち海軍、陸軍、インドならびに海外諸英領の必要に應ずる外、その本土を防衛し、また近距離に位置する國の最强の空軍の襲擊を防

禦するだけの航空兵力を充備する必要のあることを明言して置く。」これは勿論、軍備の永久計畫に屬することではあるが、國家防衛上、當面の問題でもあり、直に産業界にもひゞくのであつた。

そして第一に本土防衛のため、早急に五十二隊の航空兵力を設定することになつた。この結果、固有の空軍に、三十四隊を增加したことになつた。しかしワシントンの建艦制限の協定の線に沿ひ、空軍の制限の機運が動けば、英國政府はこれに應ずる意志があつたとも見られてゐる。

とにかく、一九二〇年には英國の空軍は二十三隊であり、一九三一年には四十二隊であつた。しかも當時の一隊は現在よりも少數の機數から成つてゐたのである。

一九一八年の休戰當時は、一八七隊あり、その要員は約三十萬人であつた。一九三五年の空軍大擴張案の成立した時、その要員は約三萬人であつた。しかし現大戰の開始せられるまでに、その要員は四倍になつたと云はれてゐる。

一一　英空軍とトレンチヤード

英國の空軍の首位には、大戰後、トレンチヤード子爵が居り、その卓越した識見と手腕により、よく空軍を統御してきた。彼は大戰中に空軍の獨立を計り、自らその空軍を指揮してきたのである。そして一九一八年に空軍省を作り、空軍關係の行政に、貢獻したのであつた。その後、英國空軍として、海外所領の防空問題も重壓を加へてき、更に、本土防衛の航空隊の設定にも盡したのである。英國の空軍大學は彼の設置したものである。そして一九三五年に第一次空軍大擴張案が通過するや、その擴張が、すら〳〵と運んだのは彼の功によるものと云はれてゐる。

ドイツはベルサイユの媾和會議において協定せられた軍用機の製作禁止ならびに民間機の制限を墨守したわけではなかつた。それのみならず、進んで空軍再建に進まんとしてゐる情勢が看取せられ、海陸空三軍の建設を宣言するや、これに警告が與へられた。その後如何に警告してもその効なく、ドイツは現ヒツトラー總統の活躍期に入り、國民の再建運動は目覺

しく、産業經濟軍事教育政治の各分野において、驚歎すべき更新を遂げ、英國が傳統の海軍力をたのみ、産業力を誇り、空軍再建を計畫しつゝも、その計畫は遲々たるもので、一九三五年國際會議の席上、英國首相も、最強の空軍力を背景としたドイツ代表と立ち打ちが出來なくなつてしまつたのであつた。

この結果、空軍相はその職を退いてしまつた。第一次空軍の大擴張計畫は議會の反對にあつたにせよ、漸く成立した位であつた。英國がその軍備において強大であつたとすれば、エチオピヤ問題　チエコスロバキヤ問題、ポーランド問題は、英に有利に展開したことであつたらう。

いづれにせよ、ドイツが非常な速度で空軍を再建したのは歴史の驚異であらう。

一二　ロンドン空襲と防空

近年ロンドンの防備が、空軍戰術として大問題であり、また最も大きな心勞の種でもあつた。一九三八年前のロンドンの防備は甚だ脆弱なもので、高射砲は舊式で照空燈は乏しく、その裝備は誠に貧弱なものであつた。

ロンドンは爆擊目標として好適のものである。大陸の空軍基地に近接してゐるし、ドツク工場を始め、諸官衙が明瞭な標的になつてゐる。敵の空軍がロンドンより西方に飛び、その航空に危險を增す如き愚を演ずる筈はないのである。併しながら、航空機の航續力と速力の增大した今日、そしてまた、列國が强大なる空軍を備へてきた現在、英國の防空上の脆弱地帶は、西および北方に擴張してゆくのは當然である。殊にロンドンの防空力が增大してゆけば、防空力の皆無か或は僅少な、しかも重要地點を敵が狙ふのは自然のことであらう。

テームス河口、チヤタム、サザンプトンの海軍基地、ロンドン郊外の工業地帶、中部ならびに西部地方の工業區域、所々の航空機製作工場、等は重要目標である。それから、鐵道の發着點、分岐點、橋梁もそれである。英國は小島であり、そこに工業ならびに軍事施設があるのであるから、大陸の列國と異り、空襲には極めて便利である。

英國の天候は急變が甚だ多く曇天のことがしば〳〵ある。これが英國の天候の特性であり、これが空襲の上天氣とされてゐる。これは演習においても實驗せられたことであるが、高度

を異にする多數の雲の層及集團は、飛行機を隱蔽する最上の手段である。かゝる際には敵機は、ひそかにロンドン上空に至り、僅に爆音をつたへるだけで、そこから機首を回らすことが容易である。

現在の爆擊機は速力が大であるため、海岸を通過すれば約一時間にして重要施設に到達することが出來るのである。勿論高射砲の攻擊に會ふにせよ、爆擊が行はれるものとしなくてはならない。

空中において敵機の侵入を防ぐため、これを空中に遮斷することは、最も困難なことである。このためには、戰鬪機を最も有利なる場所に配置し、空中偵察をたえず繼續し、また地上海岸等の防空監視隊の情報を集め、敵機の來襲に際しては、時を移さず、戰鬪機を出動せしめるのである。この一般戰鬪機ならびに防衛用の飛行機は、爆擊機よりも速力は早いが、一萬五千呎乃至二萬呎に上昇するには、數分を要する。また敵機を追擊する時に、敵機の速力が時速二百五十哩、追擊機が三百哩とすれば、追ひつくまでには、相當の時間を要することになる。

防空の困難なことは既に述べたのであるが、ロンドンが首府として、對空的にもろいことは有名な事實で、パリー、ローマ、ベルリン、モスクワのいづれも、これよりは、はるかに強靱なのである、殊に英國の大體三分の一の活動がこの一都市にまとめられて居り、空襲にさらされてゐるのである。それで開戰と同時に大編隊の航空部隊が直に襲擊し、ロンドンの猛爆が決行されることも考慮されて居り、萬一の際には、政府諸機關、銀行、實業界の首腦部、產業界の中央組織等が、ロンドンを引き上げることを覺悟して防空法を講じ、防空部隊の強化に力めてゐるのである。そして開戰前においては、英國空軍はフランス空軍と提携して、ドイツに當る作戰を立て、英軍の空軍基地をフランスに設定することを豫定してゐた。かくすれば、ドイツがロンドンを狙ふのと同樣、英空軍がベルリンを目指すのは、至つて容易のことであり、戰果は甚大なりとして安んじてゐた。但しこの場合空軍の補給ならびに充實は、英佛の海軍の海峽制覇に依つて絕對安全なものときめてかゝつてゐた。いづれにせよ英國では海軍を第一に考へる傳統をもつてゐるが、事實、英國として最も重大なものは、海軍であり、海軍なくしては英國の立ちゆく筈もなく、陸軍の行動もあり得ないのである。

昔から「防禦は敗退の第一歩なり」とせられてゐるが、これは、近代戰においても、不變の眞理である。ロンドンに防空隊を設置し、聽音器、高射砲、照空燈、阻塞氣球を備へ、鐵線を張りめぐらし、且つ戰鬪機を配備しても、その間から敵機の侵入することは、充分あり得ることである。故に敵機の眞の撃滅を企圖するならば、來襲した航空隊を撃墜するのは勿論、更にその基地を襲ひ、飛行場および補給所を爆破すべきである。その空軍の根據地のみならず、その航空機製作工場および補給路の全般を破壞しなくてはならない。この點から考慮して、英空軍では、戰鬪機に對して或る比率の爆撃機を備へることを原則とし、トレンチヤード卿を始め、空軍の幹部は、出來るだけ多くの爆撃機を建造しようと努力したのであつた。

一三　爆彈・燒夷彈と海軍機

さて積極的に敵空軍の基地を襲ひ爆撃する際、その標的によつて爆彈が異るのである。飛行場の爆撃には通常小型爆彈を用ひる。百ポンド位のものを使用するのである。又火藥庫ドック、大工場等に對しては、五百ポンド乃至千ポンドを使ふことが多い。もと〳〵爆彈には二ポンドから四千ポンド位まであるが、餘程命中率の良い場合でない限り、五百ポンド以上のものを使用するのは、不利とせられる。五百ポンドの爆彈でも、大變貴重なもので、最大の爆撃機でも十個位しか積んで行けない。

燒夷彈は、數オンスのものから、六乃至七ポンドのものが通例で、大型の軍用機ならば、二千個は積めるものである。これは大都市へ投下し、大火災を起さしめ、産業組織を破壞し人心の動搖を起すのを目的とする。火藥工場などは分散してゐるのが常であるから、命中率は百に一位であらうが、一旦命中すると莫大なる効果を擧げる。

ガス彈は、エチオピヤにおいて、イタリー空軍が使用した。

英國には空軍の外に、艦隊附屬の航空隊がある。これの乘員は海軍で養成し、その機關士は空軍から派遣してゐる。その航空母艦は、その構造上、滑走甲板に充分なる裝備を施すことが出來ぬので、戰鬪力に乏しく、これには、驅逐艦の護衛をつけて艦隊に隨伴せしめてゐる。海軍の航空機の任務は偵察、攻撃、防衛、爆撃等であるが、その中の重要なものは、爆

擊機である。但し敵の戰艦を爆擊するものは、基地から飛び出すのが普通であり、ウイルヘルムスハーフェンの艦船の爆擊は、基地から出發して行はれたものである。

英空軍は大陸作戰においては、陸軍と共同して活躍したと傳へられてゐる。その偵察機はジークフリード線を偵察して成功を收めたと稱してゐるが、英國の大陸作戰が、挫折した以上、陸軍との共同作戰を述べる必要もないであらう。又二十四人を運搬し得る大型輸送機製作にも成功したと云はれてゐる。

英國空軍の本來の使命は本土防衛と大陸作戰であらう。度々述べた如く、本土防衛と云つても純粹の防衛だけでは、完全に防衛出來るものでなく、又大陸作戰と云つても、本土の防衛なくしてこれが成立する理由はないのである。從つてこれは絶對的のものではないが、便宜上、この二に分けて述べることゝする。

一四　本土防衛と大陸作戰

英國が今般の大戰において、最初から英本土防衛に全力を拂つたのは、その空軍の、未だ完成してゐないためと考へてよからう。勿論前世界大戰において、ロンドンがドイツの空襲にさらされて、苦しい體驗をしたことは人も知つてゐる通りであり、その當時の政治家軍人にして、現在活躍してゐる人も多數あり、當時の少年にして成人して、社會の中堅として活動し、少年時代の空襲を思ひ起し、感慨にたえぬ人も多數あることゝ思ふ。かゝる人士から成つてゐる英國社會の各層は、防空に熱心にして、その準備、訓練に萬全を期してゐるのも尤もなことである。且世界大戰の經驗から更に研究をつゞけ、阻塞氣球を整備し、防空監視隊を組織し、海岸線はもとより、全國に亘つて警戒網を張つてゐるのは、周到な準備を表はすものであらう。ことにその高射砲を多數備へ、その命中率も漸時良好になつてきたと信ずべき理由もあるのである。故に本土防衛には、相當成績を擧げてゐると思はれる。

但し英國陸軍の大陸作戰においては、英國は良い戰果を得なかつたものと見て良からう。元來聯合軍は作戰上甚だ拙なるものである。國民を異にし、編成を異にし、裝備、訓練を異にしてゐる二國の軍の行動が合理的に進展せず、作戰もその指揮者の意圖の如く、發展しないのは、明なことである。そして、大陸に派遣した英佛の聯合軍に、英佛の空軍が參加した

のであるから、その連絡において、多くを期待出來なかつたのである。英國の空軍は、近年急速に充實しつゝある。しかし、大陸作戰に陸軍と共同して大なる戰果を收めたとは思へない。もと〳〵大陸作戰が、その目的を何處に持つてゐたか、これは一の大問題であるが、大陸作戰が失敗に終り、その英軍が本國へ引き上げてしまつた以上、大陸の空軍作戰は、やはり挫折したものと考へることも出來るのである。フランスの屈服によつて、英國空軍は大陸に基地を失つたことになり、大陸作戰には一の足場を失つたことゝなつた。またそして、本土防衛のための、警戒點を失つたことにもなる。但し、大陸作戰部隊が英國本土へ引きトげる際、空軍がその收容を掩護したのと、英國海軍の海峽制覇とにより、その部隊が全滅に陷らず、大體英國へ歸還することが出來たのは人の知る所である。

これによつて英國空軍は、今後本土防衛と、艦隊との共同に進めば、良いわけである。そして英國空軍が、如何なる大陸作戰に乘り出すか、一の問題であらう。

第十章　英國はいつまで戰へるか

一　今次大戰と英國

我々は前章において英國の經濟機構を檢討し、またその軍備を考察した。英國の經濟界の近況と、そしてその海軍と空軍を研究した。この大組織の英國が、現在の大戰において、どれだけの力を表はしたか、そして今表はしつゝあるか、更に將來どこまで實力を表はすか。これこそ世界の一大問題である。英國の動きは、世界の新しい動きの一の軌跡であり、そしてまた一つの新しい方向を暗示すると云つても良いであらう。

我々は、英國の過去について多くを知つてゐる。その歷史と傳統と外交とは、世界の研究の的となつてゐる。その文化も、世界一流のものとして、一の型をなしてゐる。最近に至るまで百五十年に亘り、英國が世界國家群の王座に君臨して來たことも事實である。これもそ

の制海權と自由貿易とによつて雄飛した結果であらう。僅か四千萬の人口を以てして、五億から六億の民を指導し、世界の四分の一の領土を保有し、世界の安定力として重きをなしてきた。その英國の言語を母語とする者は、世界中においては、一億七千四百萬に達すると言はれてゐる。また世界新聞の二分の一は英文であり、世界放送局の六割は英語を使用してゐるのである。

英國が、今度の世界大戰に對する準備はどうであつたか。第一次大戰以來、國內の諸問題にも係らず、その國家全般の活動は次第に平常に復したと云つて良いであらう。英國がその國家全般に受けた打擊は、相當甚大なものであつたにせよ、その經濟機構はよくこれに堪へて、英國本來の自由貿易の形態を以て進んで行つたのは明であつた。併し、ベルサイユ會議の結果に安んじて、世界の新しい動向に對して、英國は既に一歩遲れたものと見なくてはならない。その國際聯盟は次第に有名無實となり、老大國の政治的からくりにしても、その弱點を發揮して、これを蔽ふべくもなかつた。そしてまた諜報機關の完備を誇る國であるにかかはらず、ドイツの軍備再建を過少視したのであつた。

二　獨の軍備再建と英國

ドイツの陸軍は古來世界一流のものである。現在列國において行はれてゐる軍隊步調は、その創案になるものである。國民勇武にして規律正しく、體力豐かにして、愛國心强く、昔から大陸軍國として輝かしい歷史を持つてゐた。またその編成裝備優秀にして、重砲を始め幾多の優れた兵器を備へてゐる。前大戰に敗れたりとは云へ、傳統的に神速果敢深遠なる作戰と戰略とを備へてゐる。この國民が一人でも生きてゐる限り、大陸軍の再建は確實であつたのである。

大戰後の經濟その他の重壓に堪へて、再軍備を開始するや、世界は、たゞ驚異の眼を向けるだけであつた。制限せられたる十萬そこ〳〵の軍隊を育成し、將來、軍の幹部たるべきものを養成して置き、忽ちにして五十個師團の編成に成功したのである。そして空軍をも再建したことは、前に述べた通りである。

これに對して英國の軍備再建は、はるかに立ち遲れてゐた。議會方面の反對も强く、殊に

その空軍は幼稚なものであつた。その空軍の量、質共にドイツの比ではなかつた。そのため空軍再建に狂奔し、米國から多數の飛行機を買ひ入れる必要に迫られた程であつた。併し空軍の建設は國家としても、莫大なる負擔である。舊來の機型のものを多數製作したのでは、量だけは巨大なものとなるが、近代戰には無用の長物である。日に日に新鋭機を製作し、その新鋭機の量を增さなくてはならない。そして舊式のものはこれを、第一線部隊から除外してゆく。その上要員の訓練がある。補給の改善がある。作戰の研究が必要である　故に强大なる空軍建設は、國民の能力發揮の一つの尺度ともなり、またその經濟力の標準ともなるであらう。

英國はその空軍の貧弱なため、ロシアの空軍を賴らうとした。フランスの空軍を第一の友軍としたのであつたが、その質および量から云つて、英佛のものを合しても、ドイツの敵ではなかつたのであつた。それでロシアの空軍力を期待したのであつたが、その頃ロシアの空軍の內容は、列國の研究の的であつた。そして、その量においては、世界一流のものであつたが、その質において、また要員の訓練において完璧と稱し得るものではなかつたらしい。

この事情が、ミュンヘン會議を左右したと述べてゐる人もあるのである。

とにかく英國は、ドイツの空軍に壓倒せられてゐるのである。その兵力量は、種々に傳へられてゐるが、開戰當初には、ドイツの兵力よりもはるかに劣つてゐたのは確實であつた。この見地より、英本土防衛を第一の作戰とし、これに强大なる海軍力を加へて、本土の防衛と、英國の國家的生活を完うすることを期したのであつた。その點から云へば、英本土の防空作戰は、消極的ではあるが、機能を充分發揮してゐると云ふべきである。

三　英佛陸軍の大陸敗退

英國の陸軍は傳統的に、小規模のものであつた。英國では本來、本土防衛の部隊と、海外植民地の守備部隊との二種に別れて居り、その目的の差異によつて編成裝備等に異るものがあつた。

今般の開戰當時、英國はどの位の兵力を大陸へ送り得たであつただらうか。當時英國は五十萬の兵員があつたと云はれてゐる。英本土の正規の部隊、植民地の守備兵、印度の正規軍

ならびに豫備兵であつた。その外に短期の教育兵であつた。そして是等が合して約五十萬の陸軍となるのであるが、これは一九一四年の七十萬に比して減少してゐる。

一九一四年に英國は平時編成の陸軍を、戰時においては、忽ちにして巨大なるものに增强し得ると豪語してゐた。とにかく前大戰には八百五十萬の兵員が動員されたのであつた。

それで今次の大陸作戰にどれだけの兵員を派遣したか、これは勿論發表されてはゐないから、今の所正確な數字を知ることは出來ないが、英國の動員狀況から見て、二十數ケ師團と推定して良いと考へる。それでこの大戰において、英國が何故、思ひ切つた大動員を敢行しなかつたのであるか、これは種々の見地から論ずることが可能であらうか、前大戰の慘禍の完全に忘却出來ぬ今日、國民全般に、鬪志が乏しかつた一の證明とも考へられる。英國本土は防空部隊と空軍に任せるにせよ、又その海は海軍の制覇に委ねるにせよ、大陸へ大軍を送らなければ、完全にドイツを擊滅することは出來ぬのである。近代戰において、如何に海上から封鎖を行ひ、空中から大編隊を以て爆擊を敢行しても、やはり陸軍を以て、現地に踏み込まなければ、完全なる勝利は得られないのである。とにかく、大陸へ大動員をしなかつたことに、一の失敗がある。國家としての迫力の缺如があるのである。

英國は、フランスの陸軍を唯一の友軍として作戰した。本來、佛の陸軍は、その大とその訓練の優秀とにおいて世界一流のものと云つて良からう。その野砲は昔から特殊の威力を持つて居り、その兵器も充實して居り、ドイツの陸軍と比して、決して見劣りするものでないけれども、あの大陸軍國フランスも、昔日のフランスではない。政變の夥しいことと、國民の鬪志の不足とにより、その戰鬪力を、甚しく低下してゐる。兵器のみ豐富であつても、大豫算を編んで、軍隊の機械化、近代裝備の完結に進むことなく、最早、第一流の近代的陸軍ではなくなつてしまつたのである。同一の兵器を所持せしめ、同一編成のフランスとドイツの一ケ聯隊を戰はしめたなら、果してどちらが勝つかは、不明であると見られてゐるが、英佛聯合軍の作戰は、あまりにも悲慘なものであつた。マジノの堅塞を持つてゐながら、忽ちにして敗退してしまつたのである。マジノの要塞の防禦線は、世界的のものであつた。その築城技術は近代科學の粹を集め、如何なる攻擊を以てしても難攻不落と號されてゐた。それが忽ちにしてドイツ軍の突破する所となつてしまつた。築城技術を誇り、これに據つて、ひ

たすら防戰に力めんとしたことが敗因の第一要素である。人間の作つた要塞であつて、陷らぬものなしである。要塞にのみ據つて、攻擊を忘れてゐたフランス軍は、近代の精鋭の地位から轉落してしまつたのだ。

かゝるフランス軍を賴つてゐた英軍の大陸作戰は、その終末が、大陸から敗退することとなつたのも必然であつた。マジノ線によつて、ドイツを防ぎ得ると考へた佛軍の一大失策もさることながら、大陸に僅か二十數ケ師團を派遣して、ドイツの大陸軍を制壓しようとした英軍の作戰も亦笑止の極である。最もフランスの大軍を動かして、ドイツに打擊を加へしめ自國の本土防禦を完全にした英國の外交的方途は、英國傳統の謀略であり、一の成功とも見られるであらう。

四　英海軍と制海權

英國の陸軍に比し海軍は、その堅實な强味をもつてゐる。それが英國本來の生きる道なのである。英國はその大海軍を以て、ドイツの封鎖を企てたのであつたが、ドイツはその國情をよく自覺して居り、克くこれに打ち勝つたのであつた。ドイツは資源に乏しく、萬一戰爭を始めた場合、數ケ月にして食糧問題から行きつまると說く人があつたが、これは英米の宣傳であると思はれる。英米の宣傳も隨分巧妙なものであるが、ドイツは今や昔日のドイツではないのである。中央歐洲に民族的大國家を建設し、國家の大統制を堅くし、全體主義の理想を打ち立てて進み、食糧政策に、確實なる見通しをつけてゐる。食糧の點で、ロシヤに、不足量を仰ぐ方針の下に、以前からロシヤと經濟交涉を營んでゐる。ロシヤとドイツは比較的親密なのである。ロシヤの陸軍の首腦部は、ドイツ陸軍を崇拜すること甚しく、ロシヤ軍はドイツ軍に敵し得ないことを信じ、割合に軍部間の空氣は數年前から良くなつてゐるのである。ロシヤの農產物を購入し、歐洲中央部の石油資源を確保して、今やドイツは英國の封鎖を恐れなくなつてゐる。

ドイツは、封鎖を恐れる必要はなくなつてゐる。中央歐洲における國域の擴張によつて補給の道が立つ上、ロシヤとは經濟交涉を行つて物資を仰ぐことが出來、更に近代工業の代用品創案により、工業原料の不足を征服してしまつてゐるので、自給自足の體制が、確立され

たわけである。たゞ昨年以來の占領地の復興が當面の大問題である。その占領地の行政機構を改編し、その經濟組織を改良し、新しき理想の國土建設を急いでゐるのである。

ドイツは植民地政策に熱心である。その計畫は天才的ではなく、むしろ思慮精密で用意周到を以つて鳴つてゐる。今次の作戰後の移民等も數年前からの研究の賜ではあるまいか。

かく大陸に堅實なる基礎のあるドイツではあるが、その海軍力の乏しいことは、第一の弱點であらう。その海軍建設の目覺しいことは、世の認める所であり、前大戰以來、潛水艦戰術を以て世を驚倒せしめてゐる。巨大なる英國に對抗するためには、ゲリラ戰術を以て、その商船を襲擊することと、英國の艦艇の奇襲作戰とにより、英國海軍の漸減をはかつたのが前大戰の戰術であつたが、今回の作戰にも略々同一の戰歷をくりかへしてゐる。

英國はドイツ海軍によりどれだけの打擊を受けてゐるか。是は今後の英國の動向を決定する一の鍵であらう。英國が巨大なる主力艦隊を有しながら、米國から、小驅逐艦を多數買ひ入れたことは何を語るものであらうか。これは主力艦がその備砲、裝甲において、絕大なる力を有して居り、大艦隊の重鎭として、最後の決を與へることは明であるが、今次の海戰の狀況としては、主力艦の活躍の分野が限定せられてゐることによるのである。ドイツは英國の海軍そのものの擊滅を目的としてゐる。英國がその傳統の制海權を失はない限り、英國の打倒はないのである。英國は今尙、地中海の制海權をも保有してゐる。これが防共樞軸の大なる敵である。英國艦隊を擊滅するために、ドイツはゲリラ戰以外に方法はないのである。そのポケット戰艦は、近代裝備を合成した新鋭であり、速力その他において、大艦隊の中の一大要素となつてゐる。併しポケット戰艦を含んだ全艦隊を以てしても、正面的決戰は困難である。そこでその戰歷を誇る潛水艦戰術に出る外はないのである。そして近代の優秀なるドイツ潛水艦に對するには、多數の小艦艇が必要になつて來る。又航空部隊が必要となつて來る。この主力艦の活動の分野の乏しいことと、潛水艦制壓とのため急速に小艦艇の整備を要してゐるのである。あの大艦隊を保持してゐる英國が、これ程の苦辛をしてゐるのである。それによつても、ドイツ潛水艦の活動が理解出來るのである。又英海軍がドイツ潛水艦に對して、用意不足が看取される。

勿論これは、軍隊の自衞上その小艦艇の充實に力めてゐるのは明であるが、英海軍の負擔

は甚だ重いのである。英國海軍は、ドイツの艦隊を制壓することを目的としてゐるが、もう一つ英國の生存權をその手中に握つてゐるのである。

五　ドイツの潛水艦戰術

英國は小島に人口密度の大なる國家を形成し、而も之を保全する運命を持つてゐる。その食糧がどれだけの豫備量を有してゐるかは、已に前に述べた通りである。英國の本土の農產物增收が計畫せられ、又開戰以來食糧の統制を早くも實行してゐる。防空設備の充實を急ぎつゝある。故に國內食糧の保有量は、案外强いものであらう。併し、大陸作戰を行ひ、又急速に軍需工業を擴大しつゝある。從つてその食糧の保有量に影響してゐるのは勿論である。又軍需工場の增員、航空機工業の充實のため、農村から勞力が動員せられてゐる。更にドイツ潛水艦の襲擊により、その船舶の減耗が考慮されなくてはならない。この船舶減耗を補充するために、造船業が一段と强化せられなくてはならない。又防空監視隊の設置は、大都市の高層建築の屋上又は、農村原野などが、その勤務所であるが、英國ではこれに農村の青年を多く用ひてゐる事實がある。そして更に大陸作戰の動員等が原因となつて、農村の勞力が減少してゐることは明瞭な事實である。勿論英本土の農產物が、大英帝國の唯一の食糧ではないのであるから、これだけを以て英國食糧の減少を論ずるのは早計であるが、英本國の農產物はそのまゝ直に國民の食糧として使用出來るのである。この點において英國では、これを確保してゐるのであるが、これが減收は、免れ得ない事實であらう。

更に英國では、英本土の農業に期待し難く、英本土においては、工業を主として、その生產品を海外へ輸出し、それによつて食糧を海外から購入することが最も經濟的であり、最も合理的なのである。そして今や戰時狀態に入つたため、その輸出品の部門を、軍需品のそれに切りかへ、その軍備の充實に全力をあげてゐる。英國本來の舊式の航空機のみに滿足出來ず性能優秀なる新鋭機を多數工作すべく非常なる力をつくしてゐる。故に平和產業の打擊は甚大なものであらう。併し何といつても、英國人も第一に食はねばならない。卽ち工業を食糧に變へなくてはならない。海外投資から生ずる利益も、その英國民の重要なる生活原理であり、又海外資本を食つて、生存することも或る期間は可能であらう。併し第一に工業品を

輸出し、それによつて農産物を輸入しなくてはならない。そして又、工業の原料も輸入しなくてはならない。この輸入機關は、即ち船舶である。船舶が工業品を輸出し、生活の第一要件たる食糧を輸入する。そして又、その工業原料品を輸入する。更に米國からも軍需品を多量に積んでくるのである。この船舶を潰滅することは、取りも直さず、生活を覆すことである。即ち英國の生存條件を奪ふことである。この意味に於て、ドイツ潜水艦の英國通商路襲撃は、重要なる作戰なのである。

六　地中海制海權と獨のゲリラ戰術

英國は依然として地中海の制海權を保持してゐる。是も早く覆さなくては、ドイツの作戰は進行しないのである。地中海の制海權の喪失は、英國海軍の作戰上の大損失であることは云ふまでもないが、通商上の後退の第一歩となるのである。英國が資源運搬のための、最も重要なるルートを失ふならば、英國の船舶の總ては、希望岬を迂回するに至り、その海運界の打撃は激甚なものであり、自國への食糧その他の資材の運送は勿論、その船舶業は忽ちにして衰へ、英國富源の主要物の一を失ふこととなる。世界海運界の王者を以て任じてゐる英國が、地中海の水路航行の自由を失ふ時は、英國生存權の減少を示す時であらう。

英國は戰時においても造船能力は急速に高められるのであるが、この造船能力も地中海の海制海權を失へば、發揮しても凡そ意味ない事になつてしまふ。そして更にこれは、東洋方面經營の退却の第一聲ともなるであらう。又印度の守備兵は、英國陸軍の重大要員であるが、その輸送にも、長時日を有し、英本土防衛ならびに、對外作戰に一の弱味を作ることとなるのである。

英國はかく通商によつて生存してゐる國である。又海外植民地によつて生活してゐる國である。故にその通商路を潰滅することが、必須の作戰となつてくるのである。ドイツは、現在の英海軍の體制上ならびに、その周圍の條件上、潜水艦を以て英國通商路の潰滅を目標として進むであらう。そして又、ゲリラ戰を以て、英國海軍を減耗する策に出るのは當然であらう。

かくドイツは、英國に對してあくまで長期戰の覺悟を以て向ふであらう。

即ち長期のゲリラ戰を以て、通商路の一掃に努力するであらう。

ドイツとして、英國の大陸作戰を敗退せしめた結果は、史上華々しいものであらう。併しその英軍の大陸を引き上げた際の收容は、困難を極めたものと信じられる。故にその際、空軍を動員して、その運送船舶を爆擊し、相當の戰果を收めたことは事實であるが、ドイツの主力艦の不足、その艦隊の編成の點で、英國海軍と對戰することは不可能であつた。英海軍は、全艦隊揃つて大海戰を展開する機會を持たなかつたのであるが、その海軍の重壓によつて、英軍の大陸引揚を終ることが出來たのである。英國では、昔から海軍を主として考へ、陸軍を從とする傳統があり、海軍があるから、陸軍が進出し、陸軍が敗れる時は、海軍がその後を引き受けるのを原則としてゐる。英國の大陸作戰が失敗に終り、その本國引上げが敢行出來たのは、一に海軍の力であつた。

ドイツの英本土空襲は、實に猛烈なものであつた。ドイツの爆擊機の性能が優秀なことを疑ふものは世界にないであらう。その國民性、鬪志、教育、訓練の總てが合一して、今日の空軍を作りあげたものである。そして大陸に大陸軍を擁し、最大の空軍によつて、大陸ならびに對英作戰を決行してゐるのである。そして量においても勝れてゐるが、その要員の訓練も亦立派なものであり、ポーランド作戰以來、空軍作戰に輝しい戰歷を積んで來た。そしてロンドンは勿論、英國の工業地帶を廣く爆擊してゐる。英國で最も防空施設の完備した所はロンドンであり、これは最初に防空施設を完成したことにも依ると思ふ。そして又更に、次第にその他の地區にも、これを及ぼしてゐる。

そしてその空襲の規模の大にして激烈なことは、想像の外である。一體英國の最も空襲を受け易い所は海岸地方である。そのポートランド港の襲擊は、英國に相當大きな損害を與へたのであつた。その際の空中戰に於て英機は約四十を失ひ、ドイツも十數機の損害ありと云はれ、ポートランド港内の英船舶にして火災を起せるもの、又は爆發を起して沈沒せるものもあつたのであつた。更にドイツが英國海岸線を連日猛擊してゐるのは人の知る所であるが、ドーバー港ならびにポーツマスも、その空爆にさらされてゐる。ポーツマスは英國としても防備の強化せられてゐる所であり、海軍の作戰上重要地點を要してゐる。そして之を襲擊したドイツ空軍との間には壯烈なる空中戰が展開せられ、テームス河口一帶に渡り、英軍の被

害も相當あつたらしい。尙、イングランド各地をも空襲してゐるが、その戰果については、明確な報道を入手しえないことが多い。

七　ロンドン空襲と英本土上陸作戰

ロンドン襲擊は、ドイツ空軍の重大作戰の一であらう。一小地域に、巨大なる人口を藏し大英帝國の中央機關を集めてゐるのであるから、爆擊目標としては好適のものである。殊にその近郊には、軍需工場及び、飛行場を有してゐるので、空中作戰として誠に好適のものである。それで、ロンドンが度々空襲せられ、ロンドンのピカデリー、サーカスから程遠からぬ、クロイドン空港が襲擊された。そしてその附近において死傷者を出したのであつた。このクロイドン空港を八月中旬に襲擊した時の獨空軍の編隊は、他に類例を見ざる大規模のものと云はれてゐる。尙その上、ロンドンの中心部に攻擊を加へたことは屢々あり、ジョンブルを以て任じてゐる英國の心膽を寒からしめてゐる。テームス河畔の軍事施設は特に被害が甚しいらしい。そして九月に入つてから、ロンドン空襲は依然として猛烈であつて、バツキンガム宮殿にも爆彈が命中し、その一部を破壞し、その外、セントポール寺院にも被害があつたのであつた。ロンドンは全面的に空襲を受けてゐるものと見て良く、ロンドンの中心商業街を始め、イーストエンドの方面まで、不安に戰慄してゐるのである。併しロンドンの防空施設は完備してゐるものと云ふべく、あの空襲に堪へてゐる所を研究しなくてはならぬ。阻塞氣球の鐵線も、相當の効果あるものゝ如く、その上、高射砲の煙幕も張られることであらう。ドイツ空軍の活動を阻害してゐるのも事實である。又、英の空軍の活動も、ドイツのそれに比肩しうるとは思へないが、消極的防禦程度には、相當の戰果を上げてゐる。英空軍の減耗率こそ、重要なるものであらう。

また英空軍はドイツ各地を爆擊してゐる。英國の宣傳謀略は歷史的のものであり、直にその發表を信ずるわけに行かぬが、ベルリンを襲ひ、ウンター、デン、リンデンに爆彈を投じ、またマグデブルク、ミユンヘン、ハムブルク等を爆擊してゐる。大陸作戰に失敗した以上、英國は空軍を以て、ドイツ各地を爆擊する外なく、更に、海上封鎖を强化し、ドイツを經濟的に隔絕することが唯一の作戰であらう。

更に英國の工場地帶を見なくてはならない。ロンドンをはじめ南部及び東南部地方は、ドイツ空軍の最も空襲し易い所である故、その損害は莫大なものであるが、英國の工場地帶は相當に分散して居り、ロンドンよりも、はるかに防禦し易い地點にある。その工場が、どれだけの機能を擧げてゐるか、また空襲後にどれだけ機能を回復するか、そして又米國等よりの補給により、航空機の製作能力が、どこまで增强されるか、更に米國より航空機はどれだけ購入されるか、又その要員は如何にして急速に養成せられるか。これが將來の戰局を決定する要素となるであらう。

一九四〇年の秋におけるドイツの英國攻擊は、その猛烈と大規模とにおいて、開戰以來のものと云ひ得るであらう。英軍の大陸より引上げて以來、ドイツは、その勝ち誇つた勢を以つて一擧英本土上陸を決行するのではないかと見られてゐた。英本土上陸作戰は、歷史以來の英國の危機と云ふべく、これが成功するか否かが英國の生死を決定するであらう。

これは歷史上の一の夢であつたとも言へる。あの大ナポレオンにしても、海軍力の乏しきため、制海權を把握しえず、英本土上陸の大望を實現することが出來なかつた。

今回の英本土上陸作戰は、ナポレオンの時代とその條件を異にしてゐる。世界大戰以來のドイツの復興全くなつて、歐洲にドイツがイタリーと提携して、新理想の國家群を形成してゐる時である。歐洲大陸の安定勢力として、ドイツがその第一步をふみ出した時でもある。

經濟的に軍事的に、非常に有利な條件を備へてきてゐるのである。

先づ我々は、英本土上陸が果して英國の生死を決するか否やを研究する必要があらう。

英本國はその地域小にして、海岸線長く、大英帝國の心臟部となつてゐる。その地勢上から見ても、ドイツ陸軍の作戰分野として、決して困難なものではあるまい。且つ英國の陸軍が貧弱なことは既に述べた通りであり、防空監視隊、沿岸防備隊等、國民としての國防組織は、圓滑に行はれてゐるが、その陸軍を以て、ドイツ陸軍と雌雄を決することは絕對に不可能である。英國の海峽植民地始め屬領諸國には、それぞれ守備軍を設けてあり、それらが英陸軍の重要なる部隊をなしてゐるが、その部隊たるや、本土よりの部隊の增援なくして、その各植民地の守備を完うすることを、最大限の目標としてゐる。その編成が種々で、基幹部隊の裝備も全く異つて居り、これを英本土へ移動したとしても、その機械化の程度が甚しく

異り、その軍の統率、作戰の合理化は思ひも依らぬことである。又植民地は今や平靜とは云ひがたく、印度の例を取るならば、前大戰に歐洲戰線に出動し、大英帝國保全に全力を盡した時代と條件が一ではないし、又これを引き上げるだけの餘裕はない筈である。

且つ英國陸軍と共同すべき、英空軍の實力は、ドイツのそれに決して及ばないことは、既に確定的の事實である。故にドイツの陸軍が上陸した曉は、その空軍作戰と呼應して一擧に英國ロンドンは勿論、その工業地帶、海灣等、英國の生存の根底たるべき地域を占領しうるであらう。

八　英本土强行上陸

英米の宣傳が如何に巧妙なるにせよ、英本土防備の脆弱なことは蔽ひ得ない事實である。且つドイツの軍隊は、その裝備給與等、少しの缺點もなく、士氣旺盛、國家の總力を擧げて作戰に邁進してゐる。

故に一旦ドイツの陸軍部隊が英國海岸に一歩踏み込むならば、そしてロンドンその他を占領するならば、大英帝國の心臟部が、その機能を停止するのである。英國は萬一に備へ、その國政の中央機關、經濟の首腦部を他へ移轉させる用意ありとしてゐるが、この實現は事實上大英帝國滅亡の第一の兆候と考へなくてはなるまい。英國の如き大國家が、近代機構の國家が首都を失へば、その末梢部まで運轉がにぶり、世界の王座から退却するのは萬人の均しく認める所であらう。

英本土の上陸作戰に第一に必要なものは、海軍と空軍とである。如何に精鋭なるドイツ陸軍と雖も、海軍空軍の共同なくしては絶對に進攻不可能であらう。その上陸地點の選定、部隊の輸送、時期の決定等、作戰準備が如何に膨大なるものであるかは、吾人の想像も及ばぬ所であらう。その作戰に於て、用意周到なのはドイツの特性であるから、準備には遺漏ないのを期した事であらう。

とにかく英國の周圍の水路は、ドイツの海軍の既に詳細に研究せる所である。その水深、潮流等、一として、不明なものはなく、大部隊の輸送船團の編成も、極めて統密に計畫したものであらう。そしてドイツの諜報網の活動により、英國海邊の防備、空軍の動向、英國海